# 江戸の暗黒街

池波正太郎

角川文庫

江戸の暗黒街

ひくく声をかけて、いきなり女に飛びかかった小平次は恐しい力で首をしめあげ、すばやく短刀で心の臓を一突きに刺し通した。その時、恐怖に引きつった青白い顔でじっとみつめる小女と顔を合わせてしまった。

〈見られた……。生かしてはおけない〉

男は江戸の暗黒街でならす名うての殺し屋で、今度の仕事は茶問屋の旦那の妾殺しだった。

色と欲につかれた江戸の闇に生きる男女の哀しい運命のあやを描いた傑作集。

好評発売中!

新しいエンタテインメントとドキュメントの月刊誌

野性時代

毎月24日発売　角川書店

カバー　玉井ヒロテル

江戸の暗黒街

池波正太郎

角川文庫

江戸の暗黒街
池波正太郎

角川文庫　緑　三二三
—12—
340

定価340円　0193-132312-0946(0)

角川文庫
池波正太郎作品集

人斬り半次郎（幕末編）
人斬り半次郎（賊将編）
にっぽん怪盗伝
堀部安兵衛（上）
堀部安兵衛（下）
近藤勇白書
戦国幻想曲
英雄にっぽん
夜の戦士（上）
夜の戦士（下）
仇討ち
江戸の暗黒街
西郷隆盛
炎の武士
男のリズム
ト仏最後の旅
戦国と幕末

カバー　暁美術印刷

# 江戸の暗黒街

池波正太郎

角川文庫 4241

江戸の暗黒街

池波正太郎

角川文庫
4241

# 江戸の暗黒街

池波正太郎

角川文庫 4241

# 目次

おみよは見た　五
だれも知らない　四一
白痴（こけ）　七四
男の毒　一一三
女毒（おんなどく）　一五三
殺（ころし）　一九三
縄張り（しまり）　二三〇
罪　二六九

解説　中島梓　三〇一

# おみよは見た

青堀の小平次の直感が、
（いまだ。殺れ!!）
と、彼自身にすすめてきた。
たたきつけるような、にわか雨であった。
初夏の夕暮れであったが、あたりいちめんに雨の幕がたちこめ、道行く人の気配もなかった。
土手道の左がわは六尺ほどの崖になってい、その下に、目ざす相手の家がある。
深川の土地でもこのあたりは、むかし、島になっていたとかで、その後、たびたび幕府の手によって埋めたてがおこなわれ、大名の下屋敷がたちならぶようになった。
その一角に、大島町の飛び地があり、町家もある。
商店もいくらかはあるが、小じんまりとした、しゃれたかまえの別荘ふうの家がこのあたりには多い。
そのころの深川は、水郷をおもわせる美しい風光で、にぎやかな市中にくらべると、同じ江戸

でも別天地のおもむきがあった。

小平次が立っている土手道の右がわは、松平下総守の抱屋敷で、宏大な屋敷をかこむ土塀が江戸湾の入海ぎわまでつづいている。

いま、小平次が雨にたたかれながら見つめている家は三間ほどの小さなものだが、竹を植えこんだ庭もひろく、家のつくりもなかなか凝っていた。

ここに、女がひとり住んでいる。

名をお八重といい、二年前までは、浅草の東本願寺・境内の〔井筒や〕という水茶屋の茶くみ女をしていた女である。

いまのお八重は、日本橋・通り一丁目の茶問屋で大金持ちの〔八幡屋・利兵衛〕のかこいものであった。

そのお八重を、

「殺れ」

と命じられ、金二十五両で殺しをひきうけた青堀の小平次なのである。

金ずくで〔人殺し〕を何度もひきうけ、かつて一度もしくじったことのない小平次だけに、

(女なぞ殺るのに……なにも、おれをたのむことはねえじゃあねえか)

自信にみちていた。

なぜ、お八重が殺されなくてはならないのか……。



それは、小平次の知ったことではない。

いまの江戸には、小平次のように金ずくで人殺しをひきうける男たちが何人もいるはずである。

今日は、いちおう様子を見に来た小平次であった。

お八重の家の裏がわを見下す土手道へ立ったとき、驟雨がきた。

その雨の中を、たったいま、お八重のところに使われている小女が、傘をさして買物に出て行ったところだ。

殺しの期限は、

「なるべく早く……」

ということで、何も今日が今日、殺ってのけなくともよかったのだが、殺し屋としての、ぬきさしならぬ直感が、

(殺ってしまえ)

と、ささやいてきたのである。

小平次は、土手道から崖をつたい、庭の竹の植えこみの中へ降りた。

庭を左へまわると、障子を開けはなしたままの奥座敷で、お八重が化粧にかかっているうしろ姿が見えた。

顔は見えぬが洗い髪で、すんなりとしたくびすじがぬけるように白く、なよやかな肩から背にかけての曲線が、にわかに腰のあたりでむっちりと張り出している。

（なるほど……殺ってしまうには、もったいねえようなものだが……）

にやりと小平次は笑った。

口もとが笑っても、眼は笑っていず、その眼の青い光が凝ってするどくなったかとおもうと、彼は音もなく走って、ふかい軒下から縁がわへ飛びあがり、

「お八重さんかえ？」

ひくく、声をかけた。

ぎょっとして振り向いたお八重のくびが、飛びかかった小平次の両手にぐいとしめつけられた。声も出ぬうち、男の強い恐るべきちからでしめつけられ、お八重が白眼をむき、たちまちに気をうしなった。

小平次の右手が、するりとふところへ入る。

短刀が引きぬかれ、女の心の臓を一突に刺し通した。

雨の声が屋根に鳴っている。

このひどい雨音では、たとえ、お八重が叫び声をあげたとしても、外へはもれなかったろう。

だから、さすがの小平次も、勝手口の戸が開いた音が耳へ入らなかったのだ。

完全に死んだお八重をたしかめて彼は勝手口から出ようとした。ふたたび、泥にすべる崖をのぼって土手道へ出るのは時間がかかると考えたからだ。

腰をあげた瞬間、小平次が、はっとした。



勝手口へ通ずる障子が開いて、いまさっき、この家から出て行ったばかりの凍りついたような小女の顔が、こちらを見つめていたのである。

（見られた……）

であった。

こうなった以上、この小女も生かしてはおけない。

十四、五歳の、やせて青い顔つきをした下女なのである。

「おい……ねえちゃん……」

ゆっくりと、おだやかに声をかけておいて、小平次が一歩ふみ出したとたんであった。

「きゃあっ……」

悲鳴をあげ、少女が逃げた。

「野郎……」

追いすがった小平次の手が、一瞬おそかった。

少女は勝手口から外へ……堀川に面した道へ、ころがるように飛び出してしまった。

「畜生め!!」

小平次は舌うちした。

追って、道へ出ると、少女が堀川にかかった橋をわたりかけているところだ。

橋の向うから漁師らしい男が四人、こちらへわたって来る。

（いけねえ……）

小平次はあきらめ、身をひるがえして反対の方向へ逃げた。

間もなく、ずぶぬれの彼は永代橋をわたり、箱崎町から小網町へ出た。

追って来る者はなかった。

しかし小平次は、あの小女に、はっきりと顔を見られている。

## 一

青堀の小平次は、

（なんとしても、あの小女を殺ってしまわなくてはならねえ）

と、おもった。

しかし、当分は深川へは足を向けるわけにはいかない。

八幡屋利兵衛の妾殺しを小平次へ命じたのは、羽沢の嘉兵衛である。

嘉兵衛は、六十をこえた老齢ながら、本所・両国一帯の盛り場を縄張りにしている香具師の元締だ。

息子夫婦に、本所の回向院近くへ〔河半〕という大きな料理茶屋を経営させ、自分もそこに住み暮している。

何千人という香具師の上に君臨し、盛り場の物売りから見世物まで、いっさいの権利をつかんでいる嘉兵衛は、江戸の暗黒街の中でも、ひどく羽ぶりのきいた男である。

こうした男だから、単なる香具師の元締だけですむものではない。お上の眼がとどかぬ場所で金になることなら、どんなことでもしてのける。

青堀の小平次のような殺し屋をつかい、人を殺めることも平気でする。もっとも絶対に失敗がないと見きわめをつけての上のことだが……。

今度の妾殺しを、羽沢の嘉兵衛はだれにたのまれたものか……それは小平次も知らぬし、知ろうともおもわない。

だれかが、羽沢の元締に、

「お八重を殺してくれ」

と、たのみ、莫大な金をつみ、そのうちの、おそらく三分ノ二を嘉兵衛がふところへ入れ、残りの金を小平次へわたし、殺しを命じたのだ。

女の殺しで、金二十五両。現代の金にして、およそ百万円にもなろうか。まず、小平次の相場といってよいだろう。

小平次は、あの日の夜ふけに、料理茶屋〔河半〕をたずね、羽沢の嘉兵衛へ、

「すませました」

と報告し、半分の十二両二分をもらった。

「いうまでもねえことだが……」

嘉兵衛はしわだらけの、猿のように小さい老顔へほろにがい笑いをうかべ、
「だれの眼にもとまらなかったな」
と、いった。
小平次は、みじんも顔色を変えず、
「あっしのしたことでございますよ」
「そうだろうとも。いや、ごくろうだった」
もしも正直に、
「いえ実は……あの家の小女に顔を見られてしまいました」
などと、嘉兵衛に告げたなら、とんでもないことになる。
そのときは一応、
「そいつは困ったものだね」
ちょいと顔をしかめるだけで、小平次を帰してくれるだろうけれども、二日とたたぬうち、今度は小平次を上まわる刺客が、小平次を暗殺してしまうことだろう。
だから小平次、あれからは、なんとかして、あの小女を、
(消してしまわねえじゃあ、どうにもならねえ)
気が気ではなかった。
お八重殺しの探索は、町方(町奉行所)の手ですすめられていよう。あの小女は、小平次の人



相を告げたにちがいない。
だが……。
なんといっても十四か五の小女であるし、ほんの短い間に、あのすさまじい殺しの場面へ直面し、どこまで適確に小平次の人相を見ていたか、それは疑問といってよい。
(大丈夫だ。髪かたちや身なりを変えてしまえば、わかるものじゃあねえ)
五日もすると、小平次は本所四ツ目の裏長屋へとじこもってばかりいられない気もちになってきた。
もしも、である。
深川・大島町の〔妾殺し〕の犯人の人相書が、たとえ似通ってはいなくとも、御用聞きや下っ引の手へ出まわったなどということが、羽沢の嘉兵衛の耳へ入ってしまったら、もはや、身うごきも弁解もできなくなる。
また蛇(じゃ)の道はへびとやらで、こうしたことは、すぐに羽沢の元締の耳へとどいてしまう。
なにしろ、お上の御用をつとめようという者たちの中にさえも、嘉兵衛の鼻薬がちゃんと届いているのだ。
彼らの口から、嘉兵衛はいろいろと情報を得たりしている。
たとえば、お上の〔売春取締り〕がきびしくなる前には、かならず彼らが、
「大きな声ではいえねえのだが……ま、羽沢の元締の耳へだけは入れておこうよ」

こういって、ひそかにささやいてくれる。
だから事前に、嘉兵衛は自分の傘下の売春組織へ、
「当分は、おとなしくしていろ」
と、命じ、お上の摘発をまぬがれてしまうのが毎々のことであった。
こういう元締ゆえ、いささかもゆだんはならない。
(畜生め。あの小女、よけいなところへ面を出しゃあがって……)
小平次は、いらいらしてきた。あの、まるで子供のようにやせ細った躰つきの……それでいて、自分を見ていたときの恐怖に引きつった青白い顔が何ともいえぬ大人っぽい厭な表情をうかべていたのを、彼はおもい出していた。
(おどろいただけじゃあねえ。じいっと、こう、おれの顔を見つめていやがったときのあの小むすめの眼つきというものは……ありゃあ、どうも、ただの眼つきじゃあなかった……)
では、どんな眼つきだったかといわれれば、なんとも返事の仕様がないのである。
(とにかく、こうしてはいられねえ)
お八重を殺してから十日目になるや、彼はおもいきって、深川へ出かけてみることにした。
この日も、雨である。
もう梅雨がやって来たのかも知れない。
小平次は、きれいに月代を剃り、縞の着物をきちんと着て、かるい荷物を肩にかけ、いかにも



堅気の風体で、本所の長屋を出て行った。

## 二

小女のおみよは、小平次の人相などをだれにも告げてはいなかった。
むしろ、この少女は、小平次に好意をすら抱いていたといってよかろう。
(よく、殺してくれた……)
からである。
おみよは、文政六年の今年で十四歳になる。
おみよは、捨子であった。
赤子のときの彼女をひろいあげてくれたのは砂村新田の小百姓で才六というものだが、この才六、おみよが九歳のときに病死をしてしまっている。
それからは、才六の女房・おこうが自分の子三人をおみよにまかせ、百姓仕事をしてなんとかつないで来たのだけれども、去年の夏、ついにむりがたたって発病し、
「もういけない……」
あきらめて、十二歳をかしらに三人の子をつれ、故郷の上総へ帰ってしまった。
「私も、気がねをしいしい引きとられてゆくのだから、とてもお前までをつれて行けやあしない。ま、かんべんしておくれよ」

こういっておこうは、つてをもとめておみよの奉公口をさがしてくれた。
その先が、八幡屋利兵衛の妾宅ということになる。
いざ、住みこんで見ると、お八重は大へんな女であった。
箸の上げおろしに叱りつける。
その理由も実に下らぬことで、皿小鉢を片づけるおみよの手つきが気に入らないとか、昨夜いびきをかいて生意気な、とか……そのたびに長い煙管で、おみよを撲つ。
それも着物の上からではなく、露出した肌の、ひたいや鼻、足の甲や手のゆびなどをびしりびしりと、血がにじむまでに撲ちすえるのである。
五日に一度ほどやって来る旦那の八幡屋利兵衛は四十がらみの陰気な男だが、この旦那が来たときのお八重が、またすさまじいのだ。
わざとおみよが見ている前で、利兵衛とたわむれる。
いや、たわむれるなどというなまやさしいものではない。
逃げようとするおみよを柱にしばりつけておき、その前で、女ざかりの裸身をさらけ出し、見るに耐えないふるまいをはじめる。
はじめは、
「およしよ。おみよの前で、そんな……」
などといっていた利兵衛も、いつしかお八重の変質的な愛撫を好むようになってしまった。



打たれたり、叱られたり、いじめられたりするよりも、十四歳のおみよは、こうしたときのお八重を層倍に憎んだ。
あのとき……。
高びしゃに、いくつもの用事をお八重からいいつけられ、買物に出たわけだが、富ヶ岡八幡・一ノ鳥居前まで来て、いいつけられたうちの半分は忘れてしまったことに気づいた。
あまりにロギたなく、
「捨子なら捨子らしく、ちっとは気ばたらきをして、ひとの気に入られるようにしたらどうなんだえ」
ののしられたあとで、いいつけられた用事だけに、おみよも逆上していたものであろう。
だが、忘れたといってすむものではない。聞き直しにもどれば、また二つや三つは打たれるにちがいないが、
（ああ、私にはもう、帰るところがないのだもの）
泪も出ぬほどの絶望感に抱きすくめられつつ、激しい雨の中を、おみよは家へもどった。
裏手から何気もなく入り、お八重の部屋を開けて見て、仰天した。おどろきのあまり、声も出なかった。
やせぎすの、するどい横顔を見せた三十男が、仰向けに倒れたお八重の上へのしかかり刃物を突き刺したところを、見たのであるから当然だろう。

その驚愕は、瞬間、快感に変った。

（あたしのしてやりたいとおもっていたことを、この男がしてくれた……）

からである。

男が向き直っておどろき、すぐさま、やさしげに声をかけてきたとき、おみよは殺意を直感した。

だから、逃げた。

夢中で逃げ、橋の上で四人の漁師にたすけられたときも、

「人殺しが……」

と、いったのみである。

あとで、町方の調べをうけたときも、

「男の人が逃げて行く、うしろ姿は見ました。でも、顔は、わかりません」

と、いいきったものである。

十日後のいま……。

おみよは、新しい奉公先ではたらいている。

同じ深川の、しかも、殺されたお八重の家から程近い熊井町の蕎麦や〔翁屋・源右衛門〕方の下ばたらきになったのだ。

この奉公口を世話してくれたのは、あのとき橋の上で出会った漁師のひとりで、七蔵という親



切な小父さんである。

翁屋での奉公も、なかなかはげしいものだったが、お八重のところとくらべたら雪と墨のちがいであった。冷飯に香の物だけの食事だったのが、あたたかい味噌汁も出してくれるし、夜食にはそばも出る。

それになんといっても、奉公人が合せて十人もいるのが、おみよにはこころづよかった。

ことに、自分と同じような境遇に生れ育ったおしんという十五歳の少女が翁屋ではたらいていて、これと仲よしになれたのが、何よりもうれしかった。

## 二

お八重が殺された家の近くに〔古石場〕とよばれる岡場所（私娼のいた遊所）がある。

およそ十軒ほどの小さな岡場所だが、この中の小紅屋という娼家で、青堀の小平次は女を買った。

ぶよぶよに肥った白粉くさい女は、見るからに人がよさそうであった。

小平次は、そこへ眼をつけたのである。

しこたま、酒をのませてやり、別にこころづけを包んでやると、女はもう、小平次のいうなりになった。

さり気なく、小平次は〔妾殺し〕のことにふれていった。

近所のことではあるし、犯行当時このあたりは妾殺しのはなしでもちきりであったという。

「それはまあ、大へんなことだったねえ」

と、小平次はおとなしげなことばづかいで、

「それで何かえ、……その、おめかけを殺したやつを、めしたき女が見たとか、うわさにきいているけれどね」

「いえさ、それがまだ子供のことだしねえ。ろくに顔を見たわけじゃあないんだもの」

「ふうん……顔を見て、いなかった……？」

「ええもう……町方のおしらべにも、そうこたえたそうでござんすよ。ですからさあ、どうにも手がかりがつかめないといって、このあたりの御用聞きで、蛤町の佐吉という親分さんがこぼしていなさるそうで……なにしろ、あの日は、そりゃもうひどい雨で、あんな子供みたいな飯たきが、どうしてお前さん……」

女は、べらべらとしゃべった。

小平次は、妙な気もちになった。

ふしぎな気もちである。

あの少女が、

「顔を見ない」

と、町方のしらべにこたえたというのが本当なら、うそをついていることになる。



（たしかに……いやもう、はっきりと、あの小むすめは、おれの顔を見た。たがいに、いっときの間、じいっとこう、見つめ合ったのだものな……）

がまんしながら、小平次は女の肌をまさぐりつつ、

「その、めしたき女は、いまも……いまも、その家にいるのかい？」

と、訊いた。

「あの家は、売りに出されたそうですよぅ」

「へえ……」

「だって、ほら、日本橋のなんとかいう、大きな店の旦那のもち家だっていうものねえ。人殺しがあった家なんぞ、もっていなくても、暮しに困るようなお人じゃないってさあ」

「そりゃ、ま、そうだろうが……」

「その子供のめしたきだけどねえ……」

「どうした？」

「よくは知らないけれど、まだ、このあたりにいるそうだよ。昨日だったかねえ、この店へ出入りをしている小間物屋が、福島橋のたもとで見かけたっていいますよ」

やがて……。

小平次は、娼家を出た。

霧のような雨がけむっている。

そして、肌寒かった。

（まるで、気ちがい陽気だ）

単衣のえりもとをかき合せ、傘をさして歩むうち、小平次は気ぬけがしてしまっていた。

（あの小むすめ、おれの顔を見ねえといった……ほんとうに、ほんとうなのか？）

夕暮れも近い。

小平次は、わざと蛤町へかかっている黒船橋をわたり、やがて、十日前にお八重を殺した八幡屋の妾宅を堀川の対岸にながめながら、中島町をすぎ、熊井町の通りへかかった。

この通りを北へすすめば、永代橋のたもとへ出る。

道がゆるやかにまがる、その角のところに〔手打元祖・翁蕎麦〕の看板が出ているのに気づいた。

（そばでも食っていくか……）

空腹であったし、さっき、娼家でのんだ酒もさめきってしまっている。

小平次は〔翁屋〕へ入った。

小ぎれいな店で、女をふくめた客が五人ほどいた。

酒と、天ぷらそばを注文した小平次が、通りに面した鍵ノ手の腰かけへ落ちついて、しばらくすると、

「お待ち遠さんでございます」



声をかけ、小女が酒をはこんで来た。

「や、すまないね」

見上げて小平次、ぎょっとした。

その小女……まさに、あのときの少女ではないか。

おみよも、むろんおどろいた。

みはった眼がまばたきもせぬ。

十日前の、あのときと同じように、一瞬、ふたりは、たがいにたがいの顔を見つめ合った。

小平次には、その一瞬の間がばかに長いような気がした。おそらく、おみよも同じであったろう。

と……。

小平次の、驚愕から茫然となった表情が、急に険悪なものに変りかけた。

変りかけた、そのとき……。

おみよが、にっと笑ったものである。

悪意のない、無言の笑いであった。

（あたし、お客さんを知ってますよ……だけど、何もいいませんよ）

と、その笑いは小平次へはなしかけてでもいるかのようであった。

小平次の殺気は消えた。

彼は、だまって勘定をはらい、酒ものまず、そばも食わず、まるで逃げるように外へ出て行った。

「どうしたのだね、おみよ」

奥から、この様子を見て店の者が声をかけたのへ、おみよは、

「さあ……あたしにも、わかりません」

と、こたえた。

## 四

おみよは、お八重殺害の現場を見た瞬間、青堀の小平次のことを、こうおもった。

（この人は、きっと、おかみさんにだまされたんだ。おかみさんが八幡屋の旦那のかこいものになる前に、この人をだまして、捨ててしまったんだ。だから、この人は怒って、おかみさんを殺しに来たんだ……）

なぜ、そうおもったのか……。

それはひとえに、少女おみよの眼に映じたお八重の人柄が、そうした推理をおみよに感じさせたものであろう。

（いわない。あたしは決して、あのひとのことをいわない……）

おみよは、小平次に同情をすらおぼえたほどである。



そして十日目……。

おもいがけずに、あの人が、おみよの新しい奉公先である〔翁屋〕へ入って来た。

おそろしくもなんともなかった……。

勘定をはらい、酒ものまず、そばも食べずにあの人は、

（逃げるように、出て行ってしまったっけ……）

と、おみよは尚も、小平次を、

（かわいそうに……）

あわれにおもった。

（あの人、まだ、殺したおかみさんのことが忘れられないのかしら……そうでなかったら、あれから一月もたたないのに、このあたりをうろつくわけがないもの。あの人、あたしを見て、びっくりしていたっけ……でも、いわない。これからもあたし、あの人のことを、だれにもいわない……）

一方、青堀の小平次は……。

本所四ツ目の長屋へ帰ってからも、何かげっそりとしてしまっていた。

あびるように冷酒をのんだが、寝つけるものではない。

（やっぱり、あの小むすめは殺ってしまわねえじゃあならねえ）

それが、殺しの鉄則である。

なんで、自分のことを見のがしてくれたのか、その理由がつかめず、さらに相手が見ず知らずの少女だけに、小平次はうす気味わるかった。

（よし、殺ろう……）

小平次は、決意をした。

とにかく、目撃者の居どころを偶然につきとめたのである。

一日置いて……。

彼は、また深川へ出かけて行った。

この日も、朝から雨である。

小平次は、夕暮れ近くなってから永代橋をわたった。

笠をかぶり、雨合羽をつけ、裾を端折って、素足にわらじばきであった。

連日の雨つづきで、江戸の町は饐え、湿気て、生色をうしなっていた。

熊井町の〔翁屋〕のすじ向いに、三河屋という居酒屋がある。

ここへ入った小平次が、通りに面した窓ぎわの腰かけへ掛けて、酒をたのんだ。

（さて……どうしたら、あの小むすめを……）

盃をふくみつつ、彼は考えふけっている。

笠はとったが、その下の手ぬぐいの頬被は外さぬままであった。

この店の者にたのみ、知り合いのものだといって、あの小むすめを呼び出してもらうこともできよう。



だが、その場合は、三河屋の者に自分の顔を見られてしまうことになるので、これはもっとも拙劣な方法といってよい。

そのころ……、

小平次にねらわれているとも知らぬおみよは、翁屋の裏口の物置の中二階で寝ていたのである。

この中二階は、奉公人たちの寝部屋が男女それぞれにわかれて二つあった。

昨日から、おみよはどうも躰がだるかったが、今朝起きて見ると、発熱していた。

それをがまんしながら午後まではたらいていると、

「おい、おい……おみよ、お前、からだのぐあいがわるいのじゃないかえ」

主人の源右衛門が気づき、おみよのひたいへ手をあてて見て、

「こりゃあいけない。ひどい熱だよ」

すぐに中二階へ寝かせてくれ、町医者もよんでくれた。

「大丈夫。二、三日やすんでおれば、な」

と、医者は薬をあたえ、

「それにしてもこの娘のからだは、ひどく傷んでいるようだな、当分は、あまりむりばたらきをさせぬがよい」

と、いいおいて帰った。

そのあとで、おみよはとろとろとねむったようだ。
ふと気がつくと、朋輩のおしんが、枕もとから心配そうにのぞきこんでいた。
「あ……おしんちゃん……」
「おみよちゃん、だいじょうぶ？」
「ええ……」
おしんが、ぬれ手ぬぐいをしぼり直し、おみよのひたいへのせてくれた。
「おしんちゃん、また、雨がひどくなってきたようだけど……」
「だから出前が多くて、由さんがふうふういってる」
「あたしが寝こんじまって、おしんちゃんがいそがしくなる……」
「かまわない、そんなこと」
「でも……」
「でも？」
「あたし、ここへ来られてよかった。あんたみたいな友だちができたし……旦那さんもおかみさんも、いいひとだし……」
「あたしねえ、おみよちゃん。ここで飼いごろしにしてもらうつもりなの」
と、おしんは大人びた口調で、
「あたしやおみよちゃんみたいな捨子には、行くところもないしさ」



「まあ……じゃ、あたしも、おしんちゃんといっしょに、ここで飼いごろしになろうかしら」
「ほんと？」
「ええ……」
「うれしい。それじゃ、あたしたち姉妹ね」
「ええ。おしんちゃんが一つ上だから、あたしの姉さん……」
そのとき、階下の土間から、おしんを呼ぶ声がした。
「はぁい……」
こたえておいて、おしんが、
「旦那さんが、行燈をつけてやれって……おみよはひとりで寝ていて、さびしいだろうからって……」
といい、行燈をともしてから、
「じゃ、また来るから……」
「ええ、ありがと」
おしんは階下へ降り、土間つづきの店へ去った。
店へ出たおしんは、おかみさんに用事をいいつけられた。

## 三

近くの諸町に住む女髪ゆいのおしげのところへ日中に出かけ、髪をゆったとき、翁屋のおかみさんは、蕎麦粉をとどけてやる約束をしていた。

髪ゆいのおしげは〔そばがき〕が大好物であった。

雨はつよくなっていたが、まだ夜になりきってはいなかったし、すぐ近所のことでもあるし、

「すまないが、おしん……」

と、おしんに蕎麦粉をもたせて外へ出してやったとき、おかみさんはいささかの心配もしてはいなかった。

おしんが翁屋の店先へ出て来て、雨空を見上げながら傘をひらいたのを、

（おや……？）

こちら側の三河屋の中から、まだ頬被を外さぬ小平次が見つけた。

格子窓の障子が、半分ほど開いている。

（あの、小むすめだ）

顔はよく見えなかったが、傘をかつぐようにさして行くおしんのうしろ姿の、年恰好も同じなら、躰つきもそっくり、と見た。

小平次は、一昨日の夕暮れに翁屋でおみよを見たとき、おしんの姿を見かけてはいない。



翁屋にいるおみよと同じ年ごろの小女は、ひとりきりだと、無意識のうちにおもいこんでいたのも当然というべきであったろう。

あわてて立ち、彼は勘定をはらい、つとめて落ちつこうとつとめながら、外へ出て行った。

小むすめは、中島町へわたる小橋の手前を左へまがろうとしていた。

手早く笠をかぶり、合羽の下に短刀をぬきそばめた小平次は足を早め、早めながらも、地の底へのめりこむような気分であった。

（あ……殺りたくねえ……）

あの小むすめは、二度も、

（おれを見のがしてくれた……）

のである。

だが、目撃者を生かしておいたため、われとわが身の墓穴を掘った例を、小平次はいくらも知っている。

あたりを見まわしたが、通行の人も絶えているようだ。

夕闇が、夜の闇に変りつつある。

小平次が烈しく、くびをふり、ためらいを断ち切り、一気に駈けた。

小むすめは、橋のたもとを左へまがった。

女髪ゆいの家の戸口は、すぐ前に見えている。

そこへ……。

青堀の小平次が飛びかかった。

そこは曲り角の相川町で、角に〔浜屋伊吉〕という釣道具師の店があった。

丁度その前で、小むすめ……おしんが小平次に刺された。

飛びかかって、左腕をおしんのくびへ巻きつけ、右手の短刀で、ぐさりぐさりと、あまりにもむごい二突きが、か細い少女の肉体をえぐった。

「ぎゃあっ……」

たまぎるような、おしんの悲鳴があがった。

そのときすでに、小平次はおしんから飛びはなれ、まっしぐらに福島橋の方向へ駈けていた。

「あっ……」

と、このとき、まるで出会いがしらのように釣道具師の店から道へ出て来たのが、前に、おみよを〔翁屋〕へ世話した漁師の七蔵である。

「や、野郎、何をしやぁがる!!」

雨にたたかれ、ぬかるみへ倒れ伏したおしんを、

「たのむぜ!!」

釣道具師の店へ声をかけておいた七蔵が、

「待ちゃぁがれ!!」



猛然として、小平次を追った。

富吉町の角を左へまがりかけ、小平次は狼狽した。

すぐ先に、自身番屋の木戸が見えたのだ。

（いけねえ……）

足をとめた一瞬のおくれが、七蔵を肉薄せしめた。

身をひるがえし、右へ……福島橋へ駈けわたる小平次のうしろから、七蔵が、

「人殺しだ、人殺しだ!!」

叫びつつ、追って来る。

橋をわたりきったところで、追いつかれた。

「畜生め」

わめきざま、振り向いた小平次が短刀をふるった。

小びんのあたりを切り裂かれても、七蔵は屈せず、

「何を!!」

仕事がら、たくましく陽灼けした躰を、小平次へぶちあてた。

富吉町の番屋から、人が走り出して来る。

前方から来た人影も、傘をほうり捨てて駈け寄って来た。

「うわあ……」

短刀をふりまわす小平次の叫びは、絶望的なものであった。
漁師の七蔵の厚い胸板に抱えこまれた小平次の細身のからだが抵抗をやめたのは、それから間もなくのことである。
人びとに手足を押えられ、なぐりつけられたり蹴飛ばされたりされながら、小平次は、いま自分が刺し殺した小むすめがおみよだ、と信じきっていた。
もっとも……。
青堀の小平次は、おみよの名も知らなかった。

## 六

夏が来た。
その夏も、すぎ去ろうとするころ、捕えられた青堀の小平次が、江戸市中ひきまわしの上、千住の刑場で火あぶりの刑に処せられた。
「そいつの苦しむ面が見てやりたい」
と、翁屋源右衛門は泪ぐみつつも、千住まで出かけて行った。
「かわいそうに……かわいそうなおしん、あたしが殺したようなものだ」
と、おかみさんも、泪がかわく間もないありさまである。
ちなみにいうと……。



小平次は、おしん殺しの犯人として処刑されたのである。
「つい、ふらふらと、殺ってしめえました」
こう、彼はいった。
異常変質者として処刑されようとしたのだ。
御用聞きの佐吉が、
(こいつ、くせえぞ、八幡屋の妾殺しもこいつじゃあねえのか?)
と、おもい、きびしく責めたてて見たが、小平次は知らぬ存ぜぬで通しぬいた。
妾殺しは、両国の元締・羽沢の嘉兵衛に命じられたものである。
殺し屋の掟として、義理として、小平次は嘉兵衛の名をうちあけるわけにはいかぬ。
うちあけたところで、小平次の死刑はまぬがれない。
これまで小平次は、羽沢の元締から何度も殺しを請け負い、大金をもらっているのだ。
うらみも憎しみもない。
せめて、
(元締にめいわくをかけずに死ねる)
ことが、小平次のなぐさめであり、見栄であったといえよう。
「それでもあいつ、感心に吐かなかったとよ。本物の殺し屋はああでなくちゃあならねえ。青堀の小平次はりっぱなやつだ」

と、自分が死んだあとで、羽沢の嘉兵衛がほめてくれる声を、小平次は火煙に包まれ、肉も骨も裂けくだけるほどの苦痛の中で、耳に聞いたようなおもいがした。

こうして……。

青堀の小平次は、異常変質者として処刑をされた。

秋が来ると、深川では、もはや八幡屋の妾殺しを話題にのぼせることもなくなったようだ。

そのころの或日……。

羽沢の嘉兵衛が、料理茶屋〔河半〕の奥座敷で、彼の右腕なぞとよばれている境目の半五郎に、

「それにしてもなあ、半五郎よ」

「へい？」

「あの、青堀の小平次がことよ」

「火あぶりになった……」

「そうよ」

「その小平次が、どうしたというのでござんす、元締」

「あの野郎に……あんな性質があるとは、つゆいささかもおもわなかったぜ」

「へ……？」

「深川で、ほれ、何とかいうそば屋の小むすめをお前、つい、ふらふらと……」

「まったくねえ」



「あの野郎、女が買えねえ躰だったのかえ？」

「そうとも見えませんでござんしたがねえ」

「おりゃ、もうびっくりしたぜ、あのときは……何しろ半五郎よ。八幡屋のほれ……あの殺しをやった深川の、すぐ近くで取っ捕まったときいたときにゃあ、こいつてっきり……妾殺しの一件がばれたかとおもってのう」

「それにしても元締。よくまあ、小平次どんも、妾殺しを吐かなかったもので……」

「当り前よ。それがお前、おれへの義理だてというものだし……それによ、たとい吐いたにしても、手前が火あぶりになるのは同じことだ」

「へい、へい……」

「おれもな、だから平常から、あいつにはいろいろとめんどうを見てやっていたのさ。だから小平次の野郎、死ぬときはきっと……両国の元締がよろこんで下さる、ほめて下さるにちげえねえ……と、まあ、こうおもって、いいこころもちで死ねたろうとおもうのさ。あの野郎はそういうやつよ。ふ、ふふ……」

「なるほどねえ。さすがは元締でございますよう」

「ふん。だてに年をとっちゃあいねえわさ」

「ちげえねえ」

「ときに半五郎よ。このごろ、日本橋の八幡屋利兵衛さん御夫婦は、うまくいっていなさるか

え？」

「へえ、もう……妾殺しの一件からこっち、旦那の利兵衛さんの浮気がぴたりやみましたそうで」

「ふん……あの旦那は養子でのう。気が小せえくせに、大へんな女道楽で、家つきの女房どのに睨まれながら、こそこそ金を引き出しては、いやもう……」

「それにしても元締、おどろきましたねえ、あのときは……」

「何がよ？」

「だって……まさか八幡屋の旦那も……」

「手前の女房が、おれのところへ妾殺しをたのんだとは、夢にもおもわねえことさ」

「それにしても、女という生きものは怖い、怖い」

「もっとも、八幡屋の女房とおれとの間にゃあ、二人ほど人が入っているから、まさか羽沢の嘉兵衛が殺しを引きうけたとは、おもってはいめえわさ」

「けれど元締。青堀の小平次どんのような腕っこきが、もう二人ほどほしゅうございますね」

「当分、殺しは引きうけたくねえなあ」

「それが今度は、礼金がけたはずれなので」

「お前、そんなはなしがあるのかえ？」

「ですから、そのはなしで、今日はやってまいったのでございますよ」



「ふうん……ま、じゃあ一つ、ゆっくりとのみながらはなそうじゃあねえか……おい、だれかいねえかい。酒と、それから何かうめえものを見つくろって持って来ねえ」

## 七

正源寺の墓地に、赤蜻蛉の群れが泳いでいる。

いま、おみよがぬかずいている墓地は、翁屋のものであった。

翁屋源右衛門は、死んだおしんを、

「わしたちのむすめとおもって、うちのお墓へ入れてやろう」

女房・おきさにこういい、おしんをここへほうむってくれたのだ。

「おしんちゃん、ごめんね」

おみよは、墓にささやきかけつつ、紅むらさきの花をそなえた。正源寺裏の空地に咲いていた萩の花をつみとってきたのである。

（おしんちゃんは、あたしの身がわりになってくれたのだ）

と、おみよは信じている。

犯人は、妾殺しのことを白状しなかったそうだが、おしんが殺されてのち、役人に引き立てられ、富吉町の番屋から小平次が出て来るところを、おみよは翁屋の人びとの蔭にかくれて見た。

（あっ……）

と、おもった。

（おしんちゃんとあたしと間ちがえたんだ……）

である。

（やっぱり、あの人は、あたしを殺さなけりゃ、気がやすまらなかったのかしら……あたしは、あのとき、安心していなさい、きっとしゃべらないからと、顔で知らせたつもりなのに……）

おしんが殺されたことは悲しい。悲しいというよりも、もっと強烈な衝撃であった。

だから、おしんを殺したあの男は憎い。

殺してやりたいと、おもったが、おみよのかわりに〔お上〕が火あぶりにしてくれた。

しかし、だ。

八幡屋の妾・お八重を殺したあの男は、どうしても憎めない。

（あたし、殺してやりたい！）

そうおもい、そのことを夢にまで見たほどに憎悪していたお八重を、

（あの男が、あたしのかわりに殺してくれた……）

からである。

だから、おみよは、あの男が妾殺しの犯人だということを、相変らず他人にもらさなかった。

小さな、そして大人びた自分ひとりの胸の底へ、いまでもそっとしまいこんである。

（おしんちゃん。ごめんなね……）



おみよは両手を合せた。

両眼から、泪がしたたり落ちた。

手を合せたまま、凝とうごかぬおみよの髪へ、ついと疾って来た赤蜻蛉が一匹、しずかにとまった。

空はふかく、高く、晴れわたっている。

つい先ごろまでの残暑のきびしさが、まるで嘘（うそ）のようにおもわれる秋日和であった。

# だれも知らない

## 一

とにかく、強かった。

相当にくたびれた着ながしの風体だし、総髪のまげも手むすびにしたものらしく、垢のにおいが全身からたちのぼっているような、三十がらみの浪人であった。

彼が、湯島天神・裏門前の茶店にいた武士四名を相手に、その茶店前で喧嘩をしたということなのだが……。

「やせ浪人め、叩きのめしてくれる」

どこかの藩中とも見える四人づれは、みな立派な服装であったし、これを見たものは、

「あの乞食浪人の負けだ」

「可哀想に……」

と見たし、四人の武士も胸を張って傲然たる態度で「やせ浪人」をかこみ、

「抜けい！」

怒鳴りつけた。



浪人がくびをすくめ、ひげだらけの顔をにやりとさせ、腰にした刀（彼は大刀一つのみを帯びていた）の柄をゆびでふれ、

「おれは抜かんでもいいよ」

と、いった。

「何!!」

「ぶれいなやつ!!」

「待て。拙者が先に……ひとつ、片づけてくれる」

すすみ出た一人が刀をぬきはらい、自信たっぷりに刃先を返し、

「峰打ちだ。殺しはせぬ。安心してかかってこい」

こういった瞬間に、浪人のひょろりと細長い体軀がおどろくべき俊敏さでうごいた。

あっ……という間もない。

どこをどうされたのか、武士は刀を投げ出し、土けむりをあげて転倒している。

三人の武士がいっせいに抜刀し、わめき声をあげて浪人へ肉薄した。

あとは、乱闘になった。

乱闘といっても、乞食浪人のほうは汗もかかず呼吸もみだれぬ。三人の武士だけが大仰に刀をふりまわし、駈けちがっているだけであって、浪人はあまり体をうごかさずに、すいすいと三本の白刃をかわしているのだ。

そのうちに、
「いいか、ゆくぞ」
浪人が声をかけたとおもうと、三人とも刀を次々に叩き落され、いやというほど地面へ投げつけられていたのである。
見物の人びとが喚声をあげた。
四人の武士は、刀をひろい、あわてふためきつつ切通しの方向へ逃げ去った。
（これは、すばらしい男だ）
茶店の中から、すべてを目撃していた夏目半五郎は瞠目し、同時に、或る計画を思いつき、足が小きざみにふるえ出した。
（そうだ。この男にたのもう）
半五郎は、茶店から出てさわやかに晴れわたった初秋の空の下を湯島天神の裏門へ入りかけようとする「やせ浪人」に声をかけた。
「しばらく」
「おれのことかね？」
浪人が振り向き、
「あんたも、いまの連中の仲間かね」
「ちがう」



「ふむ。で、何用かね？」
「その、ちょと御相談いたしたいことがござる」
二十五歳の若さに似合わぬ肥った躰に冷汗をかきながら、夏目半五郎が、
「ちょと、そこまで……」
「おれに来いと？」
「いかにも」
「ふむ……」
浪人の目が白く光った。
その光に、ぞっとしたけれども、半五郎は思いきって、
「とにかく、同道されたい」
「どこへ？」
「どこぞで酒飯をさしあげたい」
「のませて、食わせてくれるのか……よし、行こう」
「さ、こちらへ」
間もなく二人は、湯島天神・門前の鰻屋〔深川や〕二階の小座敷へ落ちついた。
すぐに、酒がはこばれる。
遠慮なく盃をあげつつ、浪人が、

「用があるなら、きこうかね」
「はあ……」
「いってごらんなさい」
「む……」
「どうも煮えきらぬお人だ。いいたくなければいわぬでもよし。だが、ここの勘定をおれに払えといってもありませぬぜ」
「とんでもない。拙者が……」
「それなら、よろしい」
「お、おもいきって、申しあげる」
「うむ」
「人ひとり、斬っていただきたい」
必死のおもいで半五郎はいったのだが、浪人は平気な顔で、
「殺すのだね」
念を押した。
「い、いかにも……」
「金をいくらくれるね？」
「さ、三十両、では、いかがで？」



「安いな」
「それが精いっぱいのところで……」
三十両といえば、現在の百二、三十万というところであろう。
「殺しの事情は？」
「それは、その……」
「いえぬのか。よし、きくまい。そのかわり五十両いただきたい。だめなら、ことわる」
「いや、出します、出します。な、何とかこしらえます」
「本当だな。では、先に半金の二十五両をいただこう。相手を仕とめた後に、残り二十五両をいただく。それでよいな」
「いまは、ござらぬ」
「よろしい。おれが巣へ持って来てくれ。そのほうが安心だろう。おれは持ち逃げなぞをする男ではないことを知っておいてもらおう」
「では、明日中に……」
「うむ……で、殺す相手は？」
「下谷・坂本裏の要伝寺内に住む浪人で、名を井関十兵衛という。もしやすると変名をつかっているやも知れぬが……年は三十一歳。そうだ、この唇の右下からあごへかけて刀の傷痕が残っている筈でござる」

「ふうむ……それだけきけば、じゅうぶんだな。おれの名は山口七郎。貴公は？」
「夏目、半五郎と申す」
「おれは、深川・中島町の漁師で捨蔵という男の家にいる」
「うけたまわった」
「これできまったな」
「い、いかにも」
「うなぎを急がせてくれぬかね」
「承知」
山口七郎という浪人と別れ、宮永町の仮寓へもどる道々、（大丈夫。あの浪人の腕前なら、いかに強い井関十兵衛でもたまったものではない。きっと負ける）
急に、眼の前があかるくなったような気がして、夏目半五郎の足どりは軽くなった。
井関十兵衛は、半五郎にとって〔父の敵〕である。
つまり、自分の腕では到底、十兵衛を討てないので、山口浪人に斬殺させ、これを自分が討ったことにして故郷へ帰ろうというわけなのであった。

## 二

夏目半五郎の父・甚右衛門孝正は、常陸（茨城県）土浦九万五千石・土屋但馬守の家来であった。



井関十兵衛も、おなじ土浦藩の馬廻役で、彼は藩中でもきこえた心形刀流の剣士であり、樫原流の槍術にも長じている。
この二人、かねてより仲が悪かった。
おもい当る理由といえば……。
甚右衛門の長女（つまり半五郎の姉）於房の美貌に胸を燃やした井関十兵衛が、重役の一色舎人を介して、
「ぜひとも、妻にいただきたい」
と、申し入れたところ、
「おことわりいたす」
夏目甚右衛門は、にべもなく、はねつけてしまったことがある。
これは十兵衛をきらった、というよりも、当時、土浦藩には家老・重役たちがいくつもの派閥をつくり、政治的にいろいろともめごとが絶えなかった上、夏目甚右衛門は、一色舎人の反対派である家老・大月七右衛門の引き立てをうけていたから、
（一色様の口ぞえなぞをきき入れては、大月様にそむくかたちになる）
と、考えていたのかも知れない。
とにかく、このことあって以来、甚右衛門と十兵衛との間がうまくゆかなかったらしい。

「いいではないか。父上もいささか頑迷にすぎる。姉上の聟として、井関十兵衛殿は申し分ない。武術に長じ、いかにも男らしく、短気なところもあるが、そのかわり万事に率直で気もちのよい人だ」

とそのころは、夏目半五郎は、姉の縁談を蹴った父の態度を不満におもったほどである。

間もなく、姉は大月家老のロぞえによって、同藩の伊坂忠之進という者へ嫁したが、半年後に疫病で急死をした。

父の甚右衛門が井関十兵衛に城下外れの木立の中で斬り殺されたのは、それから一か月ほど後のことだ。

十兵衛は、すぐに土浦城下から脱走した。

こうなれば、半五郎が父の敵として十兵衛を討たねばならぬ。

敵の首を討たねば、夏目家をつぐことは出来ない。それは、土屋但馬守という一国の主の家来としての身分も俸給も捨てなくてはならぬことだ。

これは、武士の掟なのである。

(しかし、とても、おれには十兵衛を討てぬ)

いやいやながら、老母を城下の親類へあずけ、夏目半五郎が土浦城下を発し、敵討ちの旅に出たのは二年前のことであった。

敵討ちというものの運不運はさまざまで、数か月後に敵をさがし出した人もいれば、二十年も



三十年もかかって、ようやく見つけ出し、刃を向け合ったときには討つほうも討たれるほうも白髪の老人になっていたというケースもある。めぐり合わぬうちに敵が病死してしまうこともあるし、いざ出合ったとき、たがいに斬り合いをするのがいやになり、双方が仲よくなって共に浪人暮しをつづけながら一生を終ったという場合もある。

それに返り討ちという……つまり、敵のほうが強くて、討つほうが反対に討たれてしまうことだが、まさに夏目半五郎の場合、

(どう考えても返り討ちだな、おれは……)

と、当の半五郎がきめてかかっているのだから、どうしようもなかった。

だから半五郎。敵の井関十兵衛に出合うのが恐ろしくて、諸方へ旅をつづけながらも、きょろきょろとあたりを見まわしたり、宿屋へ泊ってもねむれなかったり、どちらが敵なのか、わかったものではなかったのである。

だが、故郷を出てから二年目の……今年、享和二年八月末日の或日に、半五郎は父の敵を見つけた。

さいわい、十兵衛は、こちらに気づいていない。

半五郎は、今年の二月に江戸へ入り、上野の不忍池に近い宮永町の植木屋の離れを借りて暮しはじめていた。

土浦藩の江戸屋敷は神田・小川町にあり、ここに半五郎の叔父・永井主税が江戸勤務でつとめ

ている。この叔父がいろいろと世話をやいてくれるし、国もとの親類も多いし、

「いくらでも援助してやるから、一日も早く井関十兵衛の首をみごとに討ってもどれ」

と、はげましてくれたり、生活費を送ってくれたりする。

(そりゃ、おれだって十兵衛を討ちたい。討ちたいが、向うで討たれてはくれぬだろう)

あえて、敵をさがしもとめるわけでもなく、外出の時は編笠に顔をかくし、

(もしも十兵衛に出合ったら、きっと、おれは逃げるだろうな)

などと考えているのだから、たよりないことおびただしいものである。

だからといって、いつまでもこのままでいたら、いずれは親類たちも自分を見はなしてしまうだろうし、国もとへは帰れず、母の顔も見ることなく、こころ細い浪人暮しを一生つづけてゆかねばならぬ。

(ああ、いやだ。父上はなぜ、十兵衛と喧嘩なぞしたのだろう……)

落ちついていられなくなると、半五郎は、近くの根津権現・門前にある岡場所へ娼婦を買いに出かけた。

井関十兵衛を見たのも、こうした一日であって、昼あそびの女の白粉の香がべったりと残っている躰で、半五郎がふらふらと根津権現の境内へ歩み出したとき、右側の茶店の奥の腰かけで酒をのんでいる十兵衛を偶然に発見したのである。

「あっ……」



おもわず声を発し、半五郎は横飛びに逃げ、道をへだてた木蔭から様子をうかがっていると、十兵衛は酒をのみ終え、やがて編笠をかぶって道へ出て来た。

堂々たる体格で、悠然と地をふみしめて行く十兵衛の後姿を見ると、

(ああ……やはり、おれには斬れない)

ためいきをついた半五郎だが、しかし、せっかく見つけた敵である。居所だけでもたしかめておこうという気もちがうごき、びくびくしながら後をつけ、十兵衛が坂本裏の要伝寺内へ入るのを見とどけた。

そして、三日ほどかかり、十兵衛が要伝寺の庫裡の離れに住んでいることを確認したのである。

江戸藩邸の永井叔父へこのことを報告し、いっそ助太刀をたのもうか、と思いついたけれども、

(いや、だめだ)

もしも、そのようなことをいえば、

「二十五にもなって親の敵が討てぬのか、ばか者!」

謹厳剛直の叔父から怒鳴りつけられるにきまっている。

夜ふけに忍びこんで、十兵衛がねむっているところを斬ろう、とも思い、一度、ふるえながら要伝寺境内に忍びこんで見た。

このときは、便所へでも起きたらしい寺僧が渡り廊下から、

「そこにしゃがみこんでいなさるのは、だれじゃ?」

大声でとがめられ、半五郎は冷汗びっしょりとなって狂人のように逃げ出したものである。こうしたときに……。

夏目半五郎は、乞食浪人の山口七郎を発見したわけであった。

## 二

半五郎は、山口浪人に出会った翌日。金二十五両を持って深川へ出かけた。

永代橋をわたって大川（隅田川）沿いに南へ行き、掘割にかかった福島橋をすぎ、右へ少し行ったところに、漁師・捨蔵の家がある。

そのころの深川は、江戸の市中を外れた水郷で、堀川が縦横にめぐり、田園の情趣も濃厚であったという。草地には溝萩（みぞはぎ）が咲きみだれ、堀川沿いの道では、女の子供たちが鳳仙花（ほうせんか）の花弁をもみつぶし、これで手や足の爪（つめ）を染めたりして遊んでいる。

「ごめん」

半五郎は、漁師の家の戸口で声をかけた。

「来たね」

すぐに、山口七郎が昨日と同じ姿であらわれ、

「ま、出ようか」

戸じまりをし、先に立って、近くの蛤町にある〔すすきや〕という小さな料理屋の二階座敷へ



案内をした。むろん、ここの勘定も半五郎が払うわけであった。

二十五両を出すと、

「よろしい。十日のうちに斬る。井関十兵衛とやらを斬ったら、残りの二十五両をもらう。よいな」

「よろしい。だれにも知られずに斬れますな？」

「むろんだ」

「首を、私のところへとどけていただきたい。よろしいな？」

「よろしい」

山口浪人はむぞうさに引き受ける。あれだけの腕前なのだから自信にみちているのも当然だ、と、半五郎はたのもしくおもい、

「では、よろしゅうに……」

くれぐれもたのみ、連絡のことなどを打ち合せ、福島橋のたもとで山口七郎と別れた。

夕暮れであった。

山口浪人は、夏目半五郎を見送ってから、漁師・捨蔵の家へもどった。

捨蔵が帰って来ている。彼は屈強の四十男で妻も子もない独身暮しだ。漁にも出るが、酒と博奕（ばくち）が飯より好きだという男で、山口七郎も、近くの松平下総守・抱屋敷の門番長屋でひらかれる賭場（とば）で捨蔵を知ったのである。

「や、お帰んなさい」
「捨蔵。来たよ、来たよ」
「え、何がだね、旦那」
「昨日はなしたさむらいさ」
「あ……殺しを、お前さんにたのんだという……？」
「うん。二十五両持って来た」
「へへえ……、や、ほんとだ」
「ずいぶんお前には世話になったから、このうち十両をやろう」
「ほんとかね。そりゃ、すまねえ。ありがてえな、ありがてえな」
捨蔵は、酒光りの顔を笑みくずしたが、
「で、殺しは？」
「そこだよ」
と、山口七郎がにやにやと、
「もう少し、考えて見るつもりだ」
「だって、この二十五両を受け取ったのだもの、引き受けたのじゃあねえのかい？」
「相手が、おれより強そうなら、むりにやることはない。この二十五両、もらい逃げにしてもいい。そうなったらお前、おれがことなぞは見たこともねえと、夏目半五郎にいってくれ」



「冗談じゃねえ」
「おれは、どこか遠くへ行っちまうから、心配はねえわさ」
「なるほど……だが、いったい、どういうわけなのだえ。その夏目なんとやらいうさむれえが、お前さんに殺しを……」
「知らねえ。そんなことは、どうでもいいことよ。久しぶりに大金が入ったのだ。まあ今夜は、ゆっくりとのもうではないか。あは、は、はは……」
翌日から三日ほど、山口浪人は坂本の要伝寺へ、井関十兵衛の様子をさぐりに行った。
山口七郎は捨蔵の着物を借り、髪も町人まげにゆい、刀も差さず、すっかりかたちを変えて出かけて行ったのだが……。
三日目に帰って来て、
「おい捨蔵。やめにしたよ」
と、いう。
「いけませんかえ？」
「なかなかに強そうだ、その井関十兵衛という男」
「ふうん……」
「と、だまし討ちにかかるような男ではない。おれと斬り合って五分五分だよ。向うも斬るかわり、おれも斬られる」

「うしろからお殺んなすったら、どんなもので？」
「それがさ。めったに外へは出ぬし……そうだな、昨日な、浅草まで出かけたので後をつけて見たが……」
「ふん、ふん」
「後姿に毛ほどの隙もねえ」
「へへえ……」
「相当なものだ。やるとしたら、こっちも、いのちがけだよ」
「ふうん……」
「つまらん。後金の二十五両はほしいが、むりをしてやることはねえわさ。おれは今夜から当分消える。あとはたのむぞ。なに、どこへ行ったか見当もつかぬ、と、そういっておけよ、あの夏目とかいう男にな」
そして山口七郎は、また、もとの浪人姿にもどり、漁師・捨蔵の家を出て、
「おい、捨。また会おうな」
どこかへ去った。
十日の日限がすぎ、その翌日の夕暮れとなって、夏目半五郎が肥った躰へびっしょりと汗をかき、捨蔵の家へあらわれた。
「山口先生は、二、三日前に出て行ったきり、もどって来ませぬぜ」



「まことか、それは」
「うそだとお思いになるなら、お待ちになって見たらいかがです」
「そうさせてもらおう」
夜に入るまで待ったが、むろん帰って来る筈はない。
次の日も、また次の日も、根気よく半五郎は通いつめたが、
「おのれ。まんまと二十五両をだまし盗られた……」
ついにさとったらしい。
「まったくねえ。あの山口七郎先生というのは、大した悪党でござえますからねえ。この私なぞも何度その、泣かされたか知れませんので、へい……」
「そ、そうか。やはり、そんなやつだったのか」
「へい、へい」
「おのれ。出合ったら只ではおかぬ」
憤激しつつ、半五郎は帰って行った。
その足で半五郎は、坂本の要伝寺をさぐって見ると、どうも井関十兵衛は要伝寺から姿を消したらしい。
「お寺の離れに住んでいた浪人さまは、四日ほど前に、旅姿で、朝早くどこかへ出て行きましたよ」

と、寺の前の百姓家の女房が、半五郎の問いにこたえた。
その通りである。
井関十兵衛は、このごろ、どうも落ちつかなくなっていた。
（だれかに、後をつけられている）
という直感であった。
（だれかに、おれは見張られている）
そこは、いくら腕に自信があっても〔かたきもち〕の身の上である。
夏目半五郎と闘って負けるつもりはないが、半五郎も武士は武士だ。
父の敵を討つの一念がこもっているから、どのような手段をもってしても、自分を討つ決意にちがいない、と、十兵衛は考えている。
眠っているところへ忍びこまれて、突き刺されるということもある。
しかも、夏目半五郎には有力な親類も多いし、助太刀の人数があらわれることもじゅうぶんに考えられる。
井関十兵衛ほどの剣客でも、つけねらわれていることの不気味さには耐えきれない。
（ああ……ばかなことをしたものだ）
であった。
半五郎の父・夏目甚右衛門を殺したことが、である。



素因は、縁談をことわられたことなのだが、直接の原因は、先輩の甚右衛門に役目上のことについて叱りつけられたことだ。
つまらぬことで、平常ならば何でもなくすむところが、二人とも、たがいにこころよくおもっていなかったため、口論となり、勤務を終えて城を出たとき、
「いささか、申しあげたいことがござる」
と、十兵衛が城下外れへ甚右衛門を連れ出し、また口論し、たがいに激昂し、ついに斬り合ったのである。
（ばかなことを……）
だがいまさら悔んでもはじまらぬ。
二十日ほど前に、気ばらしのつもりで、根津権現へ参詣に出かけた帰りにも、
（だれかに後をつけられている）
と、感じた。
その後も、要伝寺のまわりをだれかがさぐりまわっているらしい。
寺の小坊主が、
「あやしい男が庭の茂みにしゃがみこんでおりました」
といったが、それも十兵衛にとっては気味がわるい。
さらに、しばらくして町人姿の男が寺の附近をうろうろし、自分のことを近所の百姓家などに

聞きまわっているとか……。

（いよいよ、半五郎が嗅ぎつけたらしい。いろいろな人をつかい、おれの身のまわりをさぐっている。助太刀もいると見なくてはなるまい）

こう思ったら、居ても立ってもいられなくなった。

ついに井関十兵衛は、要伝寺を引きはらって逃げたのであった。

## 四

翌年の秋。

ふたたび、十兵衛は江戸へもどって来た。

わがいのちがつけねらわれている場合、どうも旅をしているのは危険なのである。

およそ百七十年も前のそのころは、現代のように山にも海にも自由自在な交通機関が発達し、どこへでも人間が行けるというわけにはゆかない。

人が往来し、人が住む場所というものは、およそきまっていた。

日本の国土は、いくつもの国々にわかれ、これを三百におよぶ大名がおさめていて、それぞれに制度も政治もちがう。だからAの領国で人を殺し、Bの領国へ逃げれば、もうAの領国の法権は適用されない。だからこそ〔敵討ち〕の制度がみとめられたのである。

そういうわけだから、人間の移動もない。



江戸や大坂、京都のような大都市は別として、どこの国のどこの町や村でも、人びとは代々、家をまもり、同じ土地に暮しつづける。

ゆえに、他国の者がそこへ入ってゆけば、たちまちにわかってしまうのである。

どうも、姿を隠しにくいのだ。

そこへゆくと、江戸や大坂はひろい。他国の者も多くながれこんで来るし、身を隠すに絶好な場所はいくらもある。この点は現代の犯罪者が大都会へ潜入するケースが多いのとあまり変ってはいない。

井関十兵衛が、今度、江戸へもどって来たときには、顔つきが変っていた。

夏目甚右衛門と斬り合ったとき、傷つけられたあごの傷痕をかくすため、十兵衛は口のまわりからあごへかけて、いっぱいにひげを生やした。

さらに、あたまをきれいに剃りあげ、まる坊主となった。

そして、十兵衛は町医者になり、江戸の中心から外れた麻布の広尾町へ小さな家を借り、開業したのである。

金もなくなってしまい、どうしても彼は衣食の道をはからなくてはならなかったのだ。

医薬については、いささか心得もある。

十兵衛の母方の伯父は、すでに亡くなっていたが、土浦城下の医師であって、この伯父・原杏所に可愛がられた十兵衛は、伯父の家へ泊りこむことも多く、また医薬について興味もあり、い

ろいろと教えてもらった。

この程度の知識があれば、そのころは何とか町医者で通ったものなのである。

十兵衛は、名を〔井上玄貞〕と変え、あまり間口をひろげず、近所の人びとを相手に開業したわけだが、

「なかなか良い先生だ」

「無口だが、親切じゃし……」

「薬がよく効くぞ」

なかなかに評判がよい。

そうなると十兵衛も励みが出て、医学の書物などを買いこみ、夜中ひっそりと勉強をしたり、そうすることによって〔かたきもち〕の不安をいくらかは忘れることもできたのである。

こうして、また一年が経過した。

この年の春に、十兵衛は妻を迎えた。十兵衛の近くに屋敷がある名主・桜田伝之助の姪・お芳と縁談がととのったのだ。

お芳は三十の坂を越えてい、若いころに一度結婚をしたが、夫に死に別れたのち、桜田家へ引きとられ家事にはたらいていたものである。

ふっくらとした色白の、福々しい顔だちだし、とても年齢には見えぬ。おとなしい性格で、はじめは、



（かたきもちに妻はいらぬ）

この縁談ことわるつもりでいた井関十兵衛であったが、むりやりにすすめられ、見合いをして見ると、一度で、お芳が気に入ってしまった。

まだまだ油断はできない、と思う一方では、

（このごろは、おれの顔つきが我ながら変ってしもうた。頬に肉がたっぷりとつき、このひげが顔の半分をおおっているし……夏目半五郎と道で出合い、そ知らぬ顔ですれちがっても大丈夫）

との自信がある。

ずいぶん悩んだが、ついに決心をして妻を迎えることにした。

近頃の十兵衛は四十五、六歳に見えるが、実はまだ三十三歳。性欲も旺盛であるし、だからといって町医者としての人格が近辺の人びとの尊敬をうけるようになってきた現在では、うかつに娼婦を漁るわけにもゆかない。

お芳を妻にしてみると……。

（これは……）

十兵衛は歓喜した。

かつて、夏目甚右衛門のむすめ於房を恋し、その望みを達することが出来ず、以後、妻をめとる気もちになれぬうち、あの事件を引き起して流浪の旅へ出た十兵衛である。

それからは、行く先々で、娼婦の荒みきった肌を抱くのが精いっぱいのところであった。
お芳は、三十をこえて尚、みずみずしく、長年の独身生活をつづけてきただけに、十兵衛と再婚したことによって「女の精気」が一度にほとばしり出た感じであった。
日中はあくまでしとやかに、医者の妻としての役割を果しているが、夜、十兵衛の腕に抱かれると、まるで小娘のように甘えかかり、夫の愛撫のひとつひとつに、
「うれしゅうございます、うれしゅうございます……」
の連発なのである。
十兵衛たるもの、満足でないわけがない。
（おれの運命は、ここから、ひらけるのかも知れぬ。金もいらぬ、名誉もほしくない。このお芳と二人、ひっそりと暮してゆけたら、もうおれは何一ついうことはない）
夏目半五郎には決して見つけられぬ、という自信は大きくふくれあがるばかりとなった。
それでも用心のため、十兵衛は小さな刀をいつも腰に帯びていたが、もう何年も剣術の稽古をしていないし、
（いざとなったら、いまのおれは、半五郎にも負けてしまうだろう）
その不安と歩調をそろえるようにして、
（だがもう、決して見つけられぬ）
との予感が強い。



町医者としてのつとめと、お芳への愛撫とに、井関十兵衛は充実した日々を送りはじめた。

## 五

また、一年がすぎた。
すなわち文化二年八月十八日（現代の九月下旬）夜のことであったが……。
いつものように、井上玄貞こと井関十兵衛夫婦は寝所へ入り、
「いつの間にか、秋になってしもうた……」
「ほんに……」
「なにやら冷え冷えとしてまいった」
「お風邪をめしませぬように……」
「なに大丈夫だ。ほれ……ほれ、こうして、お前のあたたかい肌が、私を温めてくれるもの、な……」
「あれ、そのような……」
「よいではないか。さ、もっと、私を抱きしめておくれ」
などと十兵衛、まるで若者のような甘いささやきをお芳にあたえつつ、豊満な妻の躰をまさぐりはじめる。
まだ子は生まれぬが、足かけ二年の夫婦生活で、お芳はまた少し肥えたようである。肌はいよ

いよつややかになり、ねっとりとした凝脂が乳房や腰のあたりにみなぎって、
「お前の……お前の躰は、もう私を夢中にさせてしまう」
「まあ、そのようなことをおっしゃって……恥ずかしい」
「かまわぬ、本当なのだから……」
「いやでございます」
「いやか。私がいやか」
「ま、そのようなこと、いつ申しました」
「好きか、では好きか」
「あい」
「ならば、こうして……な、な……」
「ああ、もう……」
布をかけた丸行燈の、ほの暗いあかりの中で、十兵衛もお芳も寝衣をぬぎ捨て、もう無我夢中で愛撫の交歓へおぼれこんだ。
と……。
ここへ、賊が侵入して来たのである。
賊は一人きりであった。
戸締りは厳重にしていたのだが、台所の天窓から身軽に忍び込んで来たのだ。



相当に馴れたやつで、こやつが足音もなく、十兵衛夫婦の寝所の次の間へ入りこんで来たとき、まだ夫婦はこれに気づかず、
「お芳。私は、うれしいぞ。お前のようなひとを妻に迎えて……こ、こんな、しあわせなことはない」
「わたくしも……ああ……わたくしもでございます、あなた……」
賊の黒布でおおった顔が、闇の中で苦笑したようだ。
腰の大刀を抜きはらい、境の襖を引き開け、賊は突風のように寝所へ躍りこみ、
「さわぐな」
白刃を十兵衛の裸の背へ突きつけた。
「あっ……」
と、お芳が十兵衛の胸の下で悲鳴をあげた。
「さわぐな」
もう一度、賊がいった。
このとき、十兵衛は、
（来た。夏目半五郎が来た……）
そう思いこんでしまった。
彼は、素早く身を転じ、裸体のまま枕もとの脇差をつかむや、猛然とはね起きた。

これが、いけなかった。

賊は、手向いをしなければ殺すつもりはなかったらしいのだが、十兵衛は町医者に似合わぬあざやかな体のさばきで脇差をつかんだものだから（もうこれまで）と思ったのであろう。

「くそ!!」

片ひざを立てて脇差を抜こうとした十兵衛へ刀を打ちこんだ。

「うわ、わわ……」

賊も只者（ただもの）ではない。間髪を入れぬ斬撃であって、十兵衛もかわしきれなかった。

血飛沫（ちしぶき）をあげ、十兵衛が倒れ伏した。

「う、うう……」

そのうめきが最後で、彼は、あっけなく即死したのである。

これを見て、半身を起したお芳がポカンと口をあけ、これはあまりの驚愕（きょうがく）に気をうしない、へなへなと床の上へくずれ倒れた。

賊はお芳にはかまわなかった。

死んだ井関十兵衛を見下し、

「ばかな野郎だ、まったく……」

舌うちを洩（も）らした。

この賊……なんと、乞食浪人の山口七郎なのである。



三年前。夏目半五郎にたのまれ、坂本の要伝寺附近で、遠くから十兵衛の顔や姿を見かけもしたし、一度は、浅草まで後をつけたこともある山口浪人だったが、そのことはもう忘れてしまっている。

いま、はね起きたときの十兵衛の顔を見るには見たが、口のまわりからあご、のどもとにかけて、見事に手入れをされた長いひげや、見ちがえるように肥った十兵衛の顔貌（がんぼう）をちらりと見たところで、三年前のことを思い出すわけがなかった。

うつ伏せに倒れている十兵衛の死顔をあらためようともせず、

「さてと……」

山口七郎は、寝所から居間などの部屋をさがし、およそ二十両ほどの金を盗みとった。

（近所のうわさでは、評判のよい、小金をためこんでいるらしい、とのことだったが、それほどでもねえ。ま、いいわさ。二十両あれば、当分、酒と女に困ることもねえ）

いままでに、こうした悪事を何度もはたらいてきている山口七郎だが、盗みに入って人を殺したことは一度もない。手向いをせぬものを斬るのはきらいな山口浪人であった。

それだけに、

（ばかなやつめ。それにしてもこの医者、かなり武芸の心得があると見える。あの、はね起きたときの殺気はすさまじいものだった……だから、おれもつい、斬ってしまったのだが……）

もう一度、倒れている十兵衛夫婦を見下し、

（こんな、美い女房がいるというのに……なにも、おれに手向いしねえでも……）

また舌うちをし、あとはもう振り向きもせず、山口七郎はこの家を出て行った。

そのあとでお芳が息を吹き返してから、十兵衛宅の附近は大さわぎとなった。

そして……。

井関十兵衛は、好人物の町医者・井上玄貞として、麻布の大長寺へほうむられ、立派な墓もたてられた。

そのころ、

夏目半五郎は大坂にいた。

（十兵衛め、どこへ行ったものか……さっぱり、手がかりがつかめぬ。しかし……しかしなあ、たとえ、めぐり合ったところで、おれの腕ではきゃつの首を討つことは出来ない。江戸の永井の叔父上も、国もとの親類どもも、このごろは路用の金をもらいに行くと、まだ敵を討てぬか……と、実にもう、いやな顔つきになる。母上も、もう六十を越えた。もう、母上が生きておられるうちに故郷へ帰れそうにないなぁ……こうなれば、もう死にものぐるいで、なんとか井関十兵衛を討たなければならぬ）

半五郎も発奮しはじめたようである。

大坂の順慶町にある薬屋で加勢屋宗太郎方へ身を置き、十兵衛をさがしまわりながら、半五郎は西横堀・尼崎橋たもとに一刀流の道場をかまえる小林主膳のもとへ通い、熱心に剣術の稽古を



はじめている。

こうして、三年、五年の歳月がながれ去った。

（ああ、もう、おれも四十近くになってしまった……故郷を出てから、もう十六年か……母上も、ついに……ついに去年、お亡くなりになったか……そのお墓へも行けぬ、おれだ。なんとか一日も早く、十兵衛を討たねば……討たねばならぬ）

十兵衛の死を知らぬ夏目半五郎は、東海道、奥州、中仙道と、諸国を経めぐり歩きつつ、旅の垢にまみれ、いまはもう必死で、敵の姿をさがしもとめているのであった。

# 白痴

## 一

背丈が低く、ぼってりと肥っている。

あまり血色がよくない腫んだような顔にはひげあともなく、小さくまるい双眸が、いつも臆病そうにまたたいている。

のろのろと、それでも一生懸命によくはたらくけれども、あきれるほどの無口で、静かな暮しをしている主人夫婦は、彼がうけこたえをする「はい」ということばだけをきいて一日をすごしてしまうことがめずらしくない。

温和しいが、陰気である。

こうした彼……寅松は、まだ二十歳の若者であった。

二年前から、麻布・本村町に住む浪人・田中源四郎の下男として、江戸に暮している寅松であった。

その日の午後もおそくなってから、急の用事だというので、寅松は主人の手紙をもち、目黒の細川越中守下屋敷の近くにある大橋左兵衛方へ使いに行った。



大橋は幕臣で、主人の田中とはごく親しい間柄なのだ。

夏の夕闇が濃くなってから、寅松は大橋の返書をもらい、帰途についた。

白金九丁目の松平讃岐守下屋敷の横道を北へ入り、寅松は広尾の原へつづく田畑の道をすすむ。いつも大橋邸へ使いに来るときの道すじである。

蛙が、やかましくなきわめいている。

（おや……？）

彼方に、くろぐろと見える伊達家・下屋敷のあたりで、何か人の声がきこえた。

女の、叫び声のようであった。

寅松の顔色が変った。

夕闇が夜の闇に転じつつある。

風もない、むし暑い夜になるらしい。

また、女の声がした。

寅松は提灯の柄をにぎりしめ、われにもなく、声がした方向へ走り出していた。

あたりは、田地と雑木林がひろびろとつらなり、人影は全くない。

伊達邸の手前の畑道へ出たとき、寅松は、全身の血が逆流するように感じた。

もがきぬいている女を、屈強の男が二人で抱えこみ、東側の雑木林の中へ引きずりこむのを、はっきりと見たからである。

寅松の小さな眼が張り裂けんばかりに見ひらかれ、

「う、うう……」

彼は、獣じみたうなり声を発した。

温順で、荒い口をきいたこともなく、どこの男と喧嘩をしてもかならず負けるにちがいないとおもわれる寅松が、怖れげもなく雑木林の中へふみこんで行くのを見たら、主人の田中夫婦は瞠目したろう。

寅松は、木立へ入るときにまくわ瓜ほどの石をひろった。

若い女であった。近辺の農家のむすめでもあろうか。これを二人の男が押えこんでいる。

一人が女のあたまの上へ腰をおろし、女のくびと、両腕をしめつけ、別の一人が女の躰へおおいかぶさった。

すでに女は手ぬぐいの猿ぐつわをかまされ、白い胸も下半身もむき出しにされ、半ば気をうしなった様子であった。

「早く、早くしろい」

一人がいった。

女へ乗りかかっていた一人が荒い呼吸を吐きつつ、うごきはじめたとき、

「わあっ……」

すさまじい叫びと共に寅松があらわれ、両手に持った石を、男のあたまへたたきつけた。



「ぎゃあっ……」

絶叫をあげた男が、女の躰からはねとぶようにしてころげ倒れた。

女の両腕を押えていたもう一人は仰天したらしい。悲鳴をあげ、必死に逃走した。

寅松は立ちつくしたまま、うごかない。

乳房や股のあたりを露出し、まだ気をうしなっているらしい女が、寅松にはそのまま、十二年前のあのときの姉に見えた。

寅松は、近江の伊吹山の東麓にある笹又という寒村に生まれた。

両親は貧しい百姓で、はじめに母が亡くなり、寅松が六歳のときに父も病死してしまった。

十ちがいの姉・おさいと共に、寅松は庄屋のもとへ引きとられた。親類もいたのだが、いずれも貧農で、姉弟を引き取ることができなかったからである。

姉も弟も、庄屋のところで大人なみの労働をさせられた。

その二年間、姉のやさしいいたわりとはげましを、寅松は生涯忘れないだろう。

その姉のおさいが、古屋の村外れで旅の浪人につかまり、山林の中で犯された上、撲殺されたのは、寅松が八歳の夏である。

姉と共に古屋に使いに出た寅松は、これを見ていた。

見ていたが、あまりのおそろしさに足がすくみ、どうすることもできなかった。

浪人は、いきなり姉を撲りつけ、失神させると、狂暴に犯した。犯しながら狼のような眼つき

で、寅松をにらみつけていた。

「姉や……姉や……」

浪人が去ったあと、寅松は姉にすがり、何度も呼びかけたが、ついに姉は息を吹き返さなかった。なぐり倒されたとき、あたまを強打し、そのまま死んだらしい。あたまからながれる血が、草にあふれていたし、無残に押しひろげられた細い下肢も血にまみれていた。

「畜生、畜生……」

そのとき、無頼浪人へ向けて放ったのろいのことばを、十二年後のいま、寅松はつぶやいている。

この十二年間に、寅松は二度ほど、暴力に犯されようとしている女を助けている。いつのときも無我夢中であった。いつのときも、女を犯す男たちが、姉を犯すあの浪人に見えた。

「あ、ああ……」

むっくりと、倒れていた女が身を起し、立ちはだかっている寅松を見、おびえた。

(おれじゃない、おれじゃない)

いおうとおもったが、口中が乾ききって声にならない。

女が、地をかきむしるようにして逃げにかかった。

倒れた男はびくりともせぬ。

手をのべて見ると、べっとりと血がついた。



(死んだ……)

以前、こうしたときは寅松が相手になぐりつけられるか、または他人が叫び声をきいて駈けつけてくれるか……その間に女が逃げてくれたものだし、相手も逃げてくれた。

石で、相手のあたまを叩き割ったのは、はじめての経験であった。

(殺した……おれは、人を殺した……)

そのとき、木立の向うの畑道で救いをもとめる女の叫びがきこえた。

どうしてよいかわからぬ。

あたまの中に血がのぼり、全身に火がついたようで、寅松は両手を闇へさしのべ、木立をぬけ、沼のほとりの草道を夢中で駈けつづけた。

この夜。

寅松は、ついに主人の家へ帰らなかった。

次の夜も、さらに次の夜も……。

十日を経て、失踪ということになった。

主人の田中源四郎は、浪人ながら小金もあるし、一人息子の安太郎が幕臣・矢口主馬の家来になっていて、安楽な身の上であった。

田中は、瀬戸物町で蠟問屋をいとなんでいる西村屋嘉七方へ行き、寅松の行方不明について語った。

「よくはたらきくれましたのに、どうしたものか……残念でならぬ」

と、田中がいえば、西村屋嘉七はこういった。

「寅松が、この先の通りで、腹を空かし、行き倒れになっていましたのは四年も前になりますが……なんでも近江の山の中の生まれで、親きょうだいにも死別れたとかで……ずいぶんと辛いおもいをしながら、乞食同様の旅を二年もつづけていたと申します。とにかく助けてやり、私のところへおいておきましたところ、それはもう、よくはたらいてくれましたが、何にせよ、あの通りの口もろくにきけない男で、他の奉公人にもからかわれたり、なぶられたりで、ま、気の毒にもおもいましてな。そこへ、あなたさまから、ひとつ下男を世話してくれとのおたのみで、これはよい。田中さまならば、あの男も安らかにはたらけましょうと考え、それでお世話をいたしましたなれど……さてさて、困ったものでございますなあ」

## 二

それから六年の歳月がながれた。

あの夜。

寅松に石塊でなぐりつけられた男の姿を、いま、下谷・三ノ輪町の米屋佐吉の店先で見出すことができる。

彼は死んでいなかったのだ。



店の内にすえられた米槽の足杵を踏み、米をついているのが彼……平次郎であった。

いまの平次郎には、六年前のあの夜、欲情に狂奔していた無頼の若者のおもかげはまったくない。

むっくりと肥った大きな躰をのっそりとうごかし、米俵をかついだり、米をついたりしている平次郎を近辺の人びとは、

「米屋の白痴平」

などと、よんでいる。

そんなにひどい呼び名を面と向っていわれても、彼はにやにやと人の善さそうな微笑をうかべるのみで、怒るどころか口ごたえもせぬ。

まげもゆえぬほど頭髪はうすくなってい、四十五、六の年齢に見えた。(このとき平次郎は三十歳である)

米屋の主人は、

「平次郎は知り合いにたのまれて使っていますがね。やることは万事鈍いが、ちからは大そうなもので……いえ、そりゃあね、私どもにもめったに口などききませんよ。にやにやしながら、のろのろとはたらいているだけのもので……ですがまあ、人は善いし、というよりもやっぱり、あたまが少しどうかしていますよ。へえ、六、七年前に、あたまへ大怪我をしたとかで、それからこっち、ああいう人間になっちまったんですねえ、ええ、いまでもね、月に二、三度、あたま

が痛む、あたまが痛むと苦しがることがありまして、そんなときには、なにかこう、図体が大きいだけに、こっちも可哀そうになりまして、へえ……」

などという。

平次郎について、いささかのべておかねばなるまい。

彼は、本所辺りの瓦屋の職人の子に生まれた。しがない暮しの中で、父親が病死をしてしまったのは平次郎が十歳のころであったという。

以後、平次郎は父親がはたらいていた瓦屋で、まっくろになりながらはたらきぬいた。

十八歳になって、いくらか賃金もふえたころ、母親が死んだ。

一人っ子の平次郎には身寄りもなかった。

父母の在所は武州・岩淵だときいていたけれども、それだけのことである。父も母も、むかしの自分たちのことを何一つ平次郎へ語らなかったし、平次郎も別に気にとめてはいなかったのだ。

とにかく、母が死んでから彼の行く道が曲りはじめた。

のちに、平次郎が渡り中間となってから友だちへ、

「親も兄弟もなく、ましてや女房もいねえ家庭というものがどんなものか……このさびしさというもなぁ、なって見なくちゃぁわからねえさ」

と、洩らしたことがある。

〔渡り中間〕というのは、江戸に二軒ほどある口入屋を通じて諸方の武家屋敷へ奉公をする下僕で、俗に折助ともいう。主として旗本屋敷で使われるが、江戸時代も末期となったそのころでは、人手不足で大名屋敷でも口入屋から中間を入れるようになった。

いずれにせよ〔渡り中間〕は諸方の屋敷を渡り歩いて来ているから、俗にいうすれっからしというので、酒はのむ、女は買う、博奕はうつと三拍子そろった連中が多い。

家庭の温味をうしなった平次郎が、瓦屋を飛び出し、ながれながれたあげく、この〔渡り中間〕になったのも、うなずけようというものだ。

六年前のあのころ。

平次郎は、目黒の伊達遠江守の下屋敷の中間部屋にいた。大名の下屋敷というのは〔公邸〕といってもよい上屋敷とちがって、いわば別荘のようなものだし、だから〔渡り中間〕などは、もっぱら下屋敷、中屋敷での奉公ということになる。〔公邸〕ではないから、口やかましいこともなく、人手も少ない。気楽である。

中間部屋が、夜になって博奕場に変ることなどは、むしろ当然とされていたのだ。

あの夜。

平次郎は、同じ伊達邸にいる渡り中間の七造という者と、目黒の六軒茶屋町裏の居酒屋でしたたかに酒をのみ、伊達邸の近くまで帰って来た。

それは、寅松がそのあたりへ来かかるほんの少し前であった。

「おい、見ねえ」

と、七造が平次郎の肩を小突き、にやりとして、
「そこの畑道をやって来るむすめなあ……」
「うむ、うむ」
「平公。いただいちまおうじゃぁねえか」
「やるか」
と、平次郎も七造も、今までにこんなことは何度もやってのけている。
うなずき合ったかと見る間に、たちまち、農家のむすめへ襲いかかり、雑木林の中へ引きずりこんだのである。
七造が上から女を押え、平次郎が先に犯しにかかった。そこへ寅松があらわれたというわけだ。
石塊であたまを打たれてからの平次郎には、いっさいの記憶が消えた。
気がついたとき、彼は麻布・広尾の新堀川の岸辺へかがみこみ、しきりに水をのんでいたという。そして、そのときの平次郎は中間の制服ともいうべき紺の法被も柿色の帯もどこかへぬぎすてていて、下帯一つになっていたそうだ。
血だらけになって、苦しげに胸をかきむしりつつ、川水をのんでいる彼を発見したのは、この近くの正蓮寺という小さな寺の和尚である。
朝だったというから、おそらく翌日になっていたものと見える。
和尚が平次郎を助けてくれた。医者に見せ、寺へ引き取って寝かせ、根気よくめんどうを見てくれた。



はじめのうちは恐ろしいうなり声をあげるばかりで、どうにも手がつけられなかった平次郎だが、半年もすると病状が落ちつき、食欲がすばらしくなった。
「食べるわ、食べるわ、この貧乏寺の屋台がつぶれるかとおもうたぞよ」
と、和尚があきれたほどだ。
一年もたつと、なんとか口をきくようになった。それも「うまい」とか「くたびれた」とか「ねむい」とか「はい」とか「うん」とか……。
和尚が、いかに彼の過去をおもい出させようとしてもだめであった。
それから数年、平次郎は正蓮寺の下男としてのそのそとはたらいていたのだが、
「ひとつ、私のところでお引きうけ申してみましょう」
こういい出したのが、米屋佐吉なのである。
佐吉は広尾の村の、かなり大きな百姓（正蓮寺の檀家）の次男坊で、十五年ほど前に三ノ輪へ別家して米屋をはじめていたのだ。
「さようか。当寺にいたのでは、平次郎の行先も知れてるでの。何せ、このような貧乏寺じゃで、まんぞくに食べさせてもやれぬ」
和尚も大よろこびであった。
で、彼は米屋佐吉方へ引き取られたわけなのだが、実は「平次郎」という名も、そのときに佐

吉がつけてくれたのである。まったく記憶を喪失してしまった彼ゆえ、おのれが〔名〕をおもい出す筈はない。

米屋佐吉は、五歳で亡くなった末の弟の名を彼につけてくれたのであった。

さて……。

ここで現在の〔白痴平〕にもどろう。

その年、文政九年の秋の或日ことであったが……。

店前の通りで、荷車の上から、平次郎が米俵をかつぎ、店の中へ運びこんでいると、千住の方向からやって来た若い男が、よちよちと足をはこぶ平次郎とぶつかりそうになり、

「ばか。気をつけろい!!」

怒鳴りつけた。

店先にいた米屋佐吉の女房おきよが、あわてて飛び出し、

「これはどうも、とんだ失礼を」

と、わびた。

相手の男は茶みじんの着流しで、いかにも人相のよくない顔つきの、いわゆる遊び人か無頼者とすぐにわかったから、めんどうなことになってはと、おきよが走り出て、わびたのである。

若い男は、白い眼で米屋の女房をにらみ、その視線をぐいと平次郎へ向けた。

平次郎はあたまも下げぬかわり、米俵をかついだまま、屈託のない笑顔で若い男をながめている。



男はするどい舌うちを鳴らした。

小柄な、骨張った、いかにもすばしこそうを体軀をひとゆすりするや、

「このうすばか野郎!!」

いきなり、平次郎の顔へ痰を吐きつけたものだ。この痰がべとりと自分の鼻のあたまへ貼りついたのを、平次郎が左手でふきとり、にやにやしながら店の中へ入った。

おきよは口惜しがったが、それでもまた、あたまを下げた。

若い男は肩をそびやかして、去った。

この男こそ、寅松であった。

平次郎はむろんそれとわかる筈もなく、寅松もまた、あの夜、自分が石塊でなぐりつけた男が生きているとは、ゆめにも思っていなかった。

## 三

寅松は、半年ほど前から金杉上町の裏に住みついていた。

米屋佐吉の店前の通りは日光・奥州両街道の道すじにあたり、三ノ輪、金杉、坂本と上野山下へつづく往還には種々の店やが立ちならび、昼も夜もにぎわっている。

だが街道の西側へ入ると、寺院と百姓地で、その間に諸家の寮が点在するという、まるで田園

の風景であった。

その一角、安楽寺という寺の北側の竹藪の中に、小さな百姓家がある。半ば朽ちかかった空家であったのを、借りたのだが、金を出したのは寅松だけれども、借主は半助という五十男だ。

寅松がこやつと共に暮しはじめて、もう二年になる。

半助の稼業というものは、いわゆる〔つつもたせ〕というやつで、仲間の女に男をとりもち、二人が逢びきをしている最中に別の男を乗りこませ、

「おれの女房に手をつけやがったな」

と、いんねんをつけさせ、男をゆすりにかけるというわけだ。

だから、いま、いざというときに逢びきの場所へ飛びこむ役目は、寅松がつとめている。

はじめは半助を助けるかたちだった寅松なのだが、いまは寅松が、

「爺つぁん。今度はこうするぜ」

と、指示をあたえ、ゆすり金の分配も寅松がやる。

それというのも、寅松と組んでから〔ゆすり金〕の額も多くなってきているし、半助はむしろ、

「ずいぶんとこの稼業をつづけてきたが、寅さん、お前のような凄腕の相棒と組んだことはねえ。お前が来てからは、いっちおいらは気が楽になったぜ」

と、こういう。



ところで、彼らの道具となってはたらく女は二人で、おもん・およねという。

おもんは、浅草・本願寺門前の甘酒屋ではたらいている。こういうところの女を目当てに通う客が多く、甘酒屋の主人へ〔連れ出し料〕を払えば、女を他へ連れ出すことが黙認される。そのころの一種の私娼といってよい。

およねにしても同じような女であった。

〔つつもたせ〕というのは、男が自分の情婦なり女房なりをつかって悪事をするのが常道なのだが、寅松と半助の場合は少しちがう。

二人とも、おもんやおよねにゆび一本もふれない。

しかも、たっぷりと稼ぎの金を分けてやる。

だから二人の女は大よろこびだし、栄養のゆきとどいた、いかにも素人女らしい健康さをみなぎらせてい、その魅力が客の男を釣り上げるための貴重な武器であったから、

「おれたちは、これだけ、お前たちを大事にしているのだから、他に男と遊び歩いたりしちゃぁいけねえ、。小金がたまったら親きょうだいにもつくしてやれることだし、お前たちもしあわせになれる」

半助がこんこんといいふくめてある。

客を見つけるのは半助の役目であった。

主として、商家の主人や番頭が多い。

これと眼をつけるや、何日もかかって客のことをしらべる。金があって、しかも店の看板ゆえに女へうかつな手をのばせず、それなのに〔浮気ごころ〕をいつも抱いている中年がらみの男…それが二人の客であった。

彼らに近づいてゆくときの半助は、長年この道で生きてきて、一度もお上のお縄へかかったことがないだけに、さすがにたくみな仕事ぶりをする。

五十男だが六十に近い老けた風貌の、それも上品な顔だちで、りっぱな服装をして、目ざす相手の外出時をねらって近づく。場所は、相手次第。町中の料亭へ来ているところをねらい、廊下で相手にぶつかったりして、

「おや、これはとんだ粗相を……」などとあやまり、口のききよう一つで、すぐに顔見知りの間柄へもちこんでしまう。

親しくなって、相手の店へもたずねて行き、すっかり信頼をされるようになってから、

「実はその、年甲斐もないことですが、先日、或人に手引きをされましてね。まことにその結構なおあそびをさせていただきましてねえ……いえ、それが、正真正銘の素人女なので」

すると、相手の眼がきらりと光り出す。

そうなれば、あとはわけもなかった。

こういうときの半助は、江戸からはなれた土地の商家の主人というふれこみで、江戸見物に来て、どこどこへ宿をとっているという。事実その間だけ、半助は日本橋あたりの宿屋へ泊りこんでいるのだ。



こうして、客を金杉裏の農家へ連れこみ、おもんかおよねと合わせる。

狂喜した客が、女と寝床へ入ったとき、寅松が長脇差を引きぬいて飛びこんで行くのだ。

金杉裏ばかりでなく、半助と寅松は、巣鴨にも同じような家を一つ借りうけている。

客をおどしつけてゆすり取る金高は、先ず五十両前後。女に十両をあたえ、のこる四十両を二人で分ける。当時、庶民の一年の生活は十両でまかなえたというから、寅松がいくら博奕と酒につかっても、そうあくせくとやらないでもよい。先ず、二月か三月に一度ほどで、

「これ位がちょうどいいのさ。がつがつ稼げば、きっと足がついてお上の眼が光る」

と、半助がいった。

半助は相州・小田原の在に女房も子供も、家もあるそうだが、くわしくは身の上を語らなかった。

寅松は、いまの仕事に異常な情熱をもっていた。

ふだんは大店の主人として奉公人をあごで使い、おさまり返っている男が、まるで獣のように女の肌身へいどみかかってゆくのを見すまし、

「野郎。よくもおれの女房を……」

長脇差を振りかぶり、飛び出して行くときの昂奮。おどろきあわてて顔面蒼白となり、両手を合わせてゆるしを乞う客のあさましい姿へつばを吐きつけてやるときの快感のすばらしさ。さら

に日をあらため、客の店へあらわれ、約束の大金を受け取り、引きあげてくるときの愉快さ。そのたびに寅松は、死んだ姉・おさいの敵を討ったような気持ちになってくる。

寅松は、おもんとおよねには、いつも兄のようにやさしかった。

## 四

それは、寅松と平次郎が三ノ輪の通りで、たがいにそれと知らず出会ってから半月ほど後のことだが……。

「久しぶりで、客をとるよ」

と、半助が金杉裏藪の家へ来て、寅松にいった。

「いいとも、爺つぁん」

「ま、これで正月が越せるだろうよ。おりゃ、正月は女房子のところですませてくるがね」

「小田原の……？」

「場所はきかねえ約束だぜ」

「うむ」

寅松は、ふっと、さびしそうな顔になった。

半助は冷酒をゆっくりとのみながら、その寅松を見まもっていたが、

「寅さん。来年中にはお別れだねえ」



といった。

「別れる？」

「おりゃ、同じ相棒と長くはつきあわねえのさ」

「なるほど」

「それになあ。故郷へ金を送りつづけてもう何年になるか……どうやら、小さな商売が出来る見こみもついてなあ」

「足を洗うのかい」

「お前もどうだ、一緒に洗っちゃぁ……」

「ふん……」

「何がおかしい？」

「洗った足で上る家もねえや」

「上るところをつくればいいさ」

「六年前のおれなら……」

「いつか、きいたっけなあ。人ひとり殺めたのがきっかけとなって、悪事の道へ踏みこんだと……」

「もういうな」

「おれだって寅さん。人を三人も殺っているよ。お前と同じに泥沼へ突込んだ足だが、なんと

かぬけそうだ。というのもなあ、女房子供をこしらえてしまったからよ。ま、やって見ねえ。なんなら、おれが世話をするぜ」

「え……？」

「おもんさ」

「なんだと？」

「あの女、お前に惚れている。そうは思わねえか」

「……」

「ま、いいや。よっく考えておきねえ。おれもなあ、このごろは、この眼力が鈍ったようでな。客をえらぶのに……」

ゆすりにかかるような金持ちの客をえらぶ勘がにぶってきたようで、自信がもてぬと、半助はいうのだ。

もっともなはなしで、この仕事は危険といえば実に危険なのである。女あそびに出て来るときの客のふところに何十両という大金が入っている筈はない。現場でも、客の財布は奪い取ってしまうが、さらに寅松と半助が相手の家へ乗りこみ、ゆすり奪って来なくてはならない。奉公人や女房子の手前、仕方なしに、ゆすりとられてしまうような気の弱い男を見つけることは、なかなか気骨の折れる仕事なのだ。

大きな商家には、近辺の御用聞きも出入りをしていることだし、うっかり出来ないのである。



今度、半助がねらいをつけた〔客〕は、麹町・平川二丁目の書物問屋で山城屋の主人藤兵衛という。

半助は、市ケ谷八幡宮の境内にある茶店で、山城屋藤兵衛へ近づいた。

「よいお天気でございますねえ」

人なつかしげに声をかけたのが、きっかけであった。

半助は、東海道・藤枝で酒造業をいとなむ治平という者だと名のった。

生まれてはじめての江戸見物だと、半助がうれしげにいうのをきいて、山城屋藤兵衛は、

「おひまのときは私どもへもお立ち寄りなさい」

と、いった。

こうなればもう、半助の巧みな演技術に相手が引っかかるのはいつものことで、三度ほど会ったのち、

「おどろきましたよ山城屋さん。江戸には大そうなあそびがあるもので……」

と切り出し、素人女の売春についてふれるや、山城屋は身を乗り出し、あたりに気をつかいながら、

「ひとつ、私にも……」

と、たのみこんできた。

山城屋藤兵衛は五十五、六の年ごろで、鶴のように痩せた、上品な顔だちの人物で、二度目だ

という女房は三十をこえたばかり。子供が三人いるし、近辺では非常な人望を得ていて、諸方の武家屋敷へ出入りをゆるされ、資産も大きい。

「では寅さん、たのむよ」

「いつだ？」

「明後日の七ツ（午後四時）ごろだよ」

「よし」

裏の椋の木の上で、椋鳥がやかましく鳴いていた。

「女は、おもんにするよ」

と、外へ出て行きながら半助がいった。

## 五

その日の夕暮近いころ。

半助は、上野山下の〔浜田や〕という料理屋で、山城屋藤兵衛と待ち合わせた。二人で酒をのんでいるところへ、又蔵という三十男がやって来る。

この又蔵、いつも半助の手先になってはたらく男で、本業は本所石原の豆腐屋なのだ。

「では、たのみましたよ」

「へいへい。旦那、こうおいでなさいまし」



浜田やを出た又蔵は、町駕籠にのせた藤兵衛を案内して金杉へ向う。

どんよりと曇った、妙にうすらさむい日であった。

同じころ。

三ノ輪の米屋佐吉方では、主人の佐吉が、平次郎に用事をいいつけていた。

「平や。根岸の宇治屋さんへ、いつものように米をとどけておくれ」

「へい」

平次郎は、すぐに仕度にかかった。

〔宇治屋〕というのは、根岸にある料亭である。

そのころの根岸は、武州豊島郡金杉村の内というわけで、上野の山の北面にあたるこのあたりは、風景にも情趣があり、俗に〔うぐいすの里〕などともいわれ、江戸市中に住む物持ちの別荘地でもあったし、だから料亭・宇治屋も風雅なわらぶき屋根、木立のこんもりとしたひろい庭。そこに三つほど離れ座敷もあって、四季それぞれにおもむきがあるというので、なかなかの繁昌ぶりだという。

平次郎は一俵の米をかるがるとかつぎ、その上から佐吉の女房に紺もめんの大風呂敷をかぶせてもらい、のそのそと店を出て行った。

金杉上町の足袋屋の横道を、平次郎は入って行き、安楽寺の門前をまっすぐに行く。

右側の向うに竹藪が見える。その中に寅松の家があるなどとは、むろん平次郎は考えてもみな

い。

彼が、この道を根岸の方向へ去って間もなく、安楽寺の塀沿いに、山城屋藤兵衛を案内して来る又蔵を見出すことができる。

表通りで、山城屋は駕籠から下りたものらしい。

晩秋の夕暮れであった。

しかも曇り空だけに、もうこのあたりへ入ると、あまり人影も見ない。

「さ、こちらでございますよ」

又蔵は、少しも相手に警戒させぬよう、神経をつかいながら、山城屋を竹藪の中へ連れこんだ。

ここで、山城屋は又蔵へ金三両をあたえる。

何も彼も、これですむことになっている。

「へい、たしかに」

又蔵は押しいただいた。この金は全部、彼のふところへ入れてよい。豆腐屋は女房と弟にまかせて、彼はこんな仕事ばかりしている。

「さ、あの家でございます」

「気味がわるいねえ」

「とんでもございません。中に、ちゃんともう……へ、へへ……待ちかねておいでなので」

「ほんとうだろうね？」



山城屋藤兵衛、いい年齢をしてにたにたと笑い、いそいそと家の中へ入って行った。

これを見とどけた又蔵、身を返すや、脱兎のごとく逃げ去ってしまった。

家の中は、土間と二部屋だけで、別に家財道具があるわけではないが、障子も白く、畳も清い。

炉には火が燃えてい、春のようにあたたかかった。

土間へ入り、障子を開け、こうした屋内の様子を見とどけた山城屋藤兵衛が、

「もし……」

声をかけた。だれもいなかったからである。

と……。

裏手への板戸が開き、うつ向いた女が出て、しっとりと会釈をし、そこへすわった。おもんである。

藤兵衛は、ひと眼見て、

（たしかにこれは、正真正銘の素人女だ）

何かこう、ぞくぞくしてきたようで、

「お前さんかえ？」

「はい」

つつましやかな返事である。

おもんは、炉端へ来て、藤兵衛へ茶をいれた。藤兵衛もゆっくりと煙草をのむ。素人女ゆえ泊

りはならぬが、家も近いことだし、ゆっくりとあそんで行ってくれ、と又蔵が藤兵衛にいってある。

茶をのみながら、藤兵衛は奥の間へ視線を投げた。小屏風の向うに夜具がのべてある。それを見ると、もうがまんがなりかねたらしく、藤兵衛が茶わんをおき、はじらっているおもんの手をとった。

「こっちへおいで」

「あい……」

髪あぶらのにおいが藤兵衛の鼻腔へ飛びこんできた。あまり化粧はしていないようだが、健康な女の肌の香りが、藤兵衛をたまらなくさせたようであった。

藤兵衛は、女のくびすじへ唇を押しつけ、

「あ、あっちで、ゆっくりと、お前さんの身の上を聞こうじゃないか、え。はなしによっては、私がその、いろいろとちからになってあげてもいいよ」

ささやきつつ、女の肩を抱いて共に立ち上り、奥の間へさそった。

行燈にあかりは入っていず、土間は暗かったが、炉に燃える炎の影が部屋の中へゆらめき、それがまた秘密の遊びごころを掻きたててくる。

「あたくし、お先に……」

おもんがいい、先へ小屏風の蔭へ入って着物をぬぎはじめた。それを、ちらちらと見やりつつ、



山城屋藤兵衛も羽織、帯、着物をぬぎ、肌じゅばん一つになり、

「いいかえ。行くよ、行きますよ」

行くと、おもんは夜具へ入り、藤兵衛に背を向けていた。

そっと、藤兵衛が夜具の中へ躰をすべりこませ、

「あっ……」

といった。

おもんが、身にまとっているもののすべてをぬぎ去っていることに気づいたからだ。

藤兵衛は歓喜の表情で、いきなり、おもんを仰向かせ、

「また会っておくれ。いいかえ、いいかえ、きっとだよ」

などと、うわ言のように口走り、女の躰へのしかかっていった。

裏手へ通ずる板戸を開けて閉め、抜身の脇差を持った寅松が躍り込んで来たのはこのときである。

「野郎。よくも、おれの女房を寝取りゃぁがったな!!」

例のごとく、すさまじいわめき声を発しつつ、寅松は奥の間へあらわれた。

「あれえ……」

けたたましいおもんの悲鳴。これも例のごときものだ。

「や……」

藤兵衛もおどろいて飛び起きた。
おもんは悲鳴をあげつつ、衣類をまとめて、おのが裸身を隠し、部屋を飛び出そうとするのを寅松がつかまえ、
「この売女(ばいた)め!!」
二つ三つ、なぐりつける。
おもんが泣き出す。
「野郎!! よくも、おれの女房を……」
叫ぶ寅松へ、藤兵衛が、
「ま、このなりではどうにもならぬ。着物を着せて下さい」
意外に落ちついた声でいった。
脇差を突きつける寅松と共に、炉端へ来て、藤兵衛はゆっくりと着物を身につけた。おもんは奥の間で息をころしている。
「やい」
「何だね？」
「この始末を……」
「どうつけるかねえ」
と、山城屋藤兵衛はまるで他人事のようにいい、煙管(きせる)に煙草をつめはじめるのだ。



寅松は気をのまれた。
「つつもたせかえ。なるほどなあ」
と、藤兵衛が、けむりを吐き、
「わしも、はじめてだ。ちょいと、びっくりしましたよ」
「何をいいやがる。てめえは、おれの女房を……」
「こんな悪事を何度やったね」
「こ、こ、こいつ……」
「ふざけるのじゃぁない。わしは、お前たちにゆすりとられるような男ではないよ。年をとって、それに、女好きではあるがね。こんなまねをされて、はいはいと温和しく金を出すような男ではない」
「何だと……」
もう血相が変っている寅松が脇差をふりかぶったその額へ、藤兵衛の手から煙管が飛んだ。
眼と眼の間へ、これがぴしりと当り、寅松がよろめいた。これも意外な反撃であったが、さらに寅松は、どこをどうされたものか、もんどり打って障子へ叩きつけられていたのである。
「ばかめ!!」
とても商家の主人とはおもえぬ一喝(いっかつ)をのこし、藤兵衛が土間へ下りた。
「畜生……」

寅松は無我夢中で脇差をひろい、藤兵衛のうしろから襲いかかろうとした。
「よして……」
おもんが飛び出し、寅松へすがりついた。ここで血を見ることが、寅松にとってどのように恐ろしいことかを彼女はじゅうぶんにわきまえていたようだ。
あきらかに、おもんは寅松の身をおもって阻止しようとした。半助のいうように、この女は寅松を好いていたものと見える。
「はなせ」
「待って……」
「は、はなしゃぁがれ」
もみ合っているうち、山城屋への憎悪でいっぱいになっていた寅松は、力まかせに、おもんを突き飛ばした。
「あっ……」
突き飛ばされたおもんは、仰向けに、非常な烈しさで土間へ転倒した。
それには眼もくれず、寅松が外へ走った。
土間のどこかへあたまを強くうちつけたおもんは、死んだようにうごかない。
山城屋藤兵衛は竹藪を出て、畑道を歩いている。
「や、野郎……」



夜の闇の中に、これを寅松が追った。
安楽寺の屋根が見える道で追いついた寅松へ、
「ばか!!」
振り向いた藤兵衛が怒鳴りつけた。
寅松が斬りつけた。
その利腕を藤兵衛がつかみ、
「山城屋藤兵衛、これでももとはさむらいだよ」
突き放した。
「わあっ……」
得体の知れぬ叫びをあげ、またも寅松が斬りつけた。
その寅松の脇差は叩き落され、またも突き飛ばされた寅松が起き上ってむしゃぶりつくのをひょいとかわした藤兵衛が、声もなく脇差をふるった。
寅松が立ちすくんだようになった。
そのまま、うごかない。
山城屋藤兵衛は、さっさと横道へ切れこみ、その場から姿を消した。
立ちすくんでいる寅松が、戸板でも倒したように畑の中へころがった。
彼の首は、つけ根からのどもとへかけて半分ほど見事に切り割られ、もう息が絶えていた。

それから半刻（一時間）ほど後。

米屋の平次郎が、この道を通った。

まだ、だれにも発見されぬ寅松の死骸が横たわっているすぐ傍の道を、平次郎が行きすぎた。

平次郎は何か背負っている。米俵ではない。それは女の躰であった。おもんであった。あたまを血だらけにし、気をうしなっているおもんなのである。

## 六

山城屋藤兵衛は、その後も変りなく麹町にいて、商売をつづけた。

幕府高官の屋敷や、大名屋敷にも出入りし、もとは越前・福井三十万石の浪人ということもあり、藤兵衛の顔はひろい。ゆすりかたりの悪党ひとりを斬殺したところで、藤兵衛はびくともしてはいない。

半助も、やがて江戸から姿を消した。

豆腐屋の又蔵も本所の店をたたみ、どこかへ行ってしまった。

あの翌朝。

寅松の死体が発見されたが、竹藪の中の家に一人で住んでいる妙な男のようだ、という近辺の人たちのことばをきき、役人もいろいろとしらべたようだが、なんとしても手がかりのつかみようがなく、年が明けると、しらべを打ち切ってしまったという。



それから、三年の歳月がながれた。

三ノ輪の米屋佐吉方で、婚礼があった。

「白痴平が嫁をもらうんだって」

「それが、こいつ似合いの夫婦になるだろうよ」

「へへえ……だが、よくも白痴平へ嫁のきてがあったねえ」

「それがさ、相手もやっぱり白痴だもの」

「え……じゃぁ、あのおみつかい」

「そうだ」

「なるほど。こいつはいい」

近辺のうわさである。

白痴のおみつとよばれるその女こそ、あのおもんであった。

あの夜。

平次郎は宇治屋へ米をとどけたが、

「ま、平さん。まんじゅうでも食べてお行き」

と、裏手へまわされ、茶をよばれた。「白痴平」などとよばれながら、平次郎はだれにも好かれた。

頭脳の機能は子供なみのはたらきしかできないのだが、牛のようによくはたらき、いつも人の

善い笑顔を絶やさぬこの若者を、ばかにしながらも人々は気の毒におもっていたのである。

茶をよばれて後、平次郎は提灯にあかりを入れ、帰途についた。

彼が、おもんを見かけたのは、このときであった。

暗い畑道を、ふらりふらり、いまにも倒れそうになりながらやって来る若い女のあたまから顔にかけて、血と泥がこびりついている。

平次郎を見て、女がうめき声を発し、のろのろと身を返し、逃れるようなかたちをしめしたが、そのまま、くずれ倒れた。

女……おもんは気をうしなっていた。

米屋佐吉が、麻布・広尾の正蓮寺へ来て、和尚に、

「どうもその、平次郎のときと同じようなもので」

といった。

「血だらけの女をかつぎこんで、やつが帰って来たのにはびっくりしました。すぐに医者をよんで手当をして、まあ半月というものは熱が上って、いのちが助かるかどうかというさわぎでしたが、ようやくに癒りましてね。いやその躰のほうは癒ったんだが、あたまがいけねえ。まるでもう、以前の平次郎と同じようなもので……いえもう、そりゃぁ、以前の自分のことなどはいっさい忘れてしまっているんですよ和尚さん。これもまた平次郎と同じことで」

「ほほう……」



「ま、どうしようかとおもいましてね。お上へとどけたところで、どうにもなるものじゃぁなし……」

「ふむふむ」

「すると、女房がこう申しますので……うちには、むすめ二人がいて、一人は嫁にやったし、あとの一人へ養子をもらおうと考えていたけれども、こっちも嫁に出そう。そして、平次郎をよく仕こんでみて、このうちの後をつがせようじゃないか……と、こう申します」

「えらいな、おかみさんは」

「むすめも、そうしろといってくれますのでね」

「えらいな、むすめさんも」

「どうせ道すじの小さなつき米やだ。ま、私がうごけなくなるまで、何とか二人のめんどうを見てやろうと、こうきめました」

「で、その女の名は？」

「ですから和尚さん……」

「あ……名も忘れていたか」

こうして、三年を経たのである。

この三年間に、平次郎は力仕事はもちろん、米屋夫婦の努力で少しは算盤もいじるようになった。

硬直した頭脳のひだへ、少しずつ少しずつ、血が通ってくるようであった。

おもんのおみつ（これも米屋夫婦がつけた名である）も、にぶい動作ながら、一日中はたらきぬいている。

平次郎とおもんが、台所の隅で、無言のままにこにこと笑顔を向け合いつつ、

「焼芋を子供のように仲よく食べているところなぞ、ちょいと和尚さんに見ていただきたいようなもので」

と、二人の婚礼のことを正蓮寺へ報告に来た米屋佐吉がいった。

「それはぜひ見たいな」

「ですが和尚さん。二人を……二人を夫婦にさせて見て、もしも……」

「もしも？」

「何しろ、あの二人のことだ。もしもその、夫婦のことがうまくゆかない、とでもいうことになってはと、そればかりが心配なので」

「心配よりも、先ず夫婦にして見ることさ」

「なるほど」

「人間の躰というものは、思いがけないほどに、よく出来ているものじゃよ。なあに心配するがものはないとおもうが……」

「さようで。裏に一つ、二階を張り出して、二人の寝間をこしらえてやりました」



「さようか。ふむふむ……わしも婚礼の夜には出かけて行こう」

「そりゃあきっと、平次郎が大よろこびで」

平次郎とおみつの、ささやかな質素な婚礼は享和二年の正月十五日におこなわれた。

翌年の夏には、この夫婦に子が生まれた。五体どこといって欠けたところのない、元気のよい泣声をあげる男の子であったという。

# 男の毒

## 一

その夜も……。

例によって、すさまじいばかりの、執拗な男の情欲にまきこまれ、おきよも気が狂いそうな灼熱の中で汗みどろの肢体を痙攣させつづけているときだったが、

男が、おきよの背中から傍へ身を投げかけるように倒れて、異常なうめきを発したかとおもうと、

「むふ、むふ……」

急に咳きこみ、がっと血を吐いた。

行燈へかぶせたふろしきから洩れるあかりに、敷ぶとんへ吐き散らされた男の黒い血潮を見たとき、

(ああ……もう、この男と、くっついていちゃぁいけない)

おきよは、はっきりとそうおもった。

男……弥市は四十に近い年だけれども、その細い体軀は何本もの針金をたばねたように固く引



きしまってい、

「おきよ。今度は、こっちの股をこうしてみねえ」

とか、

「それ……そこで、こっちの手のゆびに、こうちからを入れて、爪先をしめてみるんだ。どうだ、え……お前だってほれ、わるいこころもちはしなかろう」

とか、

「いけねえ、いけねえ。そこで息を吐いちゃあいけねえ。もっとこう……そうだ。そのまま、おれの脇腹へぴたりと……そうだ、そうだ」

とか、おきよのしなやかな肉体をおもうままにほんろうしつつ、魔法のように、女を性欲の深淵へひきずりこんでしまう弥市であった。

弥市と共に暮すようになってから四月ほどになるおきよなのだが、二十歳の女の精気と凝脂のみなぎりわたっていた彼女の浅ぐろい肌も、此の頃は光沢をうしない、げっそりとやつれてしまっている。

(いけない。こんなことじゃぁいけない……)

毎夜のように責めさいなんでくる弥市が労咳(肺病)もちであることはわかっていたし、

(ああ……早くこの人と別れてしまわなくちゃぁ……)

おもいつつも、そこへふみきれなかったおきよなのだ。

息切れもひどくなってきているし、日中は、もう何をする気力もなくなり、ぐったりと寝そべったままでいる。

夜になると弥市が帰って来て、

「こっちへ来ねえ」

やせこけた青い顔をぬたりと笑わせ、おきよへいどみかかるのである。

（もう、たくさんだ……もう、いや……）

はじめはさからっても、弥市の千変万化する交合の手口にかかると、ひとたまりもなくなってしまう。

それに、下手には逃げられなかった。

弥市は〔黒股〕と異名をとり、江戸の暗い世界では相当に顔の売れた男であった。

両国一帯の盛り場を牛耳っている香具師の元締めで、羽沢の嘉兵衛という親分の右腕だとか左腕だとかよばれている黒股の弥市なのだ。

「おれは、な……」

と、いつか弥市がおきよへいった。

「気に入ったよ、お前のからだが、な。いくら教えても、こいつばかりはままにならねえ女が多い。そこへ行くとおきよ。お前、面はまずいが、この肉体は大したものだ。肌もよ、あぶらがのっていてこたえられねえが……何しろすじがいい。いいかえ、おきよ。女のからだというもな



あ、骨と肉とだけから出来あがっているのじゃねえのだぜ。吐く息、吸う息のかげんひとつで……見ねえ、ほら……こうしてお前、股や足や腰までが、いうにいえねえはたらきをするものなんだ。ほれ、ほれほれ……すぐにお前は、そういうふうに、からだで受けこたえをしてくれるものなあ……おきよ。こうなったら逃げようとしても逃がさねえぜ。いいか、よくおぼえておきねえよ」

ぴたり、釘を刺されている。

弥市の固く引きしまっているくせに、妙に乾いて、冷たい手足が自分のからだをしめつけてくると、男の異様な体臭が濃くにおった。

（まるで、死人のようなにおい……）

だとおもい、はじめはいやでいやでたまらないのだが、そんなことを忘れきってしまうほどに、弥市のしぐさは巧妙をきわめ、烈しい男のちからが、ついにはおきよを圧倒しつくしてしまう。

（けど、このままじゃ、あたしがもたない。こっちが死んでしまう……）

なのだ。

そして今夜。

はじめて、おきよは弥市の喀血する態を見たのである。

「畜生め……」

そのどす黒い血のかたまりへ、弥市が、まだ咳こみつつ、悪態をついた。

幽鬼のような弥市の横顔を見やって、おきよは戦慄した。
と……。
おきよをかえりみた弥市が、重く沈んだ声で、
「どっちが先に、あの世へゆくか、だ」
と、つぶやいたものである。
（どっちが……じゃ、あたしが先か、このひとが先か、ということなのか……？）
ぞっと総毛立ったおきよの腰へ、またも弥市の両腕が巻きついてきた。
それからのおきよは、さすがにおぼれこめなかったといってよい。
敷きぶとんへ吐いたままの弥市の血が生ぐさくただよっている。
「勝手にしやがれ」
反応を見せなくなったおきよのからだを突きはなし、弥市がいった。
「明日はおぼえていろよ。骨まで粉々にしてやるぜ。いままでにお前がおぼえのねえほどに可愛がってやるからな」
弥市が台所へ立ち、いつもの散薬をのんでいる間に、おきよはふとんを敷き直した。
もう何日もふりこめている雨の音が、この本所・四ツ目裏町の長屋をじっとりとつつみこんでいる。
今年の梅雨は長かった。



やがて……。
黒股の弥市の寝息をききながら、おきよも床に横たわっている。ねむろうとしてもねむれなかった。（もういやだ。ほんとにいやだ……でも、逃げられない。逃げたって見つけられてしまうもの）
香具師の元締といっても、いまの江戸の暗黒街は、ほとんど彼らが牛耳っているようなものだ。黒股の弥市の親分・羽沢の嘉兵衛のような元締が、江戸中の盛り場の見世物から物売り、屋台店などいっさいのたばねをしており、むろん、公許以外の売春組織にも手をのばしている。
配下の者もそれぞれに何十何百といるが、黒股の弥市ほどの男になると、金で請け負った人殺しの仲介までやってのける。
身よりもないおきよが逃げたところで、よほどに遠国へ飛ばぬかぎり、弥市の眼をくらますことはできぬ。
「あ……う、う……」
弥市が、うめき出した。ねむりながらうめいている。うなされている。これは毎夜のことだ。はだけた胸肌の、骨が浮いたあたりへべっとりとあぶら汗をかいて歯ぎしりをする。
（逃げなくちゃ……どうしても、このひととはなれなくちゃぁ、あたしが死んじまう。いやだ、まだ死にたかあないもの）
弥市の歯ぎしりが昂まるにつれ、おきよの胸の底から、突然衝きあげてくるものがあった。

それが、あっという間に、目がくらむような昂奮に変った。
まだ、畳のどこかで、弥市の吐いた血がにおっている。
その生ぐさいにおいが鼻へきたとき、おきよは、かっとなった。
（こいつが……この男が、あたしを……あたしのからだを、こんなにしちまったんだ!!）
おきよが、半身を起した。
弥市は、うつ伏せになって、ねむりながら歯ぎしりを鳴らしている。
（こいつが……この男が……）
おきよは、寝巻きをしめていた腰帯をはずし、無我夢中で、これを弥市の喉からくびへ通し、二重に巻きつけていた。
いままでは、弥市の一言一句を耳にするたびに恐怖と不安に身をすくませていたおきよであったが、こうなるとおそろしさも何もない。
男とちがって女という生きものは、衝動と行動に、女の血をゆだねてしまったとき、思考も理性も消えてしまう。
巻きつけた腰帯を両手につかみ、おきよは弥市の背の上から両足をひろげ、渾身のちからをこめて腰帯を引きしぼった。
「ぐ……うわ……」
弥市が両腕を突張り、くびをもちあげた。



（畜生、畜生……）
と、おきよは胸に叫びつつ、死物ぐるいに腰帯でしめつけた。
弥市の口から、おびただしい血が噴出した。
それが、黒股の弥市の最後であった。
意外に、呆気もない最後であった。
弥市の胴巻きに、小判が六枚入っていた。
それをうばってふところへねじこみ、下着と着物をふろしき包みにしたおきよが、行燈のあかりを消して外へ出たのは、間もなくのことである。
裏長屋は寝しずまっていた。

## 二

その夜が明けきらぬうちに……。
ぬれねずみのようなおきよを、浅草・新堀川のほとりに見出すことができる。
新堀川は、二百五十年ほど前に出来た「堀川」で、下谷・竜泉寺の田圃から東本願寺の西がわをながれ、浅草の御米蔵の近くで鳥越川に合し、大川（隅田川）へながれ入る。
だからおきよは、この新堀川にそって、鳥越の方から北へすすみ、本願寺の塀にそって、いま、小さな橋のたもとへ来たところだ。

雨はやまない。

それでも、うす紙をはぐように夜の闇が消えつつあった。

どこかで拾ったものらしく、やぶれかけた菰をあたまからかぶり、素足にわら草履をはいたおきよの姿は、まるで女乞食にも見えた。

おきよが橋をわたり、小幅二間半の新堀川をこえた。

対岸は河岸道に沿った町家で、当時は、浅草のこのあたりにはわら屋根の民家が多かったようだ。

そのうちのひとつ……。

〔にごりや〕と、このあたりでよばれている小さな居酒屋の戸を、おきよが叩いた。

「もし……もし、おじさん……おじさん、起きて……」

すぐに家の中で、しわがれた声がして、

「だれだえ?」

戸が細く開いて、

「おや……お前か」

小人のような細くて小さい、しわだらけの老爺がおきよの手をつかんで中へ引き入れてから、尚も戸口へくびをのばし、凝と、あたりへ目をくばった。

「お、おじさん……」



「うむ……」

戸をしめきって、

「おきよちゃん、いまごろ、どうしたのだ?」

「え……」

「逃げて来たな」

「あい……」

「そ、そうか、それぁ……」

老爺が息をのんだ。

これが、この〔にごりや〕の亭主・伊助であった。

「おじさん。あたし……とうとう……」

「逃げて来たかえ。いや、もう、何もかも、おれが悪い。おれがその、黒股の弥市なんどをお前に引き合せるのじゃあなかった。つい、十両という大金に目がくらんじまってのう……ま、そのおかげで、下総の実家へあずけた婆さんの病気も……ま、その、できるだけは手をつくしてやれたし……」

「おばさん、あの……?」

「先月、あの世へ行ったよ」

「ま……」

「さて……こいつは、困った。ど、どうするかなぁ……」

伊助は、気を落ちつけるためであろう。土間の奥へ入って冷酒を茶わんにくみ、一息にあおった。

五坪ほどのうすぐらい土間に大きな一枚板の飯台が置かれ、そのまわりに腰かけがならんでいるだけの、なんの愛想もかざりもない居酒屋なのである。夕暮れから店を開けると、近くの裏長屋に住む小女がひとり、手つだいに来るだけで、あとは伊助老人が一人で切りまわしているのだ。

「おきよちゃん。とてもこいつは……あの弥市の目をくらますわけにゃぁいくめえ」

「おじさん、弥市は、もういないんです」

「え……？」

「こ、こ、殺して、しまいました……」

「げえっ……」

「おじさん……」

おきよが伊助へ、おそろしいちからを腕にこめてすがりついてきた。さすがに、いまとなって殺人を犯したことへの恐怖がわきあがったらしい。

伊助は、奥に一間きりしかない小さな部屋へおきよを引き入れ、

「お前、落ちついて……いいかえ、落ちついて、ゆっくり、はなして見ねえ。はじめっからだ。どういうふうにして殺った、のか、だ。逆上していたのだろうが、おぼえているだけのことを、洗いざらい、はなして見ねえ」

おきよは、はなした。

伊助は、しわのよった瞼の底から針のように細い眼を白く凝らし、身じろぎもせず聞き入っている。

雨の音が強くなってきていた。

夜も明けたようである。

おきよが、伊助老人の世話で客をとるようになってから、足かけ二年になる。

おきよの父親は、下谷の坂本裏町に住む畳職であったが、おきよが十三の夏に病死をした。

このため、おきよの母親は、つてを得て、神田鍋町の紙問屋〔伊勢屋吉兵衛〕方の飯たき女として、おきよともども住みこむことになったのだが……。

四年後に、この母親も病死してしまった。

なにしろ奉公先の伊勢屋で病みついてしまい、物置きの中二階へ追いやられ、

「あの病気はうつるから、そばへ行ってはいけませんよ」

などと、伊勢屋の主人夫婦が奉公人へいいつけたほどであるから、およそ、おきよと母親がどんな冷遇をうけたか知れようというものだ。母親も黒股の弥市と同じ労咳を病んでいたのである。

病みついて三月後に、母親は死んだ。

母親が死ぬ前に、

「お父つぁんの古い友だちで、伊助さんという人が、浅草の、本願寺の近くで居酒屋をやっていなさる。親切な人だ。いまとなってはおきよ、伊助さんをたよるほかに道はない。このお店に、お前ひとりが残されては可哀想だもの、ね……」

と、いいのこした。

だから、おきよは伊助老人をたよったのである。

伊助は、

「あそこなら、おれの眼もとどく」

こういって、本願寺門前の甘酒や〔よしの屋〕へ、おきよを世話してくれた。

客へ甘酒や茶を出したり、客の使い走りをしたり、けっこういそがしかったし、同じ年ごろの女も三人ほどはたらいていい、伊勢屋であたりに気をつかいながら、おどおどと奉公しているのとは大ちがいであった。

ところで……。

このころの江戸の甘酒やなどというものは、すこぶるあやしげなもので、ここではたらく女たちは、単に茶や甘酒を運んでいるばかりではない。そもそも、いい男が甘酒やで甘酒をすすっているのからして面妖なものなので……実は、なじみになると、店の亭主へ〔連れ出し料〕をはらうと、好みの女を外へ連れ出すことができるのである。



また一つには……。

商売女にはない素人くさい若い女を客に世話しようというので、出合茶屋や船宿などからも口がかかる。

で……。

〔よしの屋〕の女たちをときにふれて店へとりもつのも、伊助老人の内職であったのだ。

「だが、おきよちゃんだけは別だからのう」

と、伊助は苦笑しながらいった。

〔よしの屋〕からは目と鼻の先の〔にごりや〕の亭主である伊助のところへ、三日に一度は、おきよが甘酒をもって立ち寄った。伊助、甘酒が大好物なのである。

このとき、伊助が「おきよちゃんだけは別だ」といったのは、むかしなじみの友だち（伊助も若いころ畳職であった）のむすめを客に世話するつもりはない、と、こうおもったからなのだが、おきよは、

（あたしのような、まずいむすめでは、にごりやのおじさんもお客に世話ができないと、おもっているにちがいない）

と、ひとり合点をしてしまった。

肌の浅ぐろいのは江戸のむすめの特徴であるけれども、鼻の先のちょいと上を向いた、くちびるのぽってりと厚い、おきよの顔だちは、現代から百五十年も前のその当時の評価として、とて

もとても、

「美い女」

とは、いえなかったのである。

（にごりやのおじさんにまで、見かぎられるほどなんだもの。あたしなんて、どうにもなりゃぁしない）

しかしおきよも若い。その劣等感が、むしろ捨てばちな、

（あたしだって……）

の反撥となる。

おきよは、店へ出ていても、連れ出し料をはらってさそう客を懸命にさがし出そうとした。

なかなか、客はつかぬ。

客がねらうのは、いつも他の三人の女にかぎられている。

おきよは、いっそうやけぎみとなって、男の肌も知らぬくせに、おもいきった色眼を男の客へ送るようになった。

「仕方がねえ。今日はお前でいいよ」

あるとき、三人とも女が出はらってしまった夕暮れどきに入って来た並木町の山城屋という鰻屋の料理人で幸太郎という若い男が、おきよを連れ出した。

「おきよを連れ出した客がいるのだよ」



と、甘酒やの亭主が、伊助へ語った。伊助は舌うちをもらした。

それから三日後に……。

おきよが「にごりや」へ行くと、伊助がいった。

「おきよちゃん。客をとったのだってね」

「ええ……」

おきよは、伊助をにらむように見て、

「あたしだって……」

と、いった。

「そうかえ……お前が、その気もちになったのなら、おじさんも、そのつもりになろうじゃねえか」

「だって……あたしのことを……」

「おじさんなら、いくらでも、お前を高く売って見せよう。いままではおじさん、お前の、亡くなったお父つぁんへ、遠慮していたのさ」

「だって……」

「お前なら、高く売れる。そのつもりになって稼ぎねえ。なあに、金さえにぎっていりゃあ、お前だって甘酒やの一つや二つ、手前のものにすることができるよ」

「ほんとう？」

「うそじゃあねえ、女は顔じゃねえ、躰だ。お前の躰はめったにあるものじゃねえ、と、おじさんはにらんでいる」

「まあ、いやな……」

「その気になるんなら、よしの屋をやめておしまい。この、おじさんの店にいて、稼ぎねえ」

だからといって〔にごりや〕へ来る客の相手をするのではない。

伊助老人は、下谷・池の端仲町にある水茶屋〔玉や〕へ来る客へも女を世話している。

ここの客は上等なのばかりであって、おきよが〔玉や〕で、はじめてとった客は、なんでも紀州藩の江戸屋敷づめのさむらいだとかで、見るからに立派な四十男。

「つぎも、おきよをたのむ」

と、すっかり気に入り、月のうち二度は〔玉や〕からおきよへ声がかかるようになった。

そのほか、いずれも中年の商人や武士の客へ、伊助はおきよをさし向けた。

そのたびに、おきよへは二分の金が手わたされる。現代の価格として二万円ほどであろうか。

「けど、あせっちゃあならねえ」

と、伊助はいった。

「月のうち三度か四度でいい。それをすぎるとお前のその肌の艶が消えてしまうからのう」

「あい……」

おきよは、伊助に素直であった。



けれども、客に対しては大胆である。

肌がいい、躰がいい、と伊助からいつもいわれることが、おきよの自信を植えつけ、客の前へ出ると惜しげなく裸身をさらした。それがまた、客の評判をよぶ。おきよの評判を耳にはさみ、

「ぜひ一つ、その女を抱いて見てえ」

〔玉や〕へあらわれたのが、あの黒股の弥市であった。

〔玉や〕の女主人・お仙から、

「たのむよ、伊助さん」

といわれ、伊助はしぶった。

「でもねえ、弥市のうしろには両国の、羽沢の親分というものがついている。何も金をはらわないというのじゃあなし、ことわる理由がないもの、たのむよ。ことわったら伊助さん、お前もあたしも、どんなしっぺ返しをされるか、知れたものじゃあないからね」

そういわれれば、その通りである。

伊助はわざと、おきよには弥市の本体を明かさず〔玉や〕へ送りこんだ。

黒股の弥市は、たてつづけに〔玉や〕へ来て、おきよを抱いた。伊助は厭な顔をしたが、おきよは熱中した。男の躰が、このように自分の肉体へ作用するものとは、おもっても見なかったことである。好奇心と陶酔に、おきよは、われを忘れかけていた。

「爺つぁん。おきよは、もらったぜ」

にごりやへ来て、弥市が十両を伊助へわたし、おきよを本所四ッ目の自分の家へ連れて行ってしまったとき、伊助はためいきをついた。

（おきよも、とんでもねえ男に引っかかってしまった……）

しかし、金十両はありがたかった。長い間、実家へあずけてあった女房の死水がとれ、女房の実家への義理も果たせた。

とき折り、女を客に世話して、伊助が得るものは、ごくわずかなものであったのだ。

## 二

「にごりや」の伊助が、おきよをかくしたのは、巣鴨追分の裏通りにある「畳屋卯三郎」方へであった。

卯三郎は、がっしりとした躰つきの五十男で、むかしの伊助が畳職人であったころ、ずいぶんとめんどうを見てやったものらしい。

だが、伊助は、あくまでも腰を低めて、

「もう十何年もごぶさたをしていながら、急に、こうしてたのみごとに来るなんて、まことにその、申しわけのねえことなのだが……」

あいさつをすると、畳や卯三郎は満面を笑みくずして、しっかりと伊助の手をつかみ、

「いやもう、ほんとうに、よく来てくんなすったね。私にできることなら、なんでもいって下



せえ」

おきよの父親も同業だったときくや、それが一層に卯三郎の親切ごころをかきたてたらしく、

「心配しなさるな。いつまでもかくれていなせえ」

きっぱりと、うけ合ってくれたものだ。

卯三郎は女房おろくと、二人の職人との四人暮しで、ふたりのむすめはいずれも他家へ嫁入らせているという。

伊助は、すぐに浅草の家へ引き返して行った。

それから十日ほどの間に、伊助は、本所四ッ目裏の黒股の弥市が死んだ長屋のあたりへも出かけて、それとなく様子をさぐってみたりしたようだ。

すでに、弥市の死体は片づけられてしまっている。

死体が異臭をはなち、それと気づいた長屋のものが戸をこじ開けて、弥市の死体を発見したらしい。

だがむろん、お上へもとどいたはずなのだが、死体の始末がつくと、あとはもう奉行所からも何の音沙汰がないし、御用聞きもまわって来ぬ、という。

弥市が、この長屋で暮すようになってから半年ほどだし、長屋のものたちも、

（ただものじゃぁない）

と、見ていたことは事実だが、だからといって、両国の元締・羽沢の嘉兵衛とかかわりあいの

ある男だと知っていたわけではない。

おきよの身もとを知っているものもいなかった。

弥市は、家主へ、

「大工の平造」

だといい、家賃もきちんとはらうかわりには、近所とのつきあいもせず、おきよも同様で、ろくに家の中で庖丁の音もさせなかったほどだ。

弥市がおきよを連れ出し、外でものを食べさせ、夜は弥市がぜいたくな折詰などを持ち帰って来たりする日常だったのである。

その後。人相の悪い男どもが二度ほど長屋のまわりをうろうろしていたそうだが、あとはそれっきりとなった。

おとよ、こうした様子を見とどけてから、伊助老人は、やや安心をして「にごりや」の店を開けたのである。

そして、半年がすぎた。

何事もない。

あとでわかったことだが、黒股の弥市ほどの暗い過去をもつ男になると、羽沢一味にしても、弥市の死をおもてむきにすることを好まぬ事情がいろいろとあったらしい。

奉行所にとっては、



「そうした男は、この世からいなくなったとて、どういうこともない」

という立場である。

善良で、つつましくはたらいている庶民が殺されたのではない。この世の中にいては困るやつが死んだのであるから、ちょうどよいのだ。

それでも、

「いっしょにいた女が殺ったのかも知れねえ」

というので、羽沢一味のやつどもが、一時は、おきよの行方をさがしまわったりしたようだけれども、そもそも弥市の仲間どもは一度もおきよを見ていない。それとなく長屋の人たちへもさぐりをかけたようだが、むだに終ったらしい。

「おきよちゃん。もう、大丈夫だよ」

と、伊助が、久しぶりに巣鴨の畳や卯三郎方へあらわれたのは、翌年の正月十日であった。

おきよは、健康をとりもどしていた。

卯三郎の老いた女房をたすけて、きりきりとはたらいていい、いまは、その女の暮しがうれしくてたまらないらしい。

「肥ったでしょう、おじさん」

「おどろいた……」

「なにが？」

「女は魔物よ」
「あら……」
「以前の垢なんど、これっぽっちもついていねえよ、いまのお前には……」
卯三郎へは「悪いやつに、つきまとわれて困っている」とたのみ、おきよのことを簡単にはなしてあったし、当時の江戸の人びとは、それだけで物事をたのまれたり、たのんだりするのが通例のことであったといってよい。むかしの人たちは、それだけ相互の信頼感がつよかったのであろう。
「ときにね、伊助さん」
と、卯三郎が、
「おきよちゃんを、ほしいという人がいるのだが……」
「ほしい？」
「女房にさ」
茶をはこんで来たおきよが、顔をあからめて出て行くのを、伊助は見た。
「おきよ、承知なのかえ？」
「らしいぜ、伊助さん」
「それなら、わしには異存はねえけれど……」
「駒込の上富士前で小さな店だが、小間物やをしている直吉という男なんですがね」



「へえ……」
「この男、一昨年、女房に死なれてからずっと独身でいてね。躰も丈夫だし、それにもう大へんな堅人なのだ。両親もいねえし、子もいねえし……ま、その、さびしくもあるし、不便でもあるし……」
「うむ、うむ……」
「暮れにね、畳替えをたのんで来たものだから、若い職人を一人やった。そのときにだね、伊助さん。うちへ来て、小間物やがさあ、茶を出したおきよちゃんを見るなり、眼の色が変ったものさ」
「なある……」
「それからはもう、まだ一月にもならねえというに、ちょいと近所まで来たから寄りました、なんてね、ちょいちょい顔を見せる……いや、おきよちゃんの顔を見に来る。三日前だよ伊助さん。妙に青い顔をしてやって来ると、いきなり、おきよさんを私の嫁に……こう切り出したもんだ。後ぞえだが悪かねえとおもいますがね」
「そうよ、な……」
「ま、おきよちゃんも、いろいろといわくがあるようだし……」
「いや、大したことじゃあねえのだけれど、ま、処女というわけにはいかねえし、ね……」
「だろう？」

「うむ。で……おきよは？」
「はなして見ると、しばらく考えていたっけが、私でよろしければ、と、こう、伊助さん」
「そうかえ」
それはそうだろう、と、伊助はおもった。
まだ男も知らず、甘酒やではたらいていたころ、おきよが、
「ねえ、おじさん。あたし、お嫁に行けるんだったら、どんな貧乏な人でもいい。けど、お金はなくても、躰の丈夫な人でなきゃ厭。女房より先に病気して死んでしまうような、あたしのお父つぁんのような男の人は厭」
といったことばを、伊助はおもいおこしていた。

## 四

間もなく、おきよは小間物や直吉の女房になった。駒込から巣鴨のあたりへかけて、大名の下屋敷もあるし、旗本屋敷や組屋敷も多い。
直吉は、上富士前の小さな店をおきよにまかせ、小間物の荷を負って屋敷まわりへも精を出しはじめたらしい。
それから、約半年がすぎた。
黒股の弥市が殺されてから一年とすこしの歳月が経過している。



梅雨も明け、からりと晴れわたった夏空を仰いで、
「これから暑くなる」
いいながらも、江戸の町の人びとは雨つづきのうす暗い、じめじめした毎日から解きはなたれ、活気をとりもどしはじめた。
或夜のことだ。
店をしまって、土間へたらいをもち出し、伊助が行水の仕度にかかっていると、
「おじさん。おじさん、あたし……開けて下さいな」
戸を叩く音と共に、おきよの声がする。
「どうしたんだえ、いま時分……」
こたえながら、伊助の胸にある予感が疾った。
戸を開けた。
土間へ入って来て、女房姿も板についたおきよがうす笑いをうかべつつ、伊助を見つめ、
「だめになっちゃった」
「だめ？」
「うちのひとに見つかっちゃった」
「見つかった？」
「浮気を、ね……」

伊助は、
（やはり、そうだったのか）
と、おもった。
「追い出されたのかえ？」
「怒られたの」
「ふうん。じゃぁ、まだ見こみはある。よし、明日、おれが、直吉さんにあやまってやろう」
「いや」
「いや？」
「だめなの、おじさん……」
急におきよの顔がくしゃくしゃになった。
「だめなのよう……」
おきよが、伊助へしがみついてきた。
抱きとめて、おきよのすすり泣きがやんでから、伊助がつぶやくようにいった。
「お前……お前、直吉さんではまんぞくできねえのだな？」
老人の香ばしい汗のにおいがする伊助の、骨の浮いたうすい胸に顔を伏せたまま、おきよが、かすかにうなずいた。
この夜から、おきよは直吉のもとへ帰らなかった。



「いったい、どうしたというのだ、伊助さん」
と、畳やの卯三郎が〔にごりや〕へたずねて来たとき、おきよは、すでに伊助のもとにもいなかった。
「どうしたって……何が、どうしたのだえ？」
と、伊助はしらばくれた。
「おきよちゃんが男をこしらえたというのだ。ここへ来ませんか？」
「来ねえ」
「直吉さんは、かんべんしてくれるというのだがねえ」
「そうか……そいつは、どうも、困ったなぁ」
行方知れずというのでは、どうにもならない。
畳や卯三郎が帰ったあとで、店を開ける前にいつものむ冷酒を、しずかにすすりこみつつ、
（あの、黒股の弥市が、おきよをあんな女にしちまったのだ……）
伊助は哀しげな眼の色になり、
「男の毒のまわった女には、とてもかなわねえ」
と、つぶやいた。
伊助は、どうしても、
「帰りたくない」

と、いい張るおきよに負け、おきよの身柄を、池の端仲町の水茶屋〔玉や〕へあずけたのである。

〔玉や〕の女主人お仙の口から、一年前の黒股弥市一件が闇から闇へほうむられたことを、このとき、伊助もおきよも、はっきりと知ったのであった。

「もう、だいじょうぶだよ」

と、お仙はいった。

「今度は、あたしが引きうけよう。若いうちに、しっかりとお稼ぎな、ね。あたしだって、おきよ。若いころはお前と同じような身の上だったんだもの。いいとも、今度は、あんな弥市のようなやつを、お前の客にはしない。ま、いいからあたしに、まかせておくれな」

また、年が暮れた。

〔玉や〕にいるおきよは、月に一度ほど、かならず浅草へ来て伊助老人へみやげを持ち〔にごりや〕へあらわれた。

「おれも早く死にてえが……なかなか辛抱がいるよ」

「おじさん。もう少しよ。もっとお金がたまったら、おじさんにも楽をさせてあげる」

「そんなことは考えねえでもいい。自分のことだけを考えるこった。あ、そうそう……こないだ、巣鴨の卯三郎が観音さまへお詣りに来たついでにここへ寄ってね」

「まあ……」

「小間物やの直吉さんが、今度また、女房をもらうそうだよ」



するとおきよは、何の関心もしめさず、

「あら、そう……」

つまらなそうにいった。

## 五

そして、また一年がすぎた。

おきよは、この年の夏ごろ、ひとの〔かこわれもの〕となった。

「ぜひとも、私ひとりのものにしたいのだ、おきよを……」

と、熱望してやまなかったのは、神田明神前通りの呉服問屋の主人・嶋屋藤兵衛である。

同業者の紹介で〔玉や〕へ来て、はじめての女がおきよであったが、たった一夜でのぼせあがってしまった。

嶋屋藤兵衛は四十をこえたばかりで、このところ商売も順調だし、金まわりはよしで、男の遊びざかりといったところだ。

金に糸目はつけぬというので、

「わるいことはいわない。いまが潮どきだよ」

しきりに、〔玉や〕のお仙がすすめる。

物やわらかな物腰のくせに、することなすことがてきぱきとしており、とても四十すぎには見

えぬ男前の嶋屋藤兵衛を、
（いいひと……）
だと、おきよもおもっている。
〔にごりや〕へ行き、伊助に相談するや、むしろにべもない感じで、
「そいつぁ、お前がきめることさ」
と、伊助はいった。
「つめたいのねえ、おじさんたら……」
「なぜ、ね」
「もっと、親身になってきいてくれても……」
「きいているともよ」
結局、おきよは嶋屋の世話になることをきめた。
嶋屋藤兵衛の女房おみねは、二人の子を生んでのちは病床につくことが多く、藤兵衛の浮気は半ば〔公認〕のかたちだという。
おきよの妾宅は、根岸の御行の松に近い西蔵院という寺の前にあった。以前もどこかの妾宅だったものを嶋屋が買いうけ、すっかり自分の好みに手を入れ、ここへ、おきよをうつしたのである。
女中も置いてくれるという嶋屋藤兵衛へ、



「あたしのお父つぁんもいっしょに……いけませんかしら？」
と、おきよがいった。
「お前に父親がいたのかえ。いいとも。男がひとり、いてくれたほうがいいよ」
おきよは、すぐに伊助のところへ行き、
「お父つぁんになって下さいな、おじさん」
「なって、どうする？」
「根岸で、いっしょに暮して下さいよ」
「ことわるね」
「あら……」
「ここで、ろくでもねえ客の、酒の相手をしているほうがいいよ」
「せっかく、あたし、孝行しようとおもっているのに……」
「いらねえしんしゃくだ」
「じゃ……じゃぁ、おじさん。どうしてもいやなら、お金を……」
「いらねえ、いらねえ。いまのおれにゃあ、金も女もいらねえ。こうして、このうすぎたねえ店で、うすぎたねえ客へ酒をのませていりゃあ、死ぬまで何とか……生きていられらぁな」
「おじさんたら……急に、頑固になっちまって……」
「死ぬ日が、近寄って来たんだろうよ」

おきよは、二十二歳になっている。

おきよは熟れきっていた。

金にあかせて着飾り、化粧をし、男を迎える「かこわれもの」の暮しがはじまると、背から腰へかけての充実しきった肉体が、衣裳の下でなまなましくくねった。

そのころの根岸は、上野の山かげにしずもる田園地帯で、田畑のひろがりの中に、寺院や、かわら屋根の別荘や、こころよい木立のつらなりが、市中のにぎわいがすぐ近くにあることをまったく忘れさせてしまうほどであった。

おきよが、おこうという老女中をつれて、根岸の田圃道を行くのを見ると、寺々の若い僧たちの眼の色が変った。

年が暮れようとしていた。

「どうもね、この襖紙の色が私には気にいらないね。正月もくるし、すっかり替えさせようじゃないか。障子も貼り替えなくてはいけないし……」

と、鳩屋藤兵衛がいったので、彼の好みをきき、おきよは自分で、近くの金杉上町に店を出している経師屋の宗七方へ出かけて行った。

おこうが近所で「大へんに腕のよい人だから……」と、きいてきてくれたからである。

経師屋宗七を見たとき、おきよは瞠目した。

(や、弥市……そっくり……)



であったからだ。

やせて、骨張った躰つきも青ぐろい顔の色も、そっくりであった。

襖紙をえらぶとき、おきよの手のゆびが微かにふるえた。

「三、四日のうちにうかがいましょう」

と、宗七は、生まじめな口調でいった。

このあたりは、江戸といっても場末のことだし、店がまえも小さく、小僧を一人つかって、宗七がいそがしく仕事をしているらしい。

根岸の家へもどると、藤兵衛が来ていた。

おこうが買物に出て行く。

炬燵をいれた床の中で、藤兵衛の腕に抱かれたおきよが狂ったような仕ぐさをした。

「お前、おい……おい、おきよ。今日は、お前どうしたのだえ。そ、そんなにお前、私を責めたてちゃあ、こっちがもう、保つものじゃあない」

藤兵衛、満悦の態で、

「やっぱりお前という女は……いやもう、ほんとうに、よかった。お前というものをわがものにして、ほんとうにもう私はうれしいよ」

年甲斐もなく鼻を鳴らし、甘ったるい声を出したものだ。夕暮れになって、

「そろそろ押しつまってきたからね。当分、来られないが、おとなしくしておいでよ、いいか

え」

「あい」

「ほかの男なんぞに目をくれちゃあいけませんよ、いいかえ」

「そんな、旦那……」

「でも、ちょいと心配になってきたからさ」

「ま、いやですねえ、旦那ったら……」

六

約束した三日目に……。

「ごめん下さいまし」

経師屋の宗七が一人でやって来た。

「いそがしいのに、すみませんねえ」

「いえもう、小僧がけっこう仕事をしますので、今日は別のところへ……」

「そうでしたか」

おきよは、昼をすぎてからおこうを使いに出した。

〔にごりや〕の伊助老人へ、自分でぬいあげた正月の着物をとどけさせたのである。

風もない、あたたかい日和であった。



玄関わきの四畳半で、宗七は仕事をしている。

二日がかりの仕事であった。

おきよは、中廊下をへだてた奥の六畳で炬燵にぬくもっていた。

炬燵の上へ顔を伏せ、身じろぎもせぬおきよのえりくびのあたりへ、血がのぼっている。

宗七が紙をさばく音と、刷毛で糊をたたく音をきいているうちに、おきよが、たまりかねたように、

「ちょいと……ちょいと……」

「へ……？」

「あの、ちょいと……」

「私で？」

「ええ」

宗七が、障子を開け、顔を出した。

「こっちへ、お入んなさいな。お茶でもいれましょう。さ、いいじゃありませんか、何も遠慮をすることはないんですよ。さ、こっちへ……さ、お入んなさいな」

「……へい……」

おずおずと、宗七が入って来た。

茶が入った。菓子が出た。

世間ばなしになった。

たたみこむようなおきよの問いに、宗七はぽつぽつと身の上ばなしをはじめた。

宗七は、芝の増上寺表門にある〔中川勝右衛門〕方で仕事を仕込まれ、七年前の二十八歳のとき芝の田町へ店をもった。

「……両親にも死別れていまして……ま、店がもてたことをよろこんでくれるのは、たった一人の兄だけのはず。ところが、この兄というのが、どうも……」

いいさして、宗七は面を伏せた。

「兄さんが、どうして……？」

「いえ、それが……若いころから、まともな道を歩いてきた男ではないので」

「まあ……」

「黒股の弥市とか何とかよばれて、悪い仲間の間では顔もきいていたらしいので……ところがもう、私が店を持つと、ちからずくで金や物をまきあげてゆきます。まったく、どうも困りまして……それで女房も、すっかり気を病み、からだを病みで……ま、夜逃げ同様に、こっちへ逃げて来たのです。こっちへ来て、女房が亡くなりました。それはもう、いつ、兄に見つけられるか、と、そのことばかりを……」

おきよは身じろぎもしない。

眼をみはり、宗七のはなしにきき入っている。



親身にきいてくれるとおもったらしく、宗七のはなしぶりは急に、熱を帯びてきた。

「ところが……」

と、宗七はごくりとつばをのんで、

「その兄が死んでくれましたので」

「いつ？」

「一昨年の夏のはじめでしたそうで……なんでも、いっしょに住んでいた女にしめ殺されたとか……」

「まあ……」

「それも私は、去年の秋ごろ、耳にしたのですが……いえ、ほんとうに、そのときはもう、ほっといたしました。と同時に、そのときまで女房を生かしておきたかったとおもいました」

「まあ、ねえ……」

宗七が、はっとした。

いつの間にか……。

おきよの顔が近々とせまっている。

炬燵の中へ、遠慮がちにさしこまれていた宗七の手が、しめっぽくてあたたかくて、やわらかい女の手でにぎりしめられた。

「こ、これは……」

宗七は、もがいた。

ねっとりと女ざかりのあぶらのういたおきよののどもとから、すこしはだけたえりにかけて、胸乳のふくらみがまるで露になった感じで、

「な、なにをなさいます」

「宗七さん……」

おきよの双眸が半ばとざされ、わずかにあけたくちびるから、白い歯がちらちら見えた。

あえぐように、おきよがいった。

「抱いて、おくんなさいよ」

「あ、……、そんな……もう……」

「かまやぁしません。か、かまわないんですったら……」

おきよが、経師屋宗七と手に手をとって逃げたのは翌年の二月はじめである。

このときは、さすがにおきよも、伊助老人のもとへあらわれなかった。

そして……。

その年も暮れ、また新しい年がやって来た。

春がすぎた。

梅雨に入った。



そうした或る夜……。

〔にごりや〕の伊助が店をしまい、飯台でひとり、寝酒をのんでいると、

「おじさん……おじさん、あたし……」

戸を叩く音と、おきよの声が外でした。

音もないほどに、雨がふりけむっていて、何か肌さむい夜ふけである。

伊助が戸を開けた。

やつれたおきよが、闇の幕からにじみ出るように、中へ入って来た。

「のむかえ？」

二年ぶりで会うおきよに、伊助がきいた。

「もらおうかしら」

伊助が出した茶わん酒を、おきよは、ゆっくりとのんだ。

「どこへ行ってたえ？」

「ある男と夫婦になったんだけど……」

「どこにいた？」

「板橋……」

「で……？」

「逃げて来たの」

「え……？」
「だめになっちゃった……」
「今度の御亭主に浮気が見つかった、とでもいうのかえ？」
おきよは眼で笑い、その笑いが消えたときに泣きむせんだ。
伊助が、その肩へしわだらけの手をおいて、かるくたたいてやりながら、
「黒股の弥市というやつは、とんだ形身を、お前のからだの中へ残していったのだなぁ」
と、つぶやいた。



# 女毒（おんなどく）

## 一

そのうわさを、仲間からきかされたとき、
（冗談も、ほどほどにしてもれえてえや）
野川の伊三次は、むろん、本気にはしなかった。
ところが……
うわさが、うわさではなくなった。
やはり、本当のはなしだったのである。
その年も押しつまった或日（あるひ）に、伊三次は聖天の元締から、
「ちょいと、顔を見せてもらいたい」
との使いをうけた。
聖天の元締とよばれる吉五郎は、浅草一帯の香具師（やし）をたばねている親分である。
浅草は、金竜山・浅草寺をはじめ、寺社も多く、したがって盛り場も多い。
江戸の時代は、先ず有名な神社仏閣に人があつまり、参拝参詣（さんけい）がひとつの行楽ともなった。

だから、こうした場所には種々雑多な屋台店や物売りがならび、見世物興行などもおこなわれる。

これらの商いをするのが香具師で、彼らが稼ぐ盛り場には、かならずこれをたばねる元締が存在すること、いうをまたない。

後には……両国の盛り場をたばねている元締・羽沢の嘉兵衛に縄張りの大半をうばいとられ、すっかりおとろえてしまう聖天の吉五郎であったが、伊三次がその手下だったころの〔聖天の元締〕といえば、それこそ、

「飛ぶ鳥を落す勢い」

であったのだ。

当年五十七歳になる聖天の吉五郎が、伊三次を呼びつけてのはなしは、

「お前、そろそろ、身をかためてはどうだえ？」

というのであった。

伊三次は、どきりとしたが、

（まさか……？）

と、まだ本気にはならぬ。

すると、吉五郎が、

「お長を嫁にしちゃあくれめえか」



ずばり、切り出したものである。

「と、とんでもございません」

伊三次の色白の顔へ、狼狽の血がのぼった。

「いやかえ？」

「いやにもなんにも……そ、そんな……」

「そんな……なんだ？」

「そんな、もったいねえことを……」

その通りである。

お長は、吉五郎元締の末のむすめで今年二十二歳。上のむすめと息子二人と、女房までに死なれてしまっている吉五郎にとっては、

「眼に入れても痛くねえ」

というわけで、

「おれが死んだら、跡目は、だれかしっかりとした他人にゆずればいいわさ。だからお長、お前は好きにしねえ。どこへでも嫁に行っていいよ」

いいながらも、なかなかに手ばなさない。

お長も、この老いた父親のそばをはなれたがらず、そのかわり、役者買いをこっそりとしたり、男出入りも相当なものらしいが、それを見たものはだれもいないし、吉五郎もまた、

「おれのそばにいてくれるのなら、まあ、仕方がねえやな」
苦笑をうかべて見のがしているらしい。
すらりとした胴長の、腰まわりがしっこりとした肉置きのお長は、ふるいつきたいほどの色気をたたえていたし、一家の切りもりもてきぱきとしたもので、
「ひとつ、お長さんの気に入られて、元締の養子にでもなれたら……」
と、野心を燃やす身内の者も、
「だがなあ、ああもきっぱりとされたのじゃあ、とてもお長さんには近づけねえ」
なのであった。
お長は、父親の身内の男たちにはながし目ひとつくれたことがない。
へまをすれば、
「この大馬鹿野郎」
ときめつけるし、妙に笑いかけたりすれば、
「うす気味わるい面をするんじゃあない。そんな面は柳原の夜鷹にでも見せるがいい」
びしびしとやりこめられてしまう。
その、お長が、だ。
「伊三次を亭主にしたい」
と、父親に申し入れたものである。



聖天の吉五郎は、びっくりした。
伊三次は相模・野川の生まれで、十三の年に小百姓の父親が死に、それからは母親の実家がある小田原の在へ引き取られたが、間もなく母親も病死し、それからはお定まりにぐれ出して、二十のときには、小田原城下の香具師の元締・和市の配下となった。
その和市が死んだのは去年の秋である。
「どうも、元締に死なれて見ると、小田原に居る張り合いがなくなりました」
こういって伊三次が、小田原の和市と親交のあった聖天の吉五郎をたよって江戸へあらわれたのは、今年の晩春のことであった。
伊三次は二十六になっていた。
小柄だが、引きしまった体軀の伊三次は、ぬけるように肌の色が白く、眉もきりりと濃い。切長の両眼はいつもやさしげなひかりをやどしていて、盛り場の香具師たちも、納金をあつめに来る伊三次には、
「ちっとも威張らねえ、いいお人だ」
評判、すこぶるよろしい。
知らぬ顔をしていながら、お長は、いつの間にか、伊三次に目をつけていたものらしい。
「伊三次さんなら、お父つぁんの跡をつげますよ」
と、いった。

「ばかをいうねえ、あんな若僧に、お前……」
「いいえ、あたしがちゃんとついていますから大丈夫」
「じゃあ、お長。お前、本気で伊三次を……」
「養子が出来りゃあ、お父つぁんも安心だろう？」
「そりゃ、まあ、そうだが……」
「だから、あたしのいう通りにしておくれなね」
「けれど、お前……そう急に……」
「いやならば、あたしが出て行く」
「そ、そいつは困る。おい。そりゃあ、お前……いまさらむごいよ、おい」
「それなら、伊三次をあたしの亭主に……」
「む、む……」
江戸の〔暗黒街〕でも五本の指に入るといわれた聖天の吉五郎も、こうなると、むすめには弱い。
「どうも、仕方のねえことだ」
と、あきらめ、ついに伊三次を呼び出したのであった。
「まさか、いやとはいわねえだろうな、伊三次」
「へ……」



伊三次も、お長の濃艶さにはこころをひかれずにいられなかったし、
「お長と夫婦になって、行末は、おれの跡をついでくんねえ」
とまで、元締にいわれてみれば、
（よし。一つ、やって見るか……）
と、この道へくびを突きこんだからには〔野心〕も燃えてきた。
「ほんとうに、私でよろしゅうございますので？」
「おれが、お前を亭主にするのじゃあねえよ」
「へい」
「お長が、お前でなけりゃあいけねえというのだ」
「へ……」
「どうだい、おい。じれってえな、何とか、はっきりと返事をしねえ」
「では……おことばに甘えまして」
「承知か」
「よろしく、お願いを申します」
こんな若僧にむすめをとられるのかとおもうと、いまいましくてたまらなくなる吉五郎だが、お長に家出をされるよりは、まだましだとおもっている。
じろり、白い眼で伊三次を見やり、煙管の灰を瘤高く灰吹へ落し、

「これからはお前、しっかりしてくんねえよ」
と、吉五郎がいった。

二

浅草・聖天町の吉五郎宅を辞した野川の伊三次が、観音さま（浅草寺）の境内をぬけていると、
「伊三次よ」
おなじ聖天の身内で、船形の由蔵という男が、うしろから声をかけてきた。
「や……船形の兄きでしたか」
「お前、きまったってな」
「え……？」
「めでてえことだ」
由蔵には何もかもわかっているらしい。
年齢は伊三次よりも四つ上の三十歳だが、まだ女房をもらわず、聖天町の元締の家で暮している由蔵は、
「なんといったって、いまにお長さんを女房にして、聖天の跡目をつぐものは、由蔵にちげえねえ」



と、江戸の元締たちもうわさをしていたそうな。
若いころから何度も、縄張りあらそいの血の雨の中をくぐって来ているとかで、ひげあとの濃い精悍な面がまえから躰のこなしに至るまで一分の隙もなく、元締の吉五郎も何事につけ、
「由はいねえか、由は……」
で、夜も日も明けない。
そのことは、伊三次もじゅうぶんにわきまえている。
だから先刻、
（この縁談は、由蔵さんのところへ行くのが本当じゃあねえのだろうか……？）
と、おもいもしたのだ。
だが、それを口に出せぬほど、吉五郎のことばには、のっぴきならぬ真実がこもっていたのである。
いうまでもなく、聖天の吉五郎にして見れば、
（どうせやるなら、お長を由蔵にやりたい）
に、ちがいないし、また、そうした胸の内をもらしてもいたらしい。
しかし、これまでのお長は、一家の独身者には目もくれなかった。
「と、突然のことで……へい、おどろきましてござんす」
伊三次は、素直に由蔵へいった。

「承知をしたのだろうね？」
「……え……へい」
「そいつは、よかった」
由蔵の声音には、いささかも悪意がこもっていない。
「兄き……」
「おれも、一所懸命で、お前をもりたててゆこうよ」
「ほ、ほんとうなので？」
「お前……いや、お長さんと夫婦になりゃあ、いずれは聖天の元締になるお前さんだ。これからはもう、ぐっと胸を反らしていねえ」
「とんでもないことで……」
「何が、よ」
「まだ、あっしは、お長さんにも会っていません」
「今日は、朝から愛宕へお詣りに行ったらしい。お前が色よい返事を元締へしてくれるのをたのみに行ったのだろうよ」
「冗談を……」
顔を赤らめてうつ向きながらも、伊三次は由蔵に対して、
（えらいお人だ）



つくづく、そうおもった。
由蔵は、新参者の伊三次へもはじめからうちとけてくれたし、いろいろと親切にめんどうを見てくれ、聖天一家の隠居株だという篠崎の清兵衛宅へ寝泊りするようにもしてくれた。
清兵衛は七十に近い老人で、浅草・阿部川町に住んでいる。
「お前なら、きっとやれるさ」
と、由蔵が伊三次の肩をたたき、
「あと五年……みっちりとおれが仕込んでやる」
「ありがとうござんす」
「あれで、お長……さんの目も狂っちゃあいねえらしい」
うすく笑って由蔵が、
「帰ったらすぐに清兵衛とっつぁんへ、今日のことをつたえておきねえよ」
「承知しました」
「明日また、な」
さばさばといい、由蔵は聖天町の方角へ去った。
周囲の評判もさることながら、みずから、
「元締の片腕」
をもって任じていた船形の由蔵だけに、今度の伊三次のことについては、よい気持がせぬのが

当然なのだ。

だが、そのようなことを色にも見せなかった由蔵である。

いつもおだやかにしていて口数も少く、それでいて身内の若い者の信望がもっとも厚い由蔵を、

（さすが、だ……）

伊三次は、あらためて見直すおもいをした。

十八のとき、聖天の身内になって間もなく、浅草・並木町の料理屋〔伊豆半〕の二階で、酒に酔いしれ、刀をふりまわして大あばれをしている無頼浪人三人を相手に大喧嘩をし、その刀をうばいとって、三人のうちの二人を傷つけ、追いはらったという船形の由蔵が同じ人だとは、

「どうしてもおもえねえ」

「あれだけおとなしいのも、よっぽど肚がすわっていなさるからだろうよ」

などと、聖天の若い者はうわさをしあっている。

伊三次は、浅草寺の境内をぬけ、門前の通りの両がわにならぶ物売りの人びとのあいさつを、今日はことさらていねいに受けつつ、さすがに歩いて行く足もとがはずんでいた。

## 三

伊三次が、新堀端の竜宝寺門前にある〔松月庵〕という〔しる粉屋〕へ入ったのは、それから間もなくのことであった。



冬の弱い午後の陽ざしが、障子にうつり、風も絶えたおだやかな日和であった。

伊三次は、松月庵の奥庭に面した小座敷へ入り、しる粉を注文した。

そのころの〔しる粉屋〕なるものは、甘味一点張りではなく、ところによっては男の客へ酒も肴も出す。

というのも、江戸の〔しる粉屋〕は、男女のあいびきの場所でもあったからだ。

ひとりきりの伊三次ゆえ、入れこみの土間の腰かけで食べるものを食べたら、よさそうなものだが、口へ入れるものが二倍から三倍に近く高値となる小座敷へ入ったのは、入れこみにいる客の目を恥ずかしがっているのだ。

いざ〔しる粉〕となったら、二杯や三杯ではすまぬ野川の伊三次なのである。

いい若いものが、こんな図を他の客の前へ見せたくはない。

事実、伊三次が何杯もおかわりするのを見た若い女客に、くすくす笑われたおぼえは何度もある。

伊三次が、三杯目の〔しる粉〕に箸をつけたとき、となりの小座敷へ客が入って来た。

男女の二人づれらしい。

襖ひとつを境いにして、こちらでは伊三次がひっそりと〔しる粉〕を食べていたものだから、となりの男女は入って来るなり、伊三次の耳へもとどくような声ではなしはじめた。

伊三次は、はっと箸をとめた。

「いまさら、なにをいいなさるのさ」
と、笑いをふくんだ女の声が、まさに、お長のものであったからだ。
男の声が、ぼそぼそときこえる。
間のびのした、細い、やさしげな声であったが、いうことはよくわからない。
「はじめからの約束じゃありませんか」
と、お長が、
「あたしも年齢でねえ、ちっとはお父つぁんのことも考えるようになりましたのさ」
「けれど、お長……」
「ですからさあ、もうくどくどと……」
「では、どうあってもこの私を、お前、捨てるといいなさるのか」
と、男の声が急に芝居じみた調子になって、
「ええ、捨てるなら捨ててお見。私が、お前の相手の前へ、この顔を見せてやろうから……」
「かまいませんとも」
「いったい、どこのどいつだ、その男は……」
「お父つぁんの身内で、色白のきりっとしたいい男で、名を伊三次といいますよ」
それっきり、男はだまった。
お長が亭主にえらんだ男は、聖天の身内だときいて、怖気づいたものらしい。



（役者だな……）
と、伊三次はおもった。
平気である。
お長が男の肌を知っていることなど、伊三次は問題にしていない。
お長は、はこばれて来た酒を手酌でのんでいるらしい。
「けれどねえ、お長……」
「あい」
「私というものがいたことを知ったなら、その、お前が亭主にしようという相手は、きっと夫婦になることを承知しませんよ」
お長が、これをきいて笑い出した。
自信たっぷりの笑いである。
「なにをいっていなさるのさ」
お長は、盃の音をたてながら、
「あの伊三次が、このあたしをことわる理由があるものか……」
と、いいはなった。
元締のむすめというほこりと、自分の美貌と、熟れきった肉体の魅力に、野川の伊三次が飛びついて来るにきまっている、とでもいいたげな声であった。

伊三次は、眉をしかめ、そっと箸をおいた。
「あたしが見こんだ男ですよう」
お長の声が甘ったるく、
「あたしが仕こめば、きっと、お父つぁんの跡目へすわることができる男さ」
「ふん……」
「お前さんよりも、ずっといい男」
「およし」
痩高くさえぎった男が、
「お長。おぼえておいで」
いい捨てて、座敷を出て行く気配がした。
お長はくっくっと笑いつづけ、小女をよんで勘定をすませ、後から松月庵を出て行った。
伊三次は、身じろぎもしなかった。
「あの伊三次が、このあたしを、ことわる理由があるものか……」
といったお長の声が、伊三次の耳にのこっている。ねばりついている。
伊三次は、鼻白むおもいであった。
なまぐさい、女の高慢さがたまらなく気に入らなかった。
(馬鹿にしていやあがる……)



であった。
お長のこんもりとした胸乳が帯の上へ張っているさまも、女ざかりの血色があざやかに浮いている化粧の気もない肌の美しさも……このときまでは好きであった伝法な言動も、いっぺんに、
(ああ、いやだ。こんな女だったのか……)
伊三次はくびをすくめた。
野川の伊三次が「行方知れず」となったのは、この夜のうちにであった。
伊三次は、松月庵で半紙と、筆と硯を借りた。
小田原の元締のところにいたとき、伊三次は、いくらか読み書きを習っている。
多勢の香具師をたばねる元締の下で、きわ立ったはたらきをするためには、読み書きと算盤を或程度はおぼえておかなくてはならないからであった。
伊三次は、お長にあてて、つぎのように書いた。

こんどのはなしは、こっちからえんりょいたします。
いさ次はえさにかまわず飛びつくような、さかりのついたおすねこじゃ、ございません。
いさ次

「この手紙を、聖天町の吉五郎元締の家にいなさるお長さんへ、とどけてくれ」

こころづけをはずみ、伊三次は松月庵の小女に使いをたのみ、
「いいか。忘れねえで、こういってくんねえ。この手紙を、松月庵に来た客からたのまれた、とな」
「あい」
小女が出て行ってから、伊三次は大急ぎで阿部川町の清兵衛宅へもどり、自分の部屋にしまってあった五両ほどの金をふところへ入れると、
「ちょいとまた、出てめえります」
老いた女房と二人で、炬燵にしがみついていた清兵衛へあいさつをし、何気もなく外へ出て行き、そのままもう戻っては来なかったのである。

## 四

このような飛び出しかたをしたところに、野川の伊三次の、彼自身がおもいもかけぬ一徹な性格がひそんでいるのを見ることができよう。
いったんは承知をしておきながら、書き置き同様の手紙一本で、元締にもそむき、お長をも足蹴にしたと他人はおもうだろうし、いうまでもなく聖天の吉五郎は激怒するであろう。
このまま江戸にいては、
(いのちも危ない)



ことは、当然であった。
だから、伊三次は、すぐに江戸をはなれている。
そして……。
伊三次の手紙を「しる粉屋」の小女から受けとったお長は、
(よくも、このあたしをふみつけにしやぁがった……)
手紙を引き裂き、するどい怒りの痛みと、
(あんなやつに見返されてたまるものか!!)
との屈辱に身をふるわせたものだ。
すぐに、お長は、
「田町の弥七をよんできておくれ」
と、家にいた若い者にいいつけた。
浅草・田町に住む弥七という三十男が、そっと聖天の家へあらわれたのは夜に入ってからである。
「ちょいと出ておりましたんで……へい、おくれまして申しわけもございません」
顔の色の冴えない、ひょろりと痩せた田町の弥七は、すぐにお長の部屋へ通され、
「何か、御用で?」
「弥七さん。ここに五十両ある」

「へ……」

小判の包みを凝と見おろした弥七が、

「お長さんから殺しをたのまれるとは、おもいもかけねえことで……」

うっそりとつぶやいた。

何かたよりなげに見える弥七であるが、これまでに金ずくで殺した人は両手のゆびにあまるほどであった。

聖天の吉五郎も、請負った人殺しを四、五度、弥七へたのんでいる。

「首尾よく仕とげたら、もう五十両出そうじゃあないか」

「へい」

「引きうけておくんなさるかえ？」

「よろしゅござんす」

「たのみましたよ。お前さんなら仕損じることはないものね」

「で、だれを？」

「野川の伊三次を、さ」

「え……だって、伊三次さんは聖天のお身内じゃあござんせんか」

「いいんですよ、そんなことは」

「元締も、このことは御承知なので？」



「お父つぁんには、あたしからいっておく。とにかくね、弥七さん。ぐずぐずしちゃあいられない。伊三次はもう江戸をはなれているにちがいない」

「へへえ……」

「すぐに追いかけておくんなさいよ」

「わかりました。けれど元締へは……」

「大丈夫。お前の渡世がちゃんと立つようにしておきますよ」

「へい。じゃあ、これで」

「たのみましたよ。伊三次は相模の野川というところの生まれだそうだが、長らく小田原の和市元締のところにいた男だ」

「なるほど……ですが、そっちは立ちまわりますまい」

「そうかしら……」

「伊三次という男は、あっしの目から見ても、そんな、こっちの手のまわるようなどじをふむ男じゃあござんせん。あいつ、しっかりしていまさ」

お長は、だまった。

伊三次の、そのしっかりしたところを見こんだ彼女だけに、くやしさが層倍のものとなってきている。

「じゃあ、行ってめえります」

田町の弥七は、五十両をふところにするや、
「やつを仕とめるまでは、帰ってめえりませんよ」
すっと出て行った。
お長は、火鉢の中の火箸をつかみ、これを障子へたたきつけた。
(畜生、伊三次のやつ……おぼえていやがれ！)
二、三日するうちに、伊三次の失踪がはっきりとした。
お長は、弥七へたのんだ殺しのことをだれにもいわない。
「おかしな野郎だ」
と、聖天の吉五郎はふしぎそうに、
「あんなに、お長とのことをよろこんでいやがったのに……」
船形の由蔵へいった。
由蔵は、だまっていた。
(どうも、わからねえ)
なのである。
あの日。浅草寺の境内で出合ったときの伊三次は、たしかに、
(元締のいうように、お長さんとのことをよろこんでいたようだった)
からである。



身内の者たちは、
「どんな事情があるか知れませんが、とにかく、だまって躰をかくすなぞとは、伊三次もこの道の義理を知らねえ野郎だ。さがし出して、聖天一家の掟を野郎の躰へきざみつけてやらざあなりますめえ」
と息まいたが、意外に元締の吉五郎は、
「いいってことよ」
にんまりとして、あとは胸の中で、
(いなくなったが、さいわいというものだ。わけなんざ知りたくもねえ。あんな若僧にお長をくれてやるのはもってえねえにも程があらあ。どうせやるなら……そうよ、どうせお長の聟にするなら、船形の由蔵をおいてほかにはねえ。そう……そうだ。こいつは急がざあなるめえ。何とか一つ、お長と由蔵を夫婦にしてしまいてえものだ)
いっぽう……。
江戸を発った野川の伊三次は甲州・下ノ諏訪にいる豊太郎をたよることにし、甲州街道をまっすぐに急いだ。
豊太郎は、小田原の和市元締のところで一緒だったのである。
伊三次が江戸へ出て来る少し前に、病気で躰をこわした豊太郎は故郷の下ノ諏訪へ帰って行った。

その後、江戸へ出た伊三次のところへ来た手紙によると、豊太郎は、
「足を洗う」
決心をし、同じ村のむすめと夫婦になり、
「長い間、両親にも苦労をかけたので……」
老いた両親にかわり、百姓になりきるつもりだ、とか……。
伊三次は、豊太郎をたより、
（一年ほどは、身をかくしていよう）
と、おもったのだ。
ほとぼりがさめれば、
（小田原へ行き、死んだ元締の跡目をついでいる仁吉元締にたのみ、も一度、はたらかせてもらおう）
と、考えている。
なにも、
（それほどの不義理をしたわけでもねえ。あの高慢ちきな女に思い知らせてやっただけのことだもの、一年もたちゃあ、江戸と小田原。なんのことはあるめえ）
それほどに心配をしていなかった。
自負を傷つけられたお長のような女のうらみが、どれほどに恐ろしいものかを、そこはまだ若い伊三次だけに、いささかあまく見ていたようである。

## 五

それから半年ほどがすぎた。
夏が、目の前に来ている。
梅雨どきのじめじめした毎日を送り迎えながら、下ノ諏訪の豊太郎の家にごろごろしている伊三次は、
（ああ、もうたまらねえ）
じりじりしてきていた。
「退屈だろうね、伊三さん」
と、豊太郎がいう。
彼はまだ二十三歳。家を飛び出してから四年ほどにしかならないし、もとの百姓暮しへもどるのにも、それほどの苦痛をともなわなかったようだし、若い女房が春先に男の子を生んだばかり。もう夢中になって女房と子供を可愛がり、野良仕事に精を出している。
「すまねえが、豊さん。そろそろ、おみこしを上げようとおもうのさ」
「大丈夫かい、江戸のほうは？」
「いや、小田原へ行って見ようとおもうが……その前に、ほれ、前に和市元締のところで羽ぶ

りのよかった常滑の喜助さんが、たしかいま、府中（現・静岡市）にいるはずだ」
「そうそう」
「そこへ行って見ようとおもう」
「そいつはいいな。喜助さんはお前のことをよくめんどうを見ていなすったからね」
「ま、そういうことだ。ひょいと、そいつをおもい出してね」
「そうか。もう行くかい」
「またいつか、会いに来るよ、お前に……」
おもいたつと、矢も楯もなかった。
豊太郎一家が親切にしてくれるので、別に気をつかうこともなかったのだが、少年のころから町暮しに馴れている伊三次だけに、下ノ諏訪の田舎ぐらしにあきあきしてしまっていた。
「梅雨が明けてからにしたらどうだ」
という豊太郎のことばも上の空になってしまい、
「少ねえが、とっておいてくれ」
金二両を礼に置き、伊三次は雨の晴れ間をえらび、旅立って行ったのである。
江戸や相模をぬけて行くのは、
（まだ、あぶねえ）
とおもい、伊三次は安倍峠を越えて駿河の国へ出ることにした。



途中、身延山へ詣り、宿坊に一泊した翌朝、伊三次は安倍峠へかかった。
よいあんばいに、下ノ諏訪を出てから一度も雨にふられない。
この朝も、晴天でこそないが、峠を越えるまではじゅうぶんに保ちそうな空模様であった。
安倍峠を駿河へ下ったところに〔梅ヶ島〕の温泉の宿がある。
伊三次は、今夜そこへ泊るつもりであった。
昼すぎ、峠の頂上へ着いた。
といっても、安倍峠のまわりは密林と重畳たる山肌につつまれてい、見はらしはほとんどきかない。
雲の隙間から、うすい陽光がもれてきている。
伊三次は、峠の草の上へ腰をおろし、腰に下げていたにぎりめしを食べはじめた。
竹製の水筒から水をのむ。
また、にぎりめしをほおばる。
「おい……」
どこかで、低い声がした。
伊三次は、ふりむいた。
人影はない。
また、食べはじめた。

「しばらくだったねえ、伊三次さん」
「だれだ？」
「おれだよ。田町の弥七だ」
「なに……」
伊三次は、ぎょっとした。
伊三次も聖天の身内だったころ、弥七が腕のきいた殺し屋だということは、百も承知していたし、三、四度、聖天の家で会ったこともある。
伊三次はするどい眼つきになって、あたりを見まわしたが、どこにも弥七の姿は見えなかった。
「伊三次さん……」
と、今度は別の方角から弥七の声が、
「ずいぶん、さがしたぜ」
「ど、どこだ」
叫んで伊三次が血相を変え、道中差を引きぬいた。
「で、出て来い。出て来やがれ」
「半月ほど前にね、小田原の二代目・和市元締のところへ行ったら、以前のお前さんのことをよく知っていてねえ。お前さんは下ノ諏訪の豊太郎とかいう若い者と大へんに仲よしだったときいて……ひょっとすると、そこにいるのじゃあねえかとおもい、こうして、安倍峠ごえに甲州へ



出ようとおもったのさ。そうしたらおあつらえだ。伊三次さんがにぎりめしを食っていなさるところを、こうして見つけた、というわけさ」
「お、おれを……？」
「殺りに来たのさ、お長さんにたのまれてねえ」
「で、出て来い!!」
「いま行くよ」
右手の樹林の中から、菅笠をかぶった旅姿の弥七がにじみ出るようにあらわれた。
「来やがれ!!」
伊三次は、それを見るや脇差を逆手に持ち、猛然として弥七へ殺到した。
弥七が笠をはねのけ、腰の脇差を引きぬくのが一動作であった。
自信まんまんたる弥七が、
「いのちは、もらったぜ」
いったとたんである。
伊三次の足がぴたりと止った。
同時に、伊三次の右手をはなれた脇差が風を切って弥七の胸板へ飛んだ。
「あっ……」
弥七が叫んだ。

伊三次の脇差が、田町の胸へ突き刺さった。
「野郎!!」
弥七がすさまじい顔つきになり、胸板へ突き立った脇差をそのままに、伊三次へ飛びかかって来た。
「わあっ……」
伊三次の絶叫がおこった。
弥七が必死に打ちおろした脇差は伊三次の左肩口から左の腕を物のみごとに切って落していた。
弥七は、飛びぬけて振り向き、倒れかかる伊三次のあたまへもう一太刀を入れるつもりだったらしいが、
「むうん……」
がっくりとひざを折り、
「く、くく……」
ついに、たまりかねて、うつぶせに倒れた。
「う、うわ、わわ……」
と、伊三次も切断された左肩口から噴出する血の中で、のたうちまわっている。
のたうちまわりつつ、すぐに気をうしない、
「あ……う、うう……」



ぐったりと倒れ伏してしまった。

## 六

それから、五年の歳月がながれた。府中（現・静岡市）から安倍川をさかのぼり、山峡の道を駿河と甲州の国境近くまで分け入ったところに、梅ヶ島の温泉がある。
温泉といっても、けわしい山肌と崖にかこまれた渓流沿いの一軒家で、湯治客も近辺の百姓や木樵、猟師などが多い。
文政五年の夏の或日の夕暮れであったが……。
府中からの山道を、いま少しで梅ヶ島へ着こうという手前で、三十七、八の苦味走った旅の男が、これも屈強の旅の男二人と、たがいに脇差を引きぬき、斬り合いをはじめた。
一対二である。
一の背後からつけて来た二が、うしろから急に襲いかかったものであった。
一は、左の肩口と背中を斬られつつも、すばやく抜き合せて抵抗に転じた。
「野郎、くたばりやぁがれ!!」
「かんねんしちまえ!!」
二人の刺客は前後から押しつつみ、たくみに駈せちがい、
「それ、どうだ!!」

「逃げようったって、もうだめだぜ!!」
うす笑いをうかべるゆとりもあって、
「ああっ……」
二人に切りたてられた旅の男が足をすべらせて体勢がくずれたところへ、
「野郎!!」
飛びこんで来た刺客の刀が胸から腹へ……。
「うわあ……」
ぴゅっと血が疾った。
脇差を落し、よろめいてひざを突いた男の頭上へ、刺客の刀が打ちこまれようとしたときだ。
「だ、だあん……」
鉄砲の音が、妙に鈍くきこえた。
「ぎゃあっ……」
刀をふりかぶった刺客の顔面が、叩きつぶした西瓜のようになった。
顔へ、鉄砲の弾が命中したのである。
「あっ……」
と、もう一人の刺客が驚愕して、飛び退り、
「だ、だれだ?」



わめいた。
「ど、どこだ!!」
またも、銃声がおこった。
「わあっ……」
もう一人の刺客がもんどりをうって転倒し、そのまま、もううごかない。
斬られた男も、ぐったりと山道に横たわっていた。
夕闇が濃かった。
渓流の音があたりをみたしている。
どこからともなく……。
鉄砲を肩にした二人の猟師が、この場へあらわれた。
一人は六十に近い老人だが、別の一人は三十がらみの男で、左の肩口から腕が無かった。
この男、五年前に安倍峠で、田町の弥七と闘った折に、左腕を切り落された野川の伊三次であった。
いまの伊三次には、五年前のおもかげが全くない。
色白だった顔はたくましく陽に灼けてい、体軀も肩から背へかけて肉がもりあがり、がっしりとして、いかにも猟師そのものといってよい。
「伊三次よう」

と、老猟師が、
「汝のひざ撃ちもすっかり板についたのう。見ろよ、汝が撃ったはじめのやつ、顔へ当ってこのざまだ」
「父つぁんの弾は、こっちのやつの胸板をぶちぬいているぞ」
「おうよ」
こたえた老人が、倒れている旅の男を抱きおこし、
「この人か。汝の、むかし知っていたというのは？」
「うむ。この人はな、父つぁん。船形の由蔵さんといって、むかし、おらが大へんに世話になった人さ」
「そうかよ。や……まだ、息がある」
老人が、腰の竹筒の水を口にふくみ、血だらけの由蔵へ、口うつしにのませた。
ごくりと、由蔵の喉がうごき、
「む、う……うう……」
由蔵が、うめいた。
「由蔵さん、おれだ、野川の伊三次だ、由蔵さん!!」
「あ……むう……」
「わ、わかりますかね？」



「あ……」
「伊三次でござんすよ」
「む……あ、伊三……」
「へい、へい」
「生き……生きて、いたのか……」
「へい、へい」
「あ、うう……」
「いってえ、このありさまは、どうしなすったので？」
「なあに……」
由蔵が、苦痛をこらえ、うすく笑った。
「お、女の……女の毒にあたったのさ」
「女の……毒？」
「お長という女の、よ……」
「え……？」
「お前が逃げたあと、おれが後がまにすえられてな……」
「そうでしたかい……」
こたえて伊三次が、

「父つぁん……」
老人によびかけた。
どこかへはこびこんで、傷の手当をしたい、というつもりだったが老人はすぐにかぶりをふった。
（うごかしたらいけねえ。もうだめだ）
と、老人の眼はいっている。
うわごとのように、由蔵はつぶやきつづけた。
「……そしてなあ、伊三さん……おらあ二年前に、聖天の二代目をついだ。吉五郎元締が病気で、死んじまったので、な……」
「へ、へえ……」
「その前から、もう聖天の縄張りは、お前も知っている両国の、羽沢の嘉兵衛に荒らされはじめて、な……」
「羽沢の……」
「おれも、二代目をついでから、な、なんとかして喰いとめようとしたのだが——い、いけねえ。つぎからつぎへ、身内の者が、両国の元締へ寝返って……し、しめえには……」
いいさした由蔵の両眼が白く光って、
「しめえには、おれの女房までが……」



「お長さんのことで？」
「うむ」
「……」
「お長の女、とても、おれのちからじゃあ、縄張りが元へもどらねえと知ると、畜生……あの女、羽沢の嘉兵衛の妾に、なりゃあがって……だから、おらあ、お長を叩き殺したのさ。それでな、羽沢の嘉兵衛が、そこの二人に、おれを殺させようと、したのだろうよ……」
伊三次は、声をのんだ。
その後に、そのような恐ろしい出来事が聖天一家を見舞っていたとは、夢にもおもわなかったことだ。
由蔵の両眼が、しずかに閉ざされた。
「由蔵さん、由……」
「伊三次さん、よ……」
「な、なんです、兄き」
「おらあ、あのとき……五年前のあのとき……」
「もし……しっかりして下せえ」
「あのとき、おらあ……お長に見こまれて夫婦になるときまったお前が、うらやましくてならなかった……」

伊三次は、はっとした。

「おらあ、いつか、そっと、お前を殺して……か、かならず、お長をわがものにし、聖天の跡をつぐつもりだったのさ……」

「……」

「おらあ、根性のくさったやつ、よ。お前にはにこにこと笑いかけていても……お長と聖天の跡とりになろうとしている、お前が憎くて、憎くて、たまらなかった……」

「……」

「それにしても、わからねえよ……」

「……」

「伊三さん……お前、あのとき、どうして、お長を袖にしたんだ。え、え……？」

老人が、またかぶりをふった。

由蔵のくびが、がっくりと折れ、彼は息絶えた。

伊三次は茫然と、由蔵の死体を抱きかかえている。

夜になった。

雨がふり出して来た。

惨劇のおこなわれた山道には、二人の刺客と、由蔵の死体も見えず、血は雨に洗いながされて



いった。

その山道から程近い山腹の木立の中に、板屋根の小さな家がある。

奥の部屋には、先刻の老猟師がすやすやと寝入っていた。

土間に面した板敷きの炉端で、猟師になりきった伊三次が一つきりしかない右腕で、三歳ほどの女の子を抱いている。

そのそばに、これも陽に灼けた若い女が畑仕事につかう野良着のほころびをつくろっている。

女は、おだいといって、伊三次の女房である。

伊三次が抱いている子は、二人の間に生まれた子であった。

「だがよう……」

と、おだいが、ぬいものの手をとめずに、

「もう少し早く見つけたら、その江戸の人を助けられたのになあ……」

「そうさ、ちょいとばかり、おそかった」

「お前がむかし、世話になった人だってによう。ほんにくやしいよう」

「まったく、な……」

「それで、三人の……」

「三人とも、死骸は埋めてきたよ。だれにもわからねえところへ、な」

「そうかい。それなら、いいによ」

「ふ、ふふ……」
「なにを笑うだよ？」
「いや、なに……五年前のあのとき、お前の父つぁまに峠の上で助けられて、よくもまあ、こうして生きのびてこられたものと……ちょいとな、おかしくなったのさ」
「ほんになあ……あのときゃあ、もういけねえとおもったによう」
「お前のおかげだ」
「いやだよう」
「でもなあ、あのとき、片腕をすっぱりと切り落されたおかげで……、おれも生きのびられたのだものなあ……」
「だって、そりゃあ……」
「両腕とも残っていたら、もう、いまごろは、おれも冷めたくなっていたろうよ」
伊三次は、女の子を片手に抱いたまま、立ちあがり、
「そろそろ、寝ようぜ」
「あい……」
「女の、毒か……」
「なにか、いったかい？」
「いいや……なんにも、いわねえよ」



# 殺

## 一

「どうだね、市五郎どん。殺ってくれるかね？」
と、赤不動の嘉兵衛が訊いた。
嘉兵衛は、両国一帯の盛り場を自分の縄張りにしている香具師の元締めで、江戸の暗黒街でかなりの威勢をもつ男だ。
でっぷりとした体格の、顔が酒光りをしている五十男の嘉兵衛は、手下の者も連れずに只ひとり、両国から遠い道をやって来たのである。
ここは、白金（現・港区芝白金台町）の畑の中にある法身寺という小さな寺で、その寺の墓地わきの小屋を借りて住む近藤市五郎という浪人者を嘉兵衛はたずねて来たのだ。
「そうだなあ……」
おだやかな声でいいながら、市五郎はひげあとの青々としたあごを撫でまわしつつ、
「いつもと、ちがうのでなあ……」
あまり、今度の殺人には気がのらぬ様子であった。

「ま、無理にとはいえねえが……」

殺人依頼者の嘉兵衛は、そうつぶやきながら、二間つづきの小屋の中を見まわした。

物置小屋を改造したのだというが、なかなか小ぎれいな造作だし、近藤市五郎は真新しい上布の着ながしで、昼間から寝そべりながら冷酒をのんでいる。

もう四十に近い年齢なのだろうが、独身だし金まわりもよいし、五つ六つは若く見かけられる。法身寺でも、近辺の農家でも、

「温和しげなご浪人さまだ。なんでも西国の、もとは立派な御身分だったとかで、一生を暮すだけの金は国もとから送って来るのだそうな」

という評判であった。

それだけに、赤不動の嘉兵衛も年に二、三度、この寺へ近藤市五郎を訪問するときはきちんとした身なりで、いかにも、近くの目黒不動へ参詣に来たついでに寄った知り合いの商家の者というかたちでやってくる。

彼が、ここへあらわれるときは、かならず暗殺の依頼をもって来るので、いえば市五郎浪人は嘉兵衛の持駒の一つであるといってよい。

武家・町家を問わず、赤不動の嘉兵衛に暗殺を依頼して来る人びとには種々の事情があるのだろうが、その事情などはどうでもよい。嘉兵衛と依頼者の間に立つ仲介者の信頼度によって引き受けもすれば断りもする。それだけでじゅうぶんであった。



今度の依頼は、松村町（現・中央区銀座東一丁目の内）に高級な小間物・塗物・人形・玩具などを商なっている〔井筒屋〕の老主人・徳兵衛を、

「暗殺してもらいたい」

と、いうものである。

このはなしを赤不動の嘉兵衛へ持ちこんだのは芝・田町の俗に〔五光稲荷〕とよばれる岡場所（官許ではない遊里）で〔きねや〕という娼家を経営もしている松蔵であった。

松蔵は六十をこえた白髪の老人だが、若いころは、江戸にまで知られた大盗賊・桑飼の弥右衛門の右腕といわれたほどの男で、八年ほど前から営業上のつき合いで嘉兵衛と知り合い、

「いやどうも、松蔵爺っつぁんほどに肚がすわっていりゃあ、どんな打ちあけばなしも出来ようというものだ」

と、いまの嘉兵衛は非常に松蔵を買っているらしい。

暗殺の代価は、それぞれの状況によって異なるけれども、たのむときに半金をわたし、暗殺成功の後に残り半金をわたすのが定めである。ところが今度の場合、手つけが三十両で、井筒屋徳兵衛を殺した後に金百両をわたそうというのであった。

「あとの百両はいいが……前の三十両というのが気に入らんな。ちょいと安い」

と、近藤市五郎はためらった。

「だが市五郎どんよ。お前さんなら逃がしはすめえ」

「むろんのことだ」
「それならいいではねえか。どうせ後の百両は手に入るのだからね」
「それはつまり、井筒屋が死なぬと百両の金が手に入らぬということだな？」
「だろうね」
「金めあての殺しだな」
「まあ、そうかも知れねえがね」
「親分の手もとには、いくら入る？」
「そいつは訊かねえ約束だろう、市五郎どん」
「ふむ……」
墓地の木立で、蟬が鳴きしきっている。
だが、木蔭の小屋の中は涼しかった。
やや暫らく考えていた市五郎浪人が、赤不動の嘉兵衛にこういった。
「ほかならねえ親分のたのみだから、今度だけは引き受けようが……以後は前に半金、後に半金という定めをまもってもらいたいな」
「わかっているということさ」
「依頼人の名を、今度だけは聞いておきたい」
しかし、嘉兵衛は何とか近藤市五郎をいいふくめ〔きね や松蔵〕の名は出さず、前金の三十両をわたし「吉報を待っているぜ、市五郎どん」と、小屋から去って行った。



## 二

殺し屋の市五郎浪人が井筒屋徳兵衛暗殺を引き受けた日の夕暮れであったが……。
当の徳兵衛が、どこかへ用たしに出かけた帰りらしく、采女ヶ原の西がわの道を歩いている。
この原は、むかし松平采女正の屋敷があったところから采女ヶ原とよばれ、享保のころから〔馬場〕になっており、その西がわは見世物小屋や茶店、物売りの屋台などがならび、このあたりの盛り場のひとつになっていた。現在の歌舞伎座の向い側一帯がそれにあたる。
大きな風呂敷包みを背負った小僧ひとりを供に、井筒屋徳兵衛は夏羽織をつけた立派な服装で、鶴のように細く背丈の高い躰つきも白髪によく似合い、まことに上品な顔だちをしている。
と……。
采女ヶ原の北がわの土手沿いの道をやって来た、これも徳兵衛と同年輩の老爺が、向うから来る徳兵衛を見かけるや、
「おや……？」
通行人のうしろへかくれるようにして、まじまじと徳兵衛を見つめながら、
「あ……やっぱり……」
大きくうなずき、ひょいと徳兵衛の前へあらわれ、

「旦那。お久しぶりでございます」
と、声をかけた。
この老爺が〔きねや松蔵〕である。
とすれば、彼が徳兵衛暗殺を赤不動嘉兵衛へたのみこんだわけになるのだが……。
実は松蔵、この井筒屋徳兵衛が、むかしの盗賊仲間で〔黒塚の駒吉〕の変りきった姿だということをまったく知らないのである。
なにしろ、二人は十三年も会っていない。
たがいの身の上の変化を知らなかったのである。
「や……お前さんは……」
井筒屋徳兵衛のほうも瞠目したが、すぐに、
「これはお久しい」
と受け、すぐさま小僧の芳松へ、
「芳や。お前、ちょいと先に帰っていなさい」
と、命じた。
小僧が去るのを見送ってから、この老人のふたりは、たがいに、たがいの姿を見つめ合い、
「駒さんも老けなすったねえ」
「松蔵どんも、いい爺っぷりになんなすった」



「へ、へへ……」
「ふ、ふふ……」
「江戸にいなすったかえ？」
「七年ほど前からね。で、松蔵どんは？」
「わしあ、十年も前から……」
「それはちっとも知らなかった……」
「ひろいねえ、お江戸は」
「ちげえねえ」
ささやくように語り合いつつ、徳兵衛が先へ立ち、三原橋の方向へ歩み出している。
「たいそう立派になんなすったが、駒さんはいま……？」
「松蔵どん。いまのたがいの身の上についちゃあ、たがいに打ちあけぬが、むかし盗賊づとめをした者の定法だよ」
「ちげえねえ。忘れてしまったわえ」
「顔を合せても、だまって別れよう……これが十三年前に、お前と尾張の熱田で別れたときの約束だよ」
「忘れてはいねえが……つい、なつかしくなってしまって……」
「ま、いいわさ。久しぶりで、むかしの駒吉と松蔵にもどり、どこぞでいっぱい飲って、きれ

いに別れようじゃあないか」

「へ、さようで」

と、松蔵は相手の貫禄に気圧された感じになり、

「けっこうですともね、お供をいたしましょうよ」

後につづいた。

井筒屋徳兵衛は三原橋を北へわたり、新両替町三丁目の料理屋〔藤井〕へ、松蔵を案内した。もっとも、この料理屋へは初めての徳兵衛なのである。

二階の奥まった座敷へ入り、二人だけで酒をのみ出すと、おのずから徳兵衛と松蔵の口調も変ってくる。

で、しばらくの間は、嘗ての盗賊仲間・黒塚の駒吉と水鶏の松蔵としてはなしをすすめたいとおもう。

むかし、この二人は桑飼の弥右衛門という大泥棒の両腕として、桑飼一味の大仕事には無くてはならぬ存在であった。

桑飼一味は本拠を大坂へ置き、上方から中国すじ一帯を荒しまわり、最盛期には百に近い徒党を組んでいたといわれる。

十五年前まで、駒吉と松蔵は、桑飼の弥右衛門の忠実な〔家来〕であった。

ところが、その十五年前の秋の夜に、二人は親分の弥右衛門を殺害し、桑飼一味の〔隠し金〕



を八百五十余両もうばい取って逃走した。

長年にわたって一所懸命に、いのちを張って弥右衛門のためにつくしてきた駒吉と松蔵であったが、当時の弥右衛門は手下の中の新興勢力である高根の万助というのを重く用い出し、大仕事になればなるほど駒吉・松蔵を無視するようになってきたのである。

この二人の配下は腕も利くだけに、なかなか弥右衛門のおもい通りにはうごかない。

「お頭。そいつはいけません。そんな無理押しのお盗めは駄目でござんす！」

弥右衛門が練りに練った盗みの計画でも、そこに一点の無理があれば断じて実行することをこばむのが駒吉と松蔵であった。おまけに、盗みはするが人を殺したり、女を犯したりすることには絶対に反対をとなえる二人だけに、

「せちがらい当節に、お前たちのいうようなお盗めをしていたのじゃあ、こっちの喉が干上ってしまうぜ」

弥右衛門は年を老ってきて、気も短くなってい、次第に二人を遠ざけ、高根の万助をたよるようになったのである。

「もう、この親分についていても、行先、おれたちの出る幕はねえぜ」

「そうよなあ……」

駒吉と松蔵も肚を決めねばならなくなってきた。

そうした気配をたちまちに感じとった桑飼の弥右衛門が、あるとき高根の万助に、

「あいつら、おれを見捨ててずらかろうつもりらしい」
と、いった。
すると万助が、
「そうなったら一大事。桑飼一味の秘密がほかへもれてしまうことにもなりかねません」
「そうよ、そのことよ」
「いっそのこと、二人を殺っておしめえになったらいかがなもので……」
「そうよなあ」
この二人の会話を聞いていた蛭川の清五郎というのが、そっと駒吉・松蔵へ、
「あぶねえから早く逃げてしまいなせえ」
と、すすめてくれた。
「畜生め！」
「もう親分でも手下でもねえ」
駒吉も松蔵も四十を越えたばかりであったし、
「おれたちが、あれほどにあぶねえ橋をわたって、たすけてきたのも忘れやがって……」
「こうなったら破れかぶれだ」
二人とも激怒した。
それから間もなく、大坂の本町・渡辺筋にある本拠で、桑飼の弥右衛門は二人に暗殺された。



すぐさま二人は生駒山の山中に隠してあった八百五十余両を運び出し、これを山分けして逃げたのである。
一足ちがいで生駒山へ駈けつけた高根の万助は、
「二人とも、よくも親分を裏切ったな。盗人の掟にそむいたらいのちはねえぞ。きっときっと、草の根を分けてもさがし出し、なぶり殺しにしてくれる！」
彼は、桑飼の弥右衛門の後をつぎ、二代目の首領となり、一味の者を諸国へ散らし、逃走した二人を追いもとめた。
二年ほどは、駒吉と松蔵も一緒に逃げまわっていたけれども、
「二人では足がつきやすい。ここで別れよう」
「うむ。これからは赤の他人だ。どんなことが起きても恨みっこはねえことにしようぜ」
「合点だ」
そして尾張・熱田で別れた……と、こういうことになる。
「あれから十何年……まあ二人とも、よく見つけられなかったものさ」
「二代目の弥右衛門はまだ生きているらしい」
「たがいに気をつけることだ。それにしても駒吉さん。よく江戸に腰を落ちつける気になったね？」
「なあに、もうほとぼりもさめかけているし、なるべくは外へも出ねえようにしている」

「わしもさ」
六郷蜆の味噌吸物や鯉のあらい、鶉の木の芽焼きなどで盃をかさねるうち、松蔵が、
「駒さん。お前さん、この近くにお住いかえ」
「まあ、ね……」
「松村町に井筒屋という小間物屋があるそうだが、御存知ですかえ？」
駒吉は口へはこびかけた盃の手をとめたが、彼の老顔にはみじんの変化も見られない。
「井筒屋さんねえ……」
「御存知かえ？」
「交際はないけれども、店の名は知っている」
「主人の徳兵衛というのは、どんな人だろうね？」
「さあて……」
いまは井筒屋徳兵衛の駒吉だが、どこまでも知らぬふりで、
「松蔵どん。その井筒屋がどうしたのだ？」
「なあに……」
松蔵はぬたりと笑い、
「井筒屋の暗殺をたのまれているのでね」
「ふうむ……お前、まだそんな、あぶない橋をわたっているのかね」



「泥水は、なかなか落ちねえものだ。ところでお前さんはいま？」
「わしは堅気さ」
「へへえ……」
「松蔵どん。その井筒屋というのは悪い男なのかい？」
「なあに、悪いのは女房のほうだ。金が目当てということよ」
「おもしろそうなはなしだねえ。酒のさかなにもっとくわしくきかせておくれ」
「はなしてもいいがね、お前さんになら……」
「松さん。ま、ゆっくりと飲っておくれ。さ、さあ、もっと威勢よくあけないか」
「すまねえ。とんだ御馳走に……」
昔なじみの、こころをゆるした友だちのことでもあるし、なつかしさと酔いとがないまぜになり、たくみな駒吉の誘導に乗せられ、ついつい松蔵はすべてを打ちあけてしまった。
だが、あくまでも駒吉は、いまの自分が井筒屋徳兵衛そのものであることを隠しぬいて、
「松蔵どん。これで寝酒でもやっておくれ」
金十両を紙に包んでわたし、
「これからは道で出会っても知らん顔だぜ」
と、念を押し、あっさりと別れて行った。

## 三

その夜ふけ……。

松村町の井筒屋の奥座敷で、黒塚の駒吉……いや井筒屋徳兵衛が、女房・おもんへ執拗な愛撫を加えている。

おもんは細い躰つきではあるが骨がないほどにしなやかで、やわらかい肌身をしてい、この女が市ケ谷八幡・境内の水茶屋〔しころや〕の茶汲女をしていた二年前に、

（女にきめよう）

ひと目見て、徳兵衛は決心をした。

京都にしばらく隠れて高級小間物の商いをおぼえこみ、江戸に店をひらいてから数年たつうち、

「井筒屋の品物は江戸にないものだ」

との評判が高くなった。

店がまえも小さく、番頭・手代・小僧をふくめて五人ほどの奉公人を抱えているだけだが、なにしろ京都から直送の高級品をあつかっているので値も張るが、大名や大身旗本のひいきがあり、いまの徳兵衛はほとんど店先の小売りをせず、得意まわりだけでじゅうぶんに経営が成り立つ。

これは、徳兵衛にとってさいわいなことであった。

〔黒塚の駒吉〕の前身をあくまで隠しぬき、



（おれも、うまくゆけば、このまま井筒屋徳兵衛として畳の上で死ねそうだな）

その安心が次第に彼の胸の中へ、あたたかくひろがりはじめてきたようである。

そうなると、五十の坂を越える男でも〔家庭〕のぬくもりがほしい。

家庭のぬくもりは、女房のぬくもりといってよい。

これまで〔家庭〕も〔女房〕も持った経験が一度もないだけに、おもんを見た瞬間から徳兵衛は、いても立ってもいられなくなった。

水茶屋づとめをしている女であるから、むろん、いろいろな〔過去〕が想像できたけれども、

（おれにだってうす暗い過去があるのだ。何も問うまい）

と、決意をした。

徳兵衛が〔しころや〕を通じ、

「ぜひとも女房にほしい」

申しこむと、おもんは一も二もなく承知をした。

女房にするには、相当の金もつかったが、

（安い買物だったなあ）

徳兵衛は狂喜したものだ。

はじめのうちは色っぽい〔恥じらい〕を見せつつ、次第に、おもんの白い裸体が徳兵衛を手玉にとりはじめた。

おもんの、しっとりと汗ばんだ肌身へ顔をうめ、
「お前はもう……なんという躰をしているのだ。これではお前、もう私は死んでしまいますよ」
なぞと徳兵衛、年甲斐もないたわごとを洩らし、
「ああ、よかった。ああ、もう、お前というものを女房にすることができて、こんなもう、うれしいことは……」
緩急自在に変転するおもんの肉体にほんろうされ、ふわふわとわが全身が宙に浮いているような夢幻境におぼれこみ、
「ああもう……あたしはほんとうにしあわせでございますよう。だんなのような、神さまのようなお方に拾っていただきまして……ああもう、いのちがけであたし、だんなと添いとげるつもりでござんすゆえ、きっと捨てないで」
「捨てるものかえ。お前こそ私を捨てないでおくれ」
「あれ、にくらしいことを……このだんなのお口がにくい、お口がにくい……」
なぞと、おもんが徳兵衛の口を、舌が千切れるほどに吸ったりする。
なんと、そのおもんが、
(私を殺害しようとしている)
のであった。



おもんは以前、五光稲荷の岡場所で客をとってい、そのとき〔きねや松蔵〕の店から出ていたという。
間もなく、芝・金杉の町医者で水野立泉という老人の客に身うけをされ、立泉の後妻におさまった。このときも松蔵が間に入って、いろいろと世話もし、立泉から次々に金を引き出して甘い汁を吸っていたらしい。
間もなく立泉老人が死ぬと、おもんは土地の無頼漢で船松の権太郎という若い男に入れあげ、立泉がのこしておいてくれたいくらかの金もみんな権太郎に取られたあげく、こやつが勝手に市ケ谷八幡の〔しころや〕から金を借りた上、おもんを茶汲女にしてしまった。
茶汲みといっても一種の娼婦である。
客をとりながら、借金を返しながら、尚も船松の権に入れあげなくてはならぬという……そこへ、井筒屋徳兵衛があらわれたのだ。
一も二もなく、おもんが徳兵衛のふところへ飛びこんだのも当然といえよう。
しかし、このようなことがあったのを徳兵衛が知ったのは、松蔵と出会って、それと知らぬ彼が酒のさかなに語りきかせてくれたからである。
(松蔵に出会わなかったら、おれも殺されてしまいかねなかった……)
徳兵衛は、いつもよりは一層烈しい狂態をしめしているおもんの白い裸身を、おもわず冷ややかな眼で見つめていると、

「あれ、だんな……」
はっとおもんが眼をひらき、
「どうなすったんですよう」
「いや、なに……なんでもない、なんでもない」
徳兵衛は、おもんの乳房へ顔をうめ、
（こいつめ、いまに見ていろ）
おもいながらも、そのおもいが一種のするどい刺激となり、にくしみをこめた強い動作でおもんへのしかかり、乳房へ嚙みついた。
「あれ……」
叫びながら、おもんは逆上し、得体の知れぬ声を吐き散らしながら、激しく腰をゆさぶりはじめた。
以来、三日のうちに、井筒屋徳兵衛は、おぼろげながら様子がわかりかけてきたようである。
おもんの肉体を溺愛しているうちには全く気づかなかったことだが……。
どうも、おもんは若い番頭の宗次郎と情をかわしているらしい。
以前にも二人の様子が何となく、
（妙だな……？）
と、感じたこともあるけれど、



（年寄りのひがみだ。夜のおもんは、あれほどにわしをよろこばせてくれるじゃないか……）
宗次郎は、若いがしっかりした男だし、井筒屋の店を出した当初、みずから屋敷まわりをする徳兵衛について荷を背負い、汗水たらしてはたらいてくれた、いわば子飼いの番頭である。番頭といえば彼一人で、いまは井筒屋の支配人というわけであった。
（おそらく、おもんとの間にも、わしの子は生まれまい。それなら行く末は宗次郎を養子に迎えても……）
そう考えていたほどなのだ。
その宗次郎をくわえこんだおもんが、自分を殺して井筒屋の財産を我物にしようということだ。
金の出し入れには、さすがむかしの稼業柄、徳兵衛の眼がいつも光っているのだが、その間隙をぬすみ、おもんが宗次郎へねだって何とか金三十両の手つけをこしらえ、松蔵に暗殺をたのんだと見てもよい。
（畜生め、どうしてくれようか……）
数日たつうち、徳兵衛はなんだかおもしろくなりはじめた。あれからは一歩も外へ出ない。外へ出なければ暗殺される機会もない。
おもんの笑顔の底に、ちらちらとあせりといらだちの翳りが見えはじめた。
こうなると徳兵衛は〔黒塚の駒吉〕のむかしに神経のつかい方がもどってきて、しかもそれをおもんには気づかれない。

にこにこと、表面はいつもの徳兵衛でいながら、さり気なく、しかも執拗におもんと宗次郎の気配をうかがっている。

宗次郎はおもんの暗殺計画を知らないらしい。

彼があせっているのは、徳兵衛が外出をせず、しかも自分をいつも傍へ引きつけておくため、おもんを抱く機会がないからであった。

宗次郎は、おもんの肉体の完全なとりことなってしまっている。宗次郎の躰には徳兵衛が失ってしまったものがある。青葉若葉の樹林にたちこめる生き生きとした匂いと、燃え立つような男のいのちのなまなましさが押えきれなくなってきて、このごろは徳兵衛へ対する態度にも反抗のにおいが隠しきれぬ。それを徳兵衛は叱りもせずにあしらいながら、

（なるほど。おもんのような女でも、この若い生血をしゃぶりつくしたくなるものか……）

わかるような気がした。

さびしかった。

徳兵衛が松蔵と采女ヶ原で出会った日から十日目になり、

「明後日は、宗次郎を連れて、ひるすぎに赤坂の佐々木様へうかがうつもりですよ」

夕飯のとき、徳兵衛がおもんにいった。

「あさって、でございますか？」

おもんの眼が、一瞬、白く光ったのを徳兵衛は見のがさなかった。



次の日。

おもんは、

「ちょいと浅草の観音さまへおまいりに……」

と、徳兵衛にいいおき、外出をした。

徳兵衛は（おれの明日の外出を松蔵へ告げに行ったのだな）と思いながらも、

「いいとも、いいとも。ゆっくり行っておいで」

にこやかに女房を送り出した。

その翌日。

徳兵衛は、おもんが用意をしてくれた茶の上布に黒の夏羽織を着て、

「日ざかりは暑いからね」

こういって、陽よけの葛籠笠をかぶり、宗次郎へ荷物の包みを持たせて共に出て行った。

宗次郎は、むろん羽織なしで笠もかぶらず、見送るおもんへちらとうらめしげな視線を走らせたが、主人の後について出て行く。

紀伊国橋のたもとから、これを見ていた殺し屋の近藤市五郎浪人は、

（やっと外へ出たな、よし。なんとか今日のうちに片づけてしまおう）

深編笠に顔をかくし、ふらりふらりと徳兵衛主従の後をつけて行った。

## 四

井筒屋徳兵衛主従が注文の品物をとどけに出かけた先は赤坂・一ツ木に住む大身旗本・佐々木右近の屋敷であった。

佐々木夫人や二人の娘たちは日ごろから井筒屋びいきで、上方わたりのぜいたくな品を好み、月に一度は徳兵衛か宗次郎が種々の品物を持ってごきげんうかがいに出向くのである。

この日も相当に買い上げてもらい、徳兵衛と宗次郎が佐々木邸を辞したときには夕暮れも近い時刻になっていた。

夏のことで、まだ、あたりは明るい。

「ちょいと、つき合っておくれ」

佐々木邸を出るや、すぐに徳兵衛は通りをへだてた新町三町目の角にある〔春木屋〕という鰻やへ入った。

「旦那。私は一足お先へ……」

「ま、いいじゃないか、手間はとらせないよ。それとも何かえ、お前、早く店へ帰って、何かすることでもあるのかえ？」

「いえ、な、なにもそんな……」

「それなら、いいじゃないか」



「は、はい……」

上って、徳兵衛はゆっくりと二本の酒をのみ、鰻で食事をすませるや、

「宗次郎。どうだい、ひとつ帰りにはお前が旦那で、わしが番頭。こういうことにしようじゃあないか」

「へ……？」

「つまり、私がその荷物を持ってお前の後から行く。お前は大威張りで、この私の羽織と笠をかぶり、大手を振って行く。どうだえ」

「どうしてまた、そんなことを……？」

「座興だよ。そのかわり、店へ帰るまでは、わしにどんな無理難題を吹っかけてもかまいませんよ」

どうも、宗次郎はのみこめない。

ふだんは、それほどの洒落っ気がありそうな旦那ではなかったからである。

「店へ帰ると、おもんがびっくりするよ。おもしろいじゃないか」

宗次郎はどきりとしたが、徳兵衛に他意がある様子もないので、ほっとすると同時に、なんだか急におもしろくなりはじめた。

（旦那は口にこそ出さないが、いまにきっと私を養子にするつもりらしい。そうなれば私が井筒屋の主人だし、そのうち旦那が病気にでもなって亡くなってしまえば、おもんさんも晴れて私

の女房に……あと十年も辛抱すれば……）

などと、このごろはひそかに思いめぐらしていた彼だけに、こうなると尚更（なおさら）、乗気となって、笑い出しながら、

「へえ、へえ……よろしゅうございます」

「やっておくれかえ」

「はい」

「途中、いくら威張ってもかまいませんよ」

「かまいませんので？」

「いいとも。それでなくちゃあおもしろくない。さ、わしを呼んでごらん」

「旦那……」

「いや、それじゃいけない。徳兵衛と呼び捨てにしなさい」

「かまいませんので？」

「さ、やってごらん、さあさあ……」

「じゃあ……と、徳兵衛」

「はい、旦那、あは、はは……よし、出来た」

そこで宗次郎が旦那の羽織を着、葛籠笠を持って〔春木屋〕を出ようとするのへ、

「笠をかぶらなくては、いけませんよ」



と、徳兵衛がすすめる。

「それでなくちゃあ、すぐにおもんがわかってしまう」

外は、まだあかるかった。

わずかに夕闇（ゆうやみ）がただよっている。

「ま、旦那、一足先へおいでなさいまし。私はここの勘定をはらってまいりますから」

徳兵衛にいわれ、宗次郎は溜池（ためいけ）の方向へ歩き出した。

両側が旗本屋敷となって、人通りが絶えた。

なかなか、徳兵衛が出て来ない。

（おそいなあ、何をしていなさるのか……？）

かなり行ってから宗次郎が振り向いた、その瞬間であった。

左側の築地塀（ついじべい）の切れ目から通り魔のような影が路上へ飛び出した。

市五郎浪人である。

深編笠をかぶったまま、これも笠をかぶってたたずんでいる宗次郎の傍を突風のように走りすぎざま、

「む……！」

電光のような抜き打ちであった。

「ぎゃっ……」

宗次郎がすさまじい絶叫をあげたときには、早くも白刃を鞘におさめた近藤市五郎は右側の小路へ消えてしまっている。

「う、うわ、わ、わ……」

路上に倒れ、もがき、うめいたのもわずかな間で、くびすじから肩にかけて只一刀のもとに深深と割りつけられた宗次郎が血みどろに息が絶えてしまった。

血がどくどくと、まるで音をたててでもいるようにながれた。

「あっ……」

一ツ木の町角で、遠くからこの有様を目撃していたらしい通行の人の声があがった。

徳兵衛が春木屋ののれんを分けて道へあらわれ、

(うまくいった。わしの身代りになって死んだのも、お前がしたことのむくいだよ)

にやりとした表情をすぐに引きしめ、

「あっ……宗次郎。宗次郎どうした！」

叫び声をあげ、徳兵衛は駈けつけて行ったものである。

真先にかけつけ、とにかく笠だけは宗次郎のくびから外した。

あとから町の人たちが駈けつける。

やがて、辻番所からも番人があらわれる。

役人も出張って来る。



徳兵衛が、松村町の店へもどったのは夜になってからである。

佐々木家の用人・笹川直右衛門も出て来てくれたし、役人の調べも、

「宗次郎にうらみを抱く者の仕わざ」

ということになった。

佐々木邸の足軽が二人、わざわざ徳兵衛を店まで送って来てくれた。

「おもん。お前さんまあ、大変なことになってしまって……」

徳兵衛は顔色も青ざめ、真に迫った演技で、

「いやはや、とんだことだ。いつもよくはたらいてくれるので鰻なぞを御馳走してやろうなぞと思わず、あかるいうちに帰ってくればよかったのだが……」

「へえ……」

いったきり、おもんはへなへなと崩れ折れるようにすわりこみ、あとは声も出ない。

「死体は明日の朝、お下げわたしになるそうだよ……おい、どうしなすった？……おもん。これ、おもん……」

「は……」

「宗次郎が死んだのを、それほどにお前も悲しんでくれるのかえ」

おもんが突伏し、号泣した。

## 五

このことがあった翌夜。

高輪北町の甲申横丁で、土地の無頼者・船松の権太郎が暗殺された。

これも、おもんが「きねや松蔵」を通じて手をまわしていたものだが、船松の権のような小物には何も近藤市五郎浪人をわずらわしたわけでもあるまい。殺しの代価も安かったろう。

権太郎のようなやつは、むしろ死んでくれたほうがよいので、お上ではろくな調べもしなかったらしい。

しかし、おもんにとって——権太郎はうまくあの世へ行ってもらっても、かんじんの徳兵衛がぴんしゃんとしている上に、愛人・宗次郎が間ちがえられて「いやな旦那」の身代りに殺害されてしまったのでは、なんにもならぬ。

いっぽう……。

近藤市五郎のところへは、両国の顔役・赤不動の嘉兵衛がたずねて来て、

「市五郎どんよ。お前さん、間ちがえたね」

「何を……ちゃんと殺ったぜ、井筒屋徳兵衛」

「ばかな。お前さんが斬ったのは番頭の宗次郎のほうだ」

「うそをつけ」



「うそなものか」

「だがお前、店を出て行ったときの、きちんと羽織を着て、笠をかぶった……」

「それが宗次郎なのだよ」

「そいつは若い男だろう?……おれが斬ったのは老人だ。お前からきいた通りの顔つきの男だ。そいつが店を出て笠をかぶるときに、おりゃ、はっきりと顔を見ている」

「お前さんがなんといおうと、死んだのは若い番頭だったのだよ」

「ふうむ……?」

凝(じっ)と空間をにらんでいた市五郎浪人が、

「こいつは、相手に気どられているぜ」

「何?」

「だからこそ、笠と夏羽織を番頭に着せて、一足先へ帰したのだ、徳兵衛というやつ」

「ふうむ……」

「いったい、お前はこの殺しをだれにたのまれた。いえよ、おい」

「そいつはいえねえ。理由はなんであれ、今度はお前さんの失敗だぜ」

「うむ……まあ、な……だが、どうして相手に気づかれたものか……?」

「後金の百両は、わたさねえよ」

「わかっている。もし、お前のいったことが本当なら、やり直しだ」

「たのみますよ。このごろはお上の眼がひどくうるせえから、めんどうなことになっては……」

「念にはおよばん」

この夜のことであったが……。

井筒屋で女房おもんが自殺をとげた。

徳兵衛も、よくよく注意をしていたのだが、なにしろおもんは、夕飯の後かたづけをする女中に手つだって台所へ入り、その女中がちょっと別の部屋へ出て行った隙に、鯵切り庖丁をつかみ、ちからまかせに心の臓へ突き立てたものである。

おもんの叫びをきいて、

「これ、どうした？」

徳兵衛がすぐに駈けつけ、血みどろのおもんを抱き起すと、早くも意識が混濁したおもんは両腕をさしのべてすがりつくようにした。

（わしにすまぬというのか……わびるつもりの自害か）

それまでは（おもんの始末をどうつけてくれようか）と、まだ憎悪をこめた計画をあれこれとめぐらしていた徳兵衛も、さすがに、あわれになって、

「これ、しっかりしろ」

叫ぶと、おもんは、かすかに、



「そ、宗次郎……宗……」

呼びかけるや、がっくりと息絶えた。

徳兵衛の顔色が、一変した。

徳兵衛は、おもんの死体を突きはなすようにした。

（畜生め……まだ、宗次郎のことを……）

そこまで、おもんが突きつめて宗次郎へおもいをかけていたとは……。

（なに、ほんの浮気ごころだったのかも知れない。すこし様子を見て……）

と、まだおもんにみれんが残っていた徳兵衛は、

（しばらくは何もいわず、そっとしておいてやろう）

と考えていただけに、激怒が去ると、さびしさのほうが強くなってきた。

（やはりなあ……）

ひっそりとした通夜をおこなったときも、われにもない強烈な動揺が徳兵衛を襲った。

汚みとしわがめっきりとふえた自分の肌と、亡き宗次郎の張りつめたなめし皮のように若い肌とをおもいくらべて見て、

（おもんが、わしに見せたあの狂態もかたちだけのものだったのか……）

いまさらに、それをおもうのである。

けっこう、おもんの女ざかりの肉体を相手に負けはとらぬつもりでいた自分を、蔭では、

（ざらざらした、乾いた男の肌身なんて、ほんとにぞっとする……）

と、おもんは眉をひそめていたのかも知れない。

通夜に、近くの木挽町に住む御用聞の伊三次というのが焼香にあらわれた。

ふだんは、まったくつきあいのない男であった。

何気なく、伊三次へ応待しながらも、

（こいつは……？）

徳兵衛の胸がさわいできた。

先日の宗次郎殺しにつづいて、今度はおもんの自殺……。

店の奉公人たちも妙におもい出しただろうし、お上の眼も、

（井筒屋には何かがある）

にらみをつけてきたと見てよい。

伊三次は、別に何事も問いかけることもせず、その夜、すぐに帰って行った。だが、するどく光る彼の眼は片時も徳兵衛の顔からはなれなかった。

お上の御用をつとめる伊三次の、このあたりでの評判は大したもので、これまでに何人もの犯罪者を捕えているそうな。

（あぶない。こいつはあぶない）

居ても立ってもいられなくなってきた。



明日は内輪だけの簡単な葬式をすることになっているが、

（逃げるなら一時も早いほうがいい）

こうなると、徳兵衛は黒塚の駒吉のむかしに経験したことが一つ一つよみがえってくる。

宗次郎やおもんの死から、徳兵衛自身の過去が知れわたるということもあるまいが、一応は主人夫婦と番頭の三角関係だと見こみをつけられることであろう。

それはいいが、そのことから、

（わしの、どんな尻尾をつかまえられるか……そいつがこわい）

のである。

これまでは身もとを隠していただけに、いざ本気となってお上が調べはじめれば、

（井筒屋の身状は、どうも怪しい）

かならずそこへ眼をつけられる。

（よし！）

夜がふけてくるにつれ、徳兵衛の決意は次第にぬきさしならぬものとなってきた。

翌朝……。

井筒屋徳兵衛の姿は、どこにも見えなかった。

手もとにあった四百七十余両をふところに、徳兵衛は何処へともなく消えて行ったのである。

それから、十年の歳月がながれた。

その年、文政元年の夏の或日。

京都の蓮華王院・三十三間堂門前にならぶ茶店の一つで〔玉屋〕という店へ、

「お茶と、なにか甘いものを……」

いいながら、品のよい、どこかの商家の主とも見える老人が入って来た。

日ざかりの熱気が町にも道にもたちこめていて、三十三間堂へ参詣する人の足も途絶えているらしく、この小さな茶店に他の客は一人もいなかった。

「お暑うございますなあ」

と、柿色ののれんが下った奥の土間から、これもかなりの老人らしい声が、

「ただいま、お茶を……」

客は背を向けたまま、京風の腰かけへすわりこみ、汗をぬぐいつつ、

「あ、ゆるりとでけっこう」

おだやかな声なのである。

「御参詣でございますか？」

「はい、はい。京は三年ぶりで……」

「さようで。どちらから？」

「大坂におりますよ」



「へえへえ」

「このお店、この前来たときにはなかったようにおもいましたがな」

「へい、へい。去年の春に店を出させていただきましたので」

「ほう」

「何せ、このよぼよぼの老爺ひとりがやっておりますので……」

と、さびしげな声で、

「手がうまくまわりかね、ろくなまねも出来ぬので、お客さまもついてくれませぬ」

いかにもたよりなげにつぶやきつつ、老亭主が茶の盆を持って奥からあらわれた。

「おそうなりまして」

盆を置く亭主が客を見て、

「おや……？」

目をみはった。

同時に、

「あっ……」

驚愕の叫びをあげた亭主の顔が空間へ凍りついたようになった。

亭主は、井筒屋徳兵衛こと黒塚の駒吉であった。

客は、かつて徳兵衛が松蔵と共に殺害した盗賊・桑飼の弥右衛門の片腕といわれた高根の万助

である。

というよりも二代目の弥右衛門といったほうがよかろう。

この男のきびしい眼をのがれて、徳兵衛も松蔵も諸国を逃げまわり、苦労をかさねたことはすでにのべた。

（殺られる……）

老いさらばえた徳兵衛が、よろよろと身を返して逃げようとしたが、

「う、ああ……」

苦しげなうめきを発し、そのまま土間へひざをついて、

「あ　あわ、わわ……」

さらに両手をつき、その姿勢のまま、ぐったりと倒れ伏した。

「おい、これ……駒吉どんよ……」

二代目・弥右衛門があわてて、徳兵衛を抱きおこして見て、

「あ……、もう、いけない」

現代でいう脳出血のようなものであったのか……。

すでに、徳兵衛の息は絶えていた。

二代目・弥右衛門は、これも老いた我腕に抱かれて死んだ徳兵衛へ、

「駒吉どん。早まったなあ……わしはもう、盗人稼業から足を洗って十五年にもなる。もう、



お前さんのいのちをねらうような……そんな、ばかなまねをするつもりはなかったのになあ……」

ささやきかけながら、弥右衛門の両眼はみるみる泪をあふれさせ、

「お前さんに先代の親分を殺させたのは、このわしが原因だったと、今日このごろ、やっと気がついたのだよ。あのころのわしは、ずるい悪党だったものなあ……」

真夏の陽光に白く乾き切った道を、痩せこけた野良猫がとぼとぼと横切って行った。

# 縄張り

## 一

「今日な、親分の墓へ参って来た」
岩淵の又蔵はふとんの中で腹這いになり、煙草を吸っている自分のそばへ、寝間着姿ですべりこんできたおみねに、
「早いものだ。親分が死んでから、もう一年になる」
つぶやくように、いった。
「そうだねえ……」
おみねは、上の空で、
「ねえ、……又さん、もう煙草はおよしな。ねえ、こっち向いて……」
年増ざかりの熟れきった四肢をからみつかせてきた。
「又さん……お前さんたら……」
「うむ……うむ」
「久しぶりじゃあないか、もっとしっかり抱いておくれな」



女の寝化粧の香と濃い体臭がまじり合い、部屋の中にむれこもっている。
又蔵は、おみねのえりもとを押しひろげ、もりあがってきた胸乳へ、しずかに顔をうめてゆきながら、
「今日、親分の墓の前にいるとな」
「ああ……ねえ、お前……ねえったら……」
「向うの墓の蔭にかくれて、凝と、おれを見ている奴がいた」
「え……？」
「そいつは、船戸の権だったよ」
おみねが手足のうごきをやめ、はっと呼吸をひくのが、又蔵にはっきりわかった。
「船戸の権……だって？」
「たしかに、そうだった」
「そりゃあ、お前……」
「いうまでもねえことだ。おれのいのちをねらっているのかも知れねえ」
「いやだよ、そんな……」
「ふ、ふふ……」
「いやだよ又さん……気味のわるい、急に笑い出したりして……」
「ま、いいやな……夜になると、だいぶ、しのぎやすくなった。もう蚊も出ねえ」

ここは、大川（隅田川）に近い北本所・表町の片隅にある〔熊や〕という小さな居酒屋の、小部屋であった。

亭主は熊吉といい、もう六十に近い老爺だが、夜は店の土間の上にある中二階の三畳敷きにねむっている。

おみねは、この熊吉の養女である。

岩淵の又蔵が、今日、墓まいりをしてきたという三の松の平十の子分だったこともある熊吉であった。

又蔵とおみねの関係は、ずいぶん前から熊吉もみとめているのだが、だからといって、二人が正式に夫婦となったわけでもない。

それというのも、

「たがいに情夫と情婦の間柄でいるほうがいいのさ」

と、養父の熊吉もおみねに、

「又蔵という男は、さんざん人の血をあびてきた男だ。何人ものうらみが、かかっているあの人の躰は、いつなんどき、あの世からお迎えが来るか知れたものじゃねえ。又蔵に身もこころもうちこんだら、おみね。お前は泣きを見ずにゃあいめえよ。だからよう。互いに情事をたのしんでいりゃあいいのだ」

いつもくどいほど念を入れているし、それをおみねの口からきいた又蔵も、



「ちげえねえ。まったくそりゃあ、爺つぁんのいう通りだ」

まじめにいったものである。

又蔵は、亡き三の松の平十の〔ふところ刀〕として、何人、人を殺したか知れたものではない。

いや、彼が三の松のもとへ来るまでの過去にも、どのような血をあびていることか……。

又蔵は、おのが過去を、おみねにも語ろうとはしない。

三の松の平十のところへ、又蔵がやって来たのは、四年ほど前のことであった。

〔岩淵の又蔵〕

という通り名からおして考えると、

「東海道の……駿河の吉原、あの先の富士川をわたったところにある岩淵というところの生れかも知れねえ」

熊吉が、おみねに、そういったことがある。

三の松の平十は、本郷の根津権現社・門前にある〔正月や〕という料理茶屋の主人だが、裏へまわると、土地の顔役であった。

それも、ただの顔役ではない。本郷一帯はもとより、下谷にまで、盛り場で稼ぐ香具師の〔総元締〕をしていたほどの男だ。

江戸の〔暗黒街〕の中でも、三の松の元締といえば五本のゆびに入るとか……。

それだけに、素人がきいたら肝をつぶすようなことを平気でやってのけもする。

大金を積まれれば〔人殺し〕も引きうけようという……だから、岩淵の又蔵は、こうして危険な役目をするための尖兵の一人として、三の松の平十にやとわれたのである。

むろん、報酬もいい。

又蔵は、大坂の顔役、白子の菊右衛門から、

「ま、つかってみねえ。凄い男だ」

との紹介状を持って、江戸の三の松のところへあらわれたのである。

つかって見て、

「なるほど」

三の松平十が女房お才へ、

「こいつは手ばなせねえ。ついでに、おれの身も護ってもらおう」

と、いった。

三の松ほどの顔役になると、縄張りも大きいが危険も多い。なにしろ、本所・下谷の盛り場に出て、小さな見世物を興行したり、露店で、品物を売ったりする何百人もの香具師の上前があつまるだけでも大へんな金高になる。

その他いろいろ、世間の裏の、暗いつめたい仕事がいくらもある。

中でも〔殺し〕を請合えば、一人につき五十両以下ということはなく、相手が武家や豪商のあるじだなどというときには、百両以上の現金がころげこむのだ。



三の松平十を暗殺して、その縄張りをうばい取ろうという他の顔役もいるにちがいなく、ずっと以前には、

「どうもおれは、五十までは保つめえよ」

などと苦笑していた三の松だが、岩淵の又蔵が来てからは、

「殺しに徹している、というのが又蔵のことだ。それだけにこの道の義理には堅え」

と、ほめ、

「ひょっとするとお才、おれは六十まで保つかも知れねえわさ」

笑いながら、いうようになった。

又蔵が来て二年も経つと、

「おりゃ、三の松の跡目を又蔵へゆずろうかと、考えはじめたよ。あいつなら安心だ。若い者は、みんな又蔵になついている。いまに、おいらはお前や子どもたちと、この料理茶屋のあるじになって、のんびり暮したい。もっとも、こいつはずっと先のことだがな……」

女房にいうと、

「旦那がそこまで、又蔵さんを見込みなすったのなら、私に否やはありませんよ」

お才もこたえた。

夫婦の間に、十八と十五になるむすめ二人がいる。

その決心が、まだ、しっかりとかたまらぬうちに、去年十二月に、三の松の平十は急死をして

しまった。

殺されたのではない。現在でいう心筋梗塞のようなものであったのだろう。

以後一年の間、三の松の縄張りを争って、それまで三の松傘下に入っていたいくつもの勢力が血眼になって起ちあがり、暗闘をくり返してきている。

## 二

三の松平十の女房お才は、さすがに、こうなることを予期していたと見え、

「死んだ元締めは……おれが死ぬようなことがあった場合、お前は女だから、決して縄張りに執着してはいけねえ。すぐに身をはなして故郷へ帰れ……こういわれていたことでもあるし、あとはみんなでうまくやっておくれ」

黒谷の勘五郎という、亡き三の松の片腕といわれた男と、そのほか十名ほどの主だった子分たちをあつめてきっぱりといい、二人のむすめをつれ、故郷の三河・池鯉鮒へ帰ってしまった。ちなみにいえば三の松平十も池鯉鮒の生れだそうな。

お才たちを故郷まで送りとどけたのが、岩淵の又蔵であった。

「又さん。これをあずけておくよ」

江戸を発つにあたり、お才がずっしりと重い胴巻を又蔵へわたした。中を見たわけではないが、

（む。これだけの金があれば）



お才もむすめたちも、のんびりと暮してゆけよう、と又蔵はおもった。

池鯉鮒に着くと、

「又さんは、江戸へ帰らないほうがいいだろうとおもうがねえ」

と、お才がいう。

「へい……」

「なぜというなら、お前さんは死んだ元締の……」

「いえ、別に、私は元締の縄張りをどうしようなぞと……」

「それはわかっている。けれど、何かとめんどうなこともおこりそうな気がするし……」

「なに、大丈夫でございますよ」

江戸には、おみねを残してきているし、それに江戸以外のどこの国へ行っても、又蔵の身が〔危険〕なことは同じようなものなのである。

三の松平十という男は、暗黒街における自分の権威をまもるためには、どんな惨酷なことも眉毛ひとつうごかさずにやってのける男で、又蔵が来てからも、同じ香具師仲間の利け者を二人も暗殺している。

二人とも又蔵が殺った。

殺ったことは、いま、又蔵だけが知っていることである。この場合、元締が配下の殺し屋を使うのだから、親分子分の関係、義理合いからいって一文もはらうことはないのだが、

「御苦労だった。少いが、かんべんしておいてくれ」

一人につき二十五両。合わせて五十両を、三の松はきちんと又蔵へわたしている。この金高は、他のたのみで三の松が殺人を引きうけ、いろいろと上前をとったのち、又蔵へわたす金高よりも多かったのである。

そうした三の松のやり方が、又蔵の気に入っていた。

殺しの稼業を何年もつづけている又蔵だが、このようにきちんとけじめをつける親分を見たのは、はじめてであった。

この四年間に、又蔵が三の松からもらった金は五百両に近い。現代でいえば、三千万円ほどになろうか……。

それだけの金は、みな消えてしまったといってよい。殺し稼業で生きている男たちは、みなそれだ。人生に目的がない。それは、いつなんどき〔死〕が自分へ襲いかかってくるか知れたものではないからである。

それでいて、そんな仕事をしている自分を恥じている。

いいようのない、陰惨な虚無感だけが、むしろ又蔵の行動の根源になっているのかも知れないのだ。

ぜいたく三昧につかい散らし、その日のことだけを考えて生きる。その日というよりも、その一瞬を、……と、いったほうがよいだろう。



又蔵の場合、上野山下の岡場所で娼婦をしていたおみねと知り合い、彼女の養父が、もとは三の松の子分だったことがわかると、すぐおみねに足を洗わせ、北本所で居酒屋をやらせることにした。

「おれも、たまにはゆっくりと休む場所がほしいからよ」

と、又蔵はいった。

病気だった養父の熊吉も癒って、自分の名をとってつけた〔熊や〕の店で、酒の燗をつけたり庖丁をとったりしている。

おみねも、汗みずくになってはたらいているし、そのほかに小女が一人、これは近くの長屋に住む、棒手ふりのむすめが手つだいに来ている。

「又さんのおかげで、極楽へ来たようなもんだ」

と、熊吉はよろこんでいる。

又蔵は冷めたく、

「おれは何も、お前さんたちのためにしたことじゃあねえ。おれのねぐらがほしかっただけのことよ」

と、熊吉へいい返したものだ。

ところで……。

お才たちを送りとどけ、又蔵が江戸へ帰って来ると、三の松の縄張りをめぐっての暗闘は、い

よいよ烈しさを加えてきていた。

先ず、三の松の片腕といわれた黒谷の勘五郎が跡目をつぐべくうごいている。

勘五郎は四十がらみの年輩だし、でっぷりとした肥躰にも貫禄がそなわってい、鶴のようにやせこけていた三の松平十と並ぶと、

「どっちが元締だか、わからねえ」

などと、いわれたほどだし、百人に余る子分たちの半分は、この勘五郎の手につかまれているといってよい。

あと半分の子分たちは、鹿渡の島之助という、これも三の松の幹部だった男が手なずけていて、

「黒谷の勘五郎なぞに縄張りを渡しちゃあならねえ。勘五郎に、これだけの縄張りがおさめられるものか」

と、息まいている。

この鹿渡の島之助の後押しを、ひそかにしている黒幕がいた。これが両国一帯の盛り場に威勢を張る香具師の元締・羽沢の嘉兵衛であった。

羽沢の嘉兵衛といえば死んだ三の松平十が一目も二目も置いたほどの元締である。

もう七十をこえた老齢で、両国橋を本所へわたった回向院の近くで〔河半〕という立派な料理茶屋を経営している嘉兵衛だが、ほとんどそこから外へは出ず、見たところはよぼよぼの小さな老人でいながら、彼の口ひとつで江戸市中にいる千人もの子分たちがどうにでもうごくという。



それだけに、黒谷の勘五郎も必死であった。

勘五郎の後押しをしているのは、王子から巣鴨へかけての暗黒街に君臨している〔追分の重八〕という元締で、この精悍な風貌をした三十男は縄張りを亡父からゆずられたばかりであるから、

「勘五郎どんよ。おれが後押しをする。なあに、羽沢の嘉兵衛なぞ、あんな老いぼれが、いつまでもあぐらをかいていやがるから何事もおさまらねえのだ。片足を棺桶へ突っこみながら、まだ三の松の縄張りによだれをたらしていやがるのだ。かまわねえからどしどし、やっつけてしまいねえ」

意気さかんに、黒谷の勘五郎をけしかけているらしい。追分の重八も、首尾よく勘五郎が三の松の跡目をついだときには、自分の勢力を本郷・下谷へも伸ばすつもりで、これは勘五郎も承知している。

「凄い男を貸すぜ」

こういって、追分の元締が勘五郎へ一人の殺し屋をつけてくれた。

こやつが〔船戸の権〕であった。

岩淵の又蔵が、三の松の墓まいりをしているところを、物蔭からそっと盗み見ていた三十男である。

## 二

（ふん……黒谷の勘五郎は、おれが両国の元締にそっとたのまれ、自分のいのちをねらっている……と、そうおもいこんでいるらしい）

と、又蔵は直感していた。

虫が知らせたのか、三の松の平十は、急死する七日ほど前に〔正月や〕の奥の一間へ、ひそかに又蔵と勘五郎をまねき、こういったことがある。

「おれはな、跡目を又蔵どんについでもらいたいと考えている。ま、勘五郎も気を悪くしねえできいてくれ。二人とも血をかぶってここまで生きてきたわけだが、縄張りをおさめるには、それぞれ得手不得手がある。又蔵どんは三十五、六……と、おれは見ているがどうだえ？……は、はは。それはさておき、いままで勘五郎には下谷の縄張りをまかせてきたのだし、そっちの跡目をついでもらおう。本郷は又蔵どんにやってもらいてえ。すっぱりとここで、二人とも承知をしてくれ」

むろん、又蔵は承知をしなかった。

香具師の元締になるなぞ、考えても見ないし、興味もないことであった。

勘五郎は不快を露骨にしたが、親分のいいつけとあれば厭とはいえぬ。下谷は一部分だし、本郷の縄張りとくらべたらずっと小さい。



「ま、今日のところは、これ位にしておこうか」

と、三の松がいって、そのときは終った。

間もなく三の松は急死したので、黒谷の勘五郎は、

（又蔵の野郎。跡目をつぐなぞとは飛んでもない……ぬかしていやがったが、口先だけにちがいねえ。元締が死んだら、きっと、手をのばして来るにちげえねえ。それが証拠に、船戸の権がさぐってきたところによると、三の松の元締めの墓の前で何か凝と考えこんでいやがったというじゃあねえか。それに又蔵め、近頃は本所かいわいをうろうろしているらしい。こいつはきっと羽沢の嘉兵衛がところへ出入りをしているのだ。あいつ、殺しのほうじゃ凄いというぜ。こいつは何とかしなくては、こっちの首があぶねえ）

恐怖と怒りが一つになり、

「先手をうつか？」

船戸の権にもちかけると、

「百両でよろしゅうございますよ」

権は、商家の手代のような温和しい顔に微笑をうかべて、

「殺れとおいいなさるなら、今夜にでも……」

と、いった。

三の松の跡目相続には、江戸の主だった元締たちの合議があり、その上で、「だれだれにする」

ことが決められる。三の松には後をつぐ男子がいないからだ。

これらの元締の中で、羽沢の嘉兵衛の発言も大きいけれど、もっとも重要なのは芝の元締・治兵衛である。先ず、この男が江戸の暗黒街の最高権威といってよい。

芝の治兵衛はおだやかな人柄だといわれ、縄張りのスケールはあまり大きくないのだが、すでに四代目の伝統をもち、彼が、いったん命令を下せば、羽沢の元締のいうことをきく子分たちも沈黙せざるを得ない。

ところが六十二歳の治兵衛は、いま少々からだをこわし、箱根へ湯治に行っている。

「ま、急ぐことはねえさ。わしが江戸へ帰ってから、ゆっくり三の松の跡目のことを相談しよう」

こういって治兵衛が箱根へ発ったのは、夏が来ようとするころで、それから約四か月経過していた。

黒谷の勘五郎の黒幕である追分の重八。

鹿渡の島之助の黒幕、羽沢の嘉兵衛。

この両派から、ひそかに、箱根の芝の治兵衛のもとへ密使がさしむけられ、

「どうか、私のほうへちからをかしていただきたい」

もし、ちからを貸してくれるなら、

「芝の元締へはこれこれのことをさしあげるつもりでございます」



と、条件が出されている。

これこれのこと……が縄張りの権利なのか莫大な金なのか、それはわからぬ。

だが、芝の治兵衛のこたえは、まだ、はっきりと出ていないようだ。

「こんなさわぎは見たくもない……お前、そういっておいでだったけど……」

このごろは〔熊や〕の奥の小部屋へこもりきりになってしまった又蔵へ、おみねが、

「そのときこそ、あたしも又さんと、いよいよお別れ……そうおもっていたんだけどねえ」

「いずれは、そうなることさ」

「やはりねえ……」

「おれの躰には、何人もの人のうらみがかかっている。江戸へ来てからは危い目にもあわねえが、前に、おれが手にかけた男の縁類やら子分やらが、このおれのいのちを……」

「もう、よしておくんなさいよ」

「む。いってみたところで、はじまらねえことよ」

「ねえ……」

「え？」

「いっそのこと、ねえ……私もおとっつぁんも一緒に行くから、どこぞの山ん中へでも入って、だれにもわからず百姓でもしたら……」

又蔵は、苦笑とも憫笑ともつかぬうす笑いをうかべ、

「女という生きものは、いつになっても……いくつになってもそれだ」
「だって……」
「このおれの手が短刀のほかに何をにぎれるとおもっていやがるんだ」
「だって……」
「おみね。おりゃあな、ちょいと、おもしろくなってきているのだ」
「何がさ？」
「今度のさわぎがさ。三の松の縄張りを、どっちがものにするか……この眼で見物してえ気になった。退屈しのぎに、ちょうどいいや」
「お前まさか、どっちにも味方してはいないだろうね？」
「ああ……」
「よしておくんなさいよ、ほんとうに……こうして、この家に……いえ、一生とはいわない。できるだけ長く、昼寝ぐらしをしていておくんなさい」
秋が来ていた。
障子の向うの小さな草原の上に、赤蜻蛉の群れがながれているのを見つめたまま、岩淵の又蔵は、もう口をきこうともしない。
「おみね。店へちょいと来てくれねえか」
庖丁の音がやみ、熊吉のしわがれ声がきこえた。



## 四

黒谷の勘五郎から、
「久しぶりで又蔵どんといっぱい飲りたい。このところ、ちっとも根津へ来てくれねえし、みんなも会いたがっているから、ぜひともひとつ、今日は顔を見せてもらいたい」
との口上をもって、使いの者が「熊や」へあらわれた。
「いいとも。暮れ方までにめえりますと、勘五郎さんにつたえてくれ」
すぐさま、又蔵はこたえた。
おみねは懸命に、これをとどめようとしたが、
「なあに、大丈夫だ」
又蔵は、事もなげに、
「よしたとえ、おれの身に間ちがいがあったとしても、大したことじゃねえ。人がひとり、死ぬだけのことさ」
吐き捨てるように、いった。
この夜……。
根津権現前の「正月や」の奥座敷へあつまったのは、黒谷の勘五郎と、その黒幕である王子の元締・追分の重八、それに又蔵の三人のみであったが、次の間の闇には、船戸の権が刃物と共に、

（おれを見張っていやがるな）

と又蔵は、座敷へ入るときから感じとっていた。

「よく来てくれたな、又蔵どん」

と、勘五郎は上機嫌で、念の入った酒肴の仕度をはこばせた。追分の重八は、はじめにやにやと笑っているだけであったが、盃のやりとりがすすみはじめ、

「ときに、又蔵どん」

きゅっと顔のいろをひきしめ、

「たのみがある」

「え……何でございましょう」

「人ひとり、殺ってもらいてえのだ」

「どこの、だれをね？」

「両国の元締、羽沢の嘉兵衛さんをだ」

「金しだいでございますね」

「ほ……金をつめば、殺ってくれるかえ」

「それよりほかに、あっしのすることはございませんでね」

「よし、気に入った」

と、重八は大きくうなずいたが、黒谷の勘五郎の眼には疑惑の色が濃い。



「百両。そのまま、お前にわたそう」

「両国の元締が、百両ですかえ」

「百五十両」

「さあて……」

「よし、二百両出そうじゃねえか」

「半金は、今夜いただけますか？」

「いまは無え……こうっと、明後日の夜、また来てくれ、かならず、仕度しておこう」

「わかりました」

事もなく引きうけ、又蔵が北本所へ帰って来ると〔熊や〕の手前の暗がりから、

「待っていたぜ、又蔵どん」

声が、かかった。

見ると、羽沢の嘉兵衛の子分で、打上の仙太郎という男である。又蔵も三の松平十のそばについていたとき、三度ほど面識があった。

「ちょいと顔をかして下さい。うちの元締が、ぜひにもはなしてえことがありなさる」

「私に？」

「都合はどうだね？」

「よし。ちょいと待ってくれ」

又蔵は〔熊や〕へもどり、おみねに無事な顔を見せておいてから「すぐに帰る」といい、まっすぐに両国へ向った。仙太郎は先に帰っていた。

「よく来てくれたねえ」

料理茶屋〔河半〕の奥座敷の長火鉢の前で、うずくまっていた羽沢の嘉兵衛がしわだらけの猿のような顔をほころばせつつ、いきなり小判で三百両。ぽんと又蔵の前へおき、

「追分の重八を殺っておくれ」

と、いった。

「へい。よろしゅうございます」

「半金なぞと、しみったれたことはいわない。お前の腕ならきっと殺れるからね。三百両みんな持ってお行き」

「ありがとうございます」

「何日かかるかえ？」

「五日……と、お約束いたしましょう」

「よし。たのむよ」

間もなく、岩淵の又蔵は大川に沿った道を北本所へ向っていた。懐中に三百両の小判、重かった。

又蔵は、得体の知れぬ興奮をおぼえていた。このように血のさわぐのは何年ぶりのことだろう。



金でもない。殺人でもない。

羽沢の嘉兵衛に「追分の重八を殺ってくれ」と、たのまれたとき、突然、又蔵の胸底から衝きあげてきたものがあった。これは、それまでの又蔵が考えても見なかったことである。重八に嘉兵衛暗殺をたのまれたときは、

（二百両くれるなら、おれも稼業だ。引きうけてもいい）と考えたまでのことだが、同じ夜に、今度は嘉兵衛が、重八暗殺を何と三百両で依頼してきた。

（こいつ、おもしろくなりやあがった）

又蔵は、その瞬間に、

（このままでいても、どうせ長くはねえいのちだ。よし、ひとつ、おれが……）

三の松の縄張りをうばい取って、元締になって見るのも、

（おもしろいじゃあねえか）

なのである。

この稼業へ入ってからの約十年。まるで砂を噛むようなおもいで日を送ってきた又蔵に、このおもいつきはするどい刺激をあたえた。縄張りをうばい取って金をもうけようとか、家をもとうとか、女房子をもちたいとか、ぜいたくをしようとか……そうした欲望とは無縁のものである。

又蔵にとっては、勢力をあらそってさわぎまわる連中たちの鼻をあかして、自分が三の松の元締の座へおさまる過程に血がおどってきたのであった。

曇った、暗い夜の河岸道を、又蔵が駒留橋をわたり、石原町の角を右へ曲って行くのを見送っていた男がいる。

こやつ、船戸の権であった。

権は、駒留橋の橋下の闇に溶けて、又蔵が通るのをやりすごしたものである。とすれば、黒谷の勘五郎の指図で、彼は又蔵の行動を絶えずうかがっていた、と見てよい。むろん、又蔵が両国の元締によばれて行ったことも権は見とどけたのであろう。

又蔵を見送る権の双眸には、不可解な笑いがただよっていた。

## 五

〔熊や〕には、まだ灯がともっていたが、客はいなかった。

又蔵は、すぐに戸締りをさせ、熊吉老人とおみねをまねき、

「ここに二百両ある。爺つぁん。この金を持って、明日の朝早く、江戸を逃げてくんねえ。そうよ、さしずめ、池鯉鮒へ行き、死んだ元締のお内儀さんに身のふりかたをたのんで見ねえ。二百両ありゃぁ、どうにでもなる」

「又さん、お前……」

「おみね。何もきくな。こうしたほうが、またいつか、お前と一緒に暮せる割合が多いということよ」



こういってやると、おみねの顔が照りかがやいた。

又蔵が、二人を逸速く逃がそうとするのは、〔殺し〕を引きうけた、その保証に、二人を、ことにおみねを、黒幕の元締たちに誘拐されることをおそれたのである。

ここまで考えるからには又蔵、やはり何といっても、おみねに情がうつっていたものか……。

「爺つぁん、承知か？」

「おりゃ、いいぜ。どうして、逃げ出さなくちゃあならねえのか、きいたところで、こたえるようなお前さんじゃねえものよ」

「ふん……」

何か、必死におもいつめたような、おみねの烈しくたかぶる躰を抱いたあとで、又蔵はおみねを中二階の熊吉の小部屋へ寝に行かせ、段梯子を外してから、押入れの中にかくしてあった脇差を出し、これを枕もとにおき、床へ横たわった。

翌早朝。

まだ暗いうちに、熊吉とおみねは旅仕度もせず何気ない様子で家を出て行った。

つめたい秋の雨がけむっている。

「爺つぁん、たのむぜ」

「こういうことなら、すかすものじゃあねえ」

「おみね。達者でな」

「きっと池鯉鮒へ、来ておくれよ」
「うむ……」
二人が去ったあと、表の戸に〔きょうはやすみ〕と書いた紙をはりつけ、戸締りを仕直し、中二階へ上って、段梯子を引き上げてしまい、一日中、外へ出なかった。
灯もついてない〔熊や〕の戸をたたく常連の客の声もしたが、又蔵は返事もせぬ。
夜がふけたとき、熊やから又蔵が消えていた。
その翌々日。
まだ陽が高いうちに、又蔵は根津権現門前の〔正月や〕へ行った。半金の百両を受けとる約束の日であった。
すると、〔正月や〕の裏口から、旅仕度の船戸の権が出て来た。
「船戸の……どこへ？」
「箱根さ。芝の元締のところへ、追分の元締の手紙を持って行くのだよ」
「そいつは御苦労だねえ」
「なあに、明後日中には飛んで帰って来る」
船戸の権は、さっさと門前町の裏道を走って行った。
彼が箱根へ使者に立つのはめずらしいことではない。ここ数か月の間に、四度も彼が箱根へ行ったことを又蔵も知っている。船戸の権の足は速かった。



箱根・湯元に滞在している芝の治兵衛へ〔ごきげんうかがい〕のため、追分の重八が、またも〔権〕をさしむけたと見てよい。
それはつまり、又蔵の手によって反勢力の羽沢の嘉兵衛が、近く暗殺されることを予定していての〔きげんうかがい〕なのであろう。
（船戸の権が、今夜は江戸にいねえ）
又蔵は（しめた！）と思った。
〔正月や〕へ入って行くと、まだ勘五郎は帰っていない。追分の元締も夜になってから、
「おいでになるそうで」
と、若い者がいった。
「では待たせてもらおう。一本つけてくんねえな」
「へい」
外が暗くなって一刻（二時間）もしてから、一人ぼつねんと酒をのんでいる又蔵の前に、勘五郎と重八があらわれた。
二人とも、厭な顔をしている。
「又蔵どん、熊吉のじいさんとおみねは、どうしたね？」
と、重八元締がきいた。
「あの二人に何の用があるので？」

二人、立ったまま顔を見合せ、今度はだまって、又蔵をにらみ下している。

（ははあ、やっぱり……こいつら、おれをここへ呼びだしておき、熊やへ踏んごみ、爺つぁんとおみねを引っさらおうとしやがったのだな）

と、又蔵は感じた。

「又蔵どん……」

「え？」

「今夜は帰ってくれ」

「帰れ？」

「お前、一昨日のことを本気できいてたのか。本気で引きうけるつもりなのか？」

「元締。なればこそ、今夜こうして百両の半金を頂戴に来たのですぜ」

「お前……」

と、勘五郎がたまりかねたように口をさしはさんだ。

「お前。爺つぁんとおみねさんを逃がしたのか？」

「いいえ……」

「だが又蔵……」

「あの二人と、今度のことと、いってえどんなかかわりあいがあるので？」

また二人は沈黙した。



「何か御不審なら、お引きうけしねえでもいいのでございますよ、元締」

「む……」

「どうなさるので？」

「あ、明日。もう一度、ここへ来てくれ」

「と、いいますと？」

「今夜、百両、仕度できなかったのさ」

「さようで」

又蔵は立ち上り、さっさと〔正月や〕を出て来てしまった。

（へっ……あいつら、まだ、おれをうたがっていやがる。爺つぁんとおみねを逃がしたので、百両をただとりされるとおもっていやがるのだ）

どっちでもよい。

考えようによっては、彼らの危惧は的を得ていたといえよう。

又蔵は、もっと凄いことを、今夜から明日の朝までにやってのけるつもりであった。

## 六

夜がふけて……。

追分の重八が〔正月や〕を出て、巣鴨・追分の自宅への帰途についた。

駒込の富士前から左へ……松平家と藤堂家の宏大な下屋敷にはさまれた幅二間ほどの道を、元締めの重八の乗った駕籠の前後を五人の子分が護衛して、ひたひたとやって来る。と……。

右がわの藤堂屋敷の塀の上から、ばさっと、駕籠の前へ落ちて来たものがある。

「あっ……」

「な、なんだ……？」

子分たちが叫ぶのと同時に、落ちて来たものがふわりと立って白刃をふるった。

子分たちの持った提灯二つが切り飛ばされ、あたりは真暗闇……。

「なんだ、なんだ、どうした？」

駕籠からくびをつき出した追分の重八の怒鳴り声がきこえたとおもったら、その声が、

「きゃあっ……」

おそろしい悲鳴に変った。

「親分……」

「あっ……おい……」

子分たちが脇差を引きぬき、

「畜生！」

「ど、どいつだ！」



わめき合っているのを尻目に、岩淵の又蔵は闇を吹きぬける一陣の風のように、もう姿を消してしまっている。

武家屋敷の塀の上にかくれていて、警戒じゅうぶんな重八元締の頭上から殺到し、電光のような速さで目ざす相手を仕とめ、完全に逃げ終せた手ぎわというものは、さすがといえよう。

亡き三の松の平十が、あれだけ惚れこんでいただけのことはある。

重八元締を一瞬の間に殺された子分どもも、まさかこれが又蔵の仕わざとは思ってみなかったようだ。

この夜のうちに、また二人、殺られた。

〔正月や〕をわがものにし、三の松の縄張りを独占しようとしている黒谷の勘五郎が、妾のおもんと奥座敷でねむっているところを、二人とも殺害された。

いかに勘五郎でも、妾を抱いてねむるときは、次の間へ護衛をおくことをしない。さらに、絶えず勘五郎の身辺をまもっていた船戸の権も、箱根へ使いに出ていたのだ。

しかし、何人もの子分が〔正月や〕の屋内にねむっていたのだが、だれ一人、勘五郎たちの悲鳴も叫びもきいてはいない。

二人の死が発見されたのは翌朝のことで、勘五郎はふとんを頭からかぶせられ、その上から二突きに胸と腹をえぐられてい、妾おもんは絞殺されていた。

だが、夜があけぬ前に、もう少し、岩淵の又蔵の行動を追わねばなるまい。

重八元締と勘五郎とおもんの三人を殺した又蔵は、魔物のように、今度は本郷から両国へ走った。

辻番所や、自身番の木戸などは、又蔵にとって取るに足らぬ障害であった。

又蔵、息もつかさず、

（一夜のうちに、両国の元締、羽沢の嘉兵衛を殺ってしまおう）

という決意であった。

そうすれば、三の松の縄張りを争う二人の黒幕と一人の候補者が、この世のものでなくなる。

黒谷の勘五郎に対抗している鹿渡の島之助が、一人で孤立してしまうことになるのだが、なあに、羽沢の嘉兵衛の後押しあっての島之助であるから、又蔵にとって邪魔にもならぬ。

三の松の若い子分のほとんどは、前々から気前のよい又蔵になついている。

問題は、箱根にいる芝の治兵衛だが、

（いざとなれば……）

どんな方法でも、やってのけるつもりの又蔵であった。

ちらりと、道を走る又蔵の脳裡を、船戸の権の顔がかすめた。

（権め。行きどころがなくなってしまったじゃあねえか。よし、あいつを手なずけてしまおう。わけはねえ）

もう、又蔵は自信にあふれている。



（朝も近え。急がねえと……）

大川をわたり、回向院の門前をすぎて、堅川べりの料理茶屋〔河半〕の前まで来て、

（おや……？）

又蔵は目をみはった。

〔河半〕の前に提灯のあかりが飛び交い、多勢の人が出たり入ったりしている。異常な雰囲気であった。

「ど、どうしたんだ？」

又蔵は、羽沢身内の若い者が走って来るのをつかまえて訊いた。

「あ、又さん……」

「いってえ、このありさまは？」

「も、元締が殺られた……」

「何だと……」

「さっき、手洗に起きなすって……」

老人の嘉兵衛が奥の、専用便所へ入って、しゃがみこんだところ、いつ入って来たものか、その便所のせまい天井に貼りついていた曲者が、嘉兵衛の頭上へ飛び下り、刃物でたった一突き。

絶叫をあげて廊下へころがり出た嘉兵衛のまわりへ、子分たちが駈けあつまったとき、すでに刺客は、内側からあけた雨戸の外へ、庭から戸外へ……姿をくらましていたという。

「天、天井に、貼りついていやがった……」

と、これが七十二歳の嘉兵衛の最後のことばであったそうな。

「そりゃ、大変なことに……」

「じゃ、ごめんを……」

若い者は、どこかへ急変を知らせに行くらしく、ころげるように駈け去る。

又蔵は、身を返して〔河半〕から遠去かった。

(だ、だれが殺りゃぁがったか……?)

こうなると、うっかり〔河半〕へ近寄れない。

場所もかたちもちがうけれど、嘉兵衛を殺った男も頭の上からねらいをつけていた。

頭上は人間の盲点である。

そのことを知りつくし、これをせまい屋内の、しかも、便所の中で実行にうつしたという刺客は、又蔵におとらぬ凄い男だ。

(だ、だれが、いってえ……?)

自分が殺すつもりだった嘉兵衛が、別人に殺害されていたのは手がはぶけていいようなものだが……。

場合が場合だけに、又蔵は不安になった。いつの間にか〔熊や〕の前へ、又蔵はもどっている。

戸じまりは、出たときのままであった。



裏手へまわる。

ここの戸は開けてある。中には盗られて困るようなものは何一つない。

がらり、戸を開けて裏口へ入った岩淵の又蔵の頭上から、一抱えもあるような石のかたまりが落ちて来た。

「あ……」

声が出たか出ぬかのうちに、石塊を頭にうけ、又蔵は昏倒してしまっている。

梁の上から黒い形が飛び下り、短刀を又蔵の心臓へ突きこんだ。

又蔵がびくりとし、それきり、もうぅごかなくなってしまった。

「ざまあ見やがれ」

その刺客はつぶやき、戸外へ出、どこかへ去った。

その声を、又蔵がきいたらどんな顔をしたろう。

それは、箱根へ行った筈の〔船戸の権〕の声そのものであった。

その翌々日の夜……。

箱根・湯元の宿〔福住〕の奥座敷に滞在している江戸の客……芝の治兵衛をたずね、江戸から到着したばかりの男がいる。

船戸の権であった。

権が、温泉をつかって汗と埃をながし、治兵衛の部屋へあらわれると、早くも酒の仕度がととのえられてい、

「権さんや。いやどうも、御苦労だったね。さ、ここへおすわり。一緒に飲ろうじゃないかえ」

白髪あたまも品がよく、とても香具師の元締とはおもえぬ、どこかの豪商の〔御いんきょ〕のような治兵衛が、やさしい声で、

「それにしても、よくやっておくんなすったね」

「へい。ほかならねえ大元締のおさそいをうけたからには、わっしも出来るだけのことを……」

「いや、ありがとうよ。箱根へ使者に立つと見せかけ、又蔵に三人を殺す隙をあたえておいて、お前さんは両国の〔河半〕へしのびこみ、夜ふけを待ち、手洗にやってきた羽沢のじじいを殺っつけ、そうしてまた、又蔵まで片づけておくんなすった。さ、これは少いが約束の二百両だ」

「こいつはどうも、おそれいりやす」

「さ、とっておおき。さ、遠慮なしに……」

「へい。では……ありがたく頂戴を……」

小判の入った重い胴巻をふところへ入れながら、

「大元締。これで、めでたく、三の松の縄張りは、お前さまの手に……」



「うむ。みんなが、どこのだれとも知れぬやつの手にかかってばたばた死んじまったのでは、どうしてもこりゃあ、この私が乗り出さなくてはなりますまいよ」

「へい、へい」

「ま、なんだね、さしずめ、三の松の縄張りのうち、本郷のほうは私が後見となり、むすめ聟の勝次郎を元締にさせよう」

「で、下谷の縄張りは？」

「そりゃあ、権さん。お前さんのものだよ」

「えっ……」

「これだけの手がらをたてておくんなすったのだもの。それ位はしてさしあげたいねえ」

「ほ、ほんとうなので？」

「いうまでもない」

「大元締。ありがとうございます。ありがとうございます」

「さ、ゆっくり二人で飲みましょう」

「へい、もったいのうございます」

「付きそいの若い者も寝ちまったようだ。さし向いで、ゆっくり、お祝いをしようじゃないか」

と、芝の治兵衛は、火鉢の銅壺に入っていた酒の徳利を出し、

「さ、おあがり。お酌しよう。ま、いいやな。さ、さあ……」
「へい。では……」
恐縮の態で、船戸の権が出す盃へ、
「かけつけ三杯というよ」
たてつづけに酌をしてやり、
「あ……ちょいと手洗に行って来る。ゆっくり飲っていておくれ」
いい置いて、芝の治兵衛がすいと部屋を出て行った。
（……？）
船戸の権はくびをかしげた。
そこは、殺し屋である。
今度は、自分が酌をする隙をあたえず、あっ……という間に部屋から姿を消した治兵衛の態度を、
（妙だな……？）
と、直感したのである。
盃を膳に置き、おもわず片ひざを立てようとしたが、ぐにゃりとひざが折れてしまい、なぜかちからが入らない。
（おや……？）



くちびるのあたりが、しびれてきている。
（あっ……毒を……）
ぎょっとした。
立とうとして、船戸の権は尻もちをついた。
「ち、畜生……」
あたまの中が、ぼーっとかすみ、同時に、腹から胸へかけて激烈な痛みが襲いかかった。
（おれとしたことが……ふ、船戸の権としたことが……畜生……治兵衛め、やりやあがったな……）
そのとき、障子の外で、芝の治兵衛の、やさしげな声がした。
「権さん。御苦労さま」
「や、野郎……」
「芝の治兵衛に太刀うちは出来なかったねえ」
「あ……う、うう……」
治兵衛の子分ふたりが、部屋へ入って来て、棍棒をふるった。
船戸の権は、それっきりになった。
芝の治兵衛が障子を開け、子分ふたりにいった。
「その裏の林の中へ、こいつを深く埋めておしまい。なに宿の者は気がつくまい。明日の朝早

く、江戸へ帰ったといっておくさ。私も、明日は帰るよ。もともと病気でもないのに、ずいぶん長い湯治をしたものだ。そのかわり、江戸へ帰ってからはいそがしくなるねえ。三の松の縄張りをととのえるまでは、さ」



# 罪

## 一

その日——。

おきんは、下谷・新黒門町にある〔東玉庵〕という蕎麦屋へ、鎌吉を呼びだした。

この店は、飯田町の東玉庵の支店で、二階には静かな小部屋が二つ三つあり、密談をするには格好のところである。

「殺っておくれな」

と、おきんが決意をもらすのへ、

「そうか……心がきまったかい」

鎌吉はこともなげに、髭あとの濃い頬を指でなでてから、

「百両だぜ」

念を押した。

「わかっているよ」

いつもは、たっぷりと量感のあるおきんの躰が、この日ばかりは細くみえたし、唇の色もさえ

なかった。さすがに緊張しているものとみえる。

（もう駄目だ。鎌さんにたのんでしまったんだもの……もう後へは退けやしない）

そう思うと、いくらか気が落ちついてきて、

「もっと、飲っておくれな」

おきんは、手をならして小女をよび、また酒を注文した。

酒が来てから、鎌吉がいった。

「亭主殺しをしようというお前のことだから、万事にぬかりはあるめえが……家に帰っても、そんなに青い顔で、きょときょとと落ちつかねえ目つきをしていたのじゃ、怪しまれるぜ。殺すのはおれがやるのだ、お前は、今からもう、おれに亭主殺しをたのんだことを、忘れちまうこった」

にやりとして、

「そのかわり百両。こいつは忘れちゃいけねえ」

「わ、わかっていますよ……」

鎌吉のおそろしさは、おきんも身にしみて知っている。

二年ほど前まで、おきんは赤坂・田町の桐畑近くに密集する娼家で客をとっていた。

この私娼窟を、俗に〔麦めし〕という。

むかし、このあたりの茶屋で客に麦めしを食べさせ、茶汲み女をおいていたところから、その名が残っているのだ。

江戸城の外濠にも近いことだし、あたりには武家屋敷も多く、江戸の岡場所の中でも、比較的に高級？な場所とされていた。

おきんのいた店は〔赤大黒〕という店で、主人は甚七といい、このあたりを束ねる顔役であった。

赤大黒の甚七は単に娼家の主人というものだけではなく、江戸の暗黒街にも羽ぶりのきいた男で、桐畑一帯の利権をつかみとり、夜の世界では多種多様なことがらにかかわり合いをもっている。

鎌吉は三十がらみの遊び人で、何の用があるのかしらないが、甚七のところへは、よくきていた。

身なりもよく、金ばなれもたいしたもので、おきんも鎌吉に抱かれたことが三度ほどはあったろうか。

「鎌さんにお金さえ出せば、だれにもわからないうちに人を殺してくれるんだそうだよ」

と、朋輩のお仲という年増が、おきんに、そっときかせてくれたことがある。

「うちの親方のところへ来るのも、親方が、いろいろとむずかしいことをたのみなさるからなのさ」

「人殺しを……？」

「いろいろとねえ……殺してもらいたいやつを親方にたのみにくる、大金をつんでね、その金の半分を親方がとって、あとの半分を鎌さんにやると、鎌さんが出かけていって殺してくるのさ」

「まあ……」

どこかの武家屋敷からの依頼もあるということなのだが、どこまでがほんとうなのか、警吏にさえもしっぽをつかまれない鎌吉のことだから、おきんたちは、そうした「うわさ」だけを耳にするだけのことである。

そういえば、鎌吉の肌は、いつも、冷んやりとしており、抱かれていても気味がわるかった。

まもなく、おきんは老人の客に気にいられて店をひくことになった。

その老人は、下谷・広徳寺門前で大きな料理屋をしている玉屋平兵衛というもので、

「女房にするよ。私はお前が気にいったのでね」

五十両近い金を赤大黒の甚七へ払い、おきんを引き取ったものである。金があるとみて赤大黒は、またひどく吹っかけたものだが、平兵衛はあっさりと金を出した。

こういうわけで、おきんは玉屋平兵衛の女房になったのだ。

なにしろ、部屋数も十はあり、板前や女中たちを合わせ二十人近い使用人を抱えた大きな料理屋である。

平兵衛は、おきんを入れるとき、



「わしが在所からつれてきたのだ」

と、奉公人たちへはいった。

おきんにとっては、夢を見るような思いである。

脂ぎった平兵衛の、五十六歳にはとても思えぬ執拗な愛撫さえがまんをすれば、あとはもう自由であった。いい着物を着て、うまいものを食べて、女中にかしずかれて、小遣いもたっぷりもらって……それに平兵衛には妻も子もいない。平兵衛が死んだ後には、玉屋の身代が、そっくり、おきんのふところへころげこむというわけなのだ。

おきんは利巧な女であった。

かげでは奉公人も何といっているかしれたものではないが、おきんは、あまり店先へは出ていかず奥へ引きこもり、平兵衛の世話をやくことに当分は神経を集中した。

泥水にもあまりつかっていなかったし、両親を失うまでのおきんは、旅籠町の煙草問屋の一人娘であった。

十六のときに家が火事になり、両親は焼死し、そのとき、親類の家へ泊まりがけで遊びにいっていたおきんは、命拾いをした。

おきんが娼婦になったのは十八の年だが、その間の二年間に、彼女が、どんな不幸な目に落ちこんでいったかは、ここにのべるまでもあるまい。

「わしも若いころから身よりのない男でねえ。いまになって、やっとお前という女房がもてた

わけだし、この上は、お前に死水をとってもらいさえすりゃア、もう思い残すことは何一つありゃアしないのだよ」

などといいながら、平兵衛はなかなかに精力的であった。庖丁こそ手にしないが、一日中、店へ出て忙しく采配をふるっているし、蔵前あたりの富商たちともつきあいが深いらしい。

それでいて、毎夜のようにおきんを求めるのである。

あぶらにぬれたガマのような、みにくい平兵衛の顔であり躰であった。

抱かれると、客商売になれたはずのおきんの躰が寒気だつほど、玉屋平兵衛は、醜悪な容貌をしていた。

といっても、それは、おきんの主観が、たぶんにはいっていたからだろう。

おきんには、桐畑の店にいたころからの恋人があった。

これも地まわりの遊び人だが、音吉といっておきんより二つ年上の、色の白い、見るからにいなせなやつで、おきんはもう夢中になり、音吉へは、無理をしてずいぶんと貢いでやったものだ。

「きっと、そのうちに知らせるからね」

と、おきんは玉屋へ引き取られるときに、音吉へいった。

「待ってるよ。忘れやがったら、おいらが玉屋へ乗りこむぜ」

音吉は凄味をきかせて答えた。

玉屋の女房になってから半年めに、おきんは音吉に会った。



両国橋西詰の船宿へ、音吉をよび出したのである。

「私ゃ、お前が、いつ乗りこんでくるかと、そればかりが気にかかって、夜もおちおち眠れなかったよ」

おきんは、音吉のしなやかな頸に両腕を巻きつけ、唇を飽くことなく吸いつづけながら、

「よく、がまんしておくれだったねえ」

「これからは、ちょいちょい会えるね？」

「あい……」

「それなら、かんべんしてやらあ」

それから忍び合うたびに、おきんは二両、三両と、音吉へ小遣いをやった。

一年たった。

そのころになると、おきんも、

（いつまで、こんなことをしているわけにはいかない）

と、思いはじめた。

平兵衛は気づかぬようだが、音吉へやる小遣いだけでも引き出すのにはたいへんな苦労がいる。

「お前にまかせるよ」

と、平兵衛が店の会計から家計のいっさいまで、このごろはおきんにまかせてくれるようになったし、奉公人たちも、おきんの巧みな懐柔によって、

「おかみさん、おかみさん……」
と、下へもおかぬようになってきている。
ここまでもってくるには、おきんも非常な努力を払ってきていた。
それだけに、店の帳場へすわることも多く、音吉と会うことも思うようにならない。
少しでも会う日が延びると、
「こうなったら、玉屋へ乗りこむぜ」
音吉は息まく。
やがて……。
「いっそのこと……」
と、いうことになった。
「なあに、鎌吉さんに持ちかけてみねえ。きっと引きうけてくれるさ」
と、音吉が目を光らせ、
「お前の亭主さえ殺してしまえば、玉屋の身代は、おいらとお前のもんだ」
釘を打ちこむようにいった。
なんどか迷ったあげく、おきんは、鎌吉を東玉庵へ呼び出したのである。
すべてをきいてから、
「百両もらったからには、おれも、このことは忘れる。お前は心配しねえでもいい。後になって、ゆすりにかけるようなことは決してしやあしねえ。これは、おれの商売なんだからね」
鎌吉は、しずかにいった。
「おきんさん、お前の亭主は、ひと月たたねえうちに、あの世へいっているだろうよ」

## 二

玉屋平兵衛は、
（これで、どうやら、わしの運命もきまったようだなあ……）
このごろは、つくづくと、そう思うようになってきていた。
料理屋仲間の吉右衛門という男に、
「おもしろいところだ。そっと行ってみませんかね」
と誘われ、桐畑の娼家へはじめて行き、そこで、おきんという女を見つけ出した。
平兵衛は、はじめのうち、おきんの豊満な肉体に心をひかれた。江戸の女らしい浅黒い肌なのだが、むっちりと脂肪がのっていたし、いかにも抱きごたえのある躰であった。
数度、通った上で、
（家へ入れてみよう。わしには、こういう境遇の女がよいかもしれぬ）
と、平兵衛は思いついた。
べつだん、五十をこえた自分が、いまさらに女房を持つことなど、考えてもみなかったことな

のだが、大きな料亭を経営し、交際も多くなったこのごろでは、五十男の独身なぞ、あまり自慢にはならない。

それに、おきんがおとなしやかに平兵衛を取りもちしたものだから、

（育ちも、きいてみれば悪くないし……ともかく家へいれて、様子をみよう）

平兵衛も決意したのだ。

おきんは、玉屋へきて女房となってからも、相変わらずまめまめしく世話をやいてくれるし、商売のほうへロを入れることもなく、ひっそりと暮らしつづけている。

半年たつうちに、奉公人たちも、

（いいおかみさんだ）

と、うわさするようになった。

それを十分に知って、平兵衛は、はじめて家の金をおきんの手へまかせることにした。

だからといって、おきんはつけ上がる様子もみせない。

月に三度ほど、外出するのも、深川の富岡八幡宮へ参詣に行くことくらいなもので、そのときも、

「お店が忙しいのだから……」

といい、女中も連れずに出かけて行くほどなのである。

（もう十年……わしは生きていられるかなあ）



平兵衛は、ふっと思うことがある。

おきんがきてからは、妙に若返ったような気分になり、三日にいちどは、おきんを抱かなくてはおさまらぬほどで、しかも商売には身がはいるし、

「玉屋さん。ほどほどにしないと、若いおかみさんに精を吸いとられ、ころされてしまいますよ」

なぞと、仲間の人たちにもからかわれるほどであった。

「いいとも、いつ死んでも――」

平兵衛は、そう考える。

本来ならば、すでにない命なのだ。

三十年ほど前の玉屋平兵衛は、松山宗之助といって、但馬・出石五万八千石・仙石讃岐守の家来であった。

家来といっても徒士組で二十石三人扶持という下級武士である。

そのころ、父母を失っていた平兵衛は、老いた下男の又七と二人きりの暮しであった。

貧しくて単調だが、まず、平兵衛は落ちついた毎日を送っていたのだ。

それなのに、平兵衛は取り返しのつかぬことをした。

上役の小野伝十郎を斬ってしまったのである。

原因はつまらぬことからである。

非番の日に小野の屋敷でひらかれた将棋の会で、平兵衛と伝十郎が五番勝負をやり、平兵衛が勝った。

そのとき、伝十郎が唇もとをゆがめ、

「こうも汚ない指し方をされては、勝とう気も起こらぬわい」

とつぶやいたのが、喧嘩のはじまりとなった。

平兵衛も若かった。

口論の果てに、いきなり抜き打って小野伝十郎を斬り倒し、そのまま庭へ飛び降りると、平兵衛は夢中で逃げた。わが家へももどらず、そのままいっさんに出石城下を脱出したのである。

斬られた小野伝十郎には、兵馬という子がいる。

当時十歳であったが、いずれ成長の上は、平兵衛を父のかたきとしてさがしまわるに違いない。かたきを討たねば、父の跡をつぐわけにはいかないのが武家の掟である。

兵馬のほかに、他家へ養子にいった伝十郎の弟（兵馬の叔父）が二人もいる。

この弟たちが少年の兵馬をつれてかたき討ちの旅に出ることも考えられる。

出石を逃げだしてから十年ほどの間、平兵衛は、一夜も手足を伸ばして眠らなかった。

かたき討ちというものは、討たれるほうにも討つほうにも悲惨なものだ。

一年のうちにかたきにめぐり合えることもあれば、一生かかってついにさがし当てることができず、そのうちにかたきのほうが病死してしまい、一生家名をたてることができなかった例もあ



る。

また、たとえめぐりあえたとしても、かたきのほうの腕が強くて、返り討ちになることもある。

何といっても封建の世のことなのだ。

日本諸国は、それぞれに違った大名によっておさめられ、それぞれに制度も違うし、人を討って他国へ逃げてしまえば、これを罰することができない。

かたき討ちの制度は、これをおぎなうべくもうけられたものだが、別に法令化されていたわけではなく、武家の常識として厳守されたものである。

だから、人を殺せば、その場において自分も自決をするのが、もっとも正しい武士の心得であった。なぜなら人殺しは犯罪であるからだ。

だが、武士も人間である。なかなか、そこまではやってのけられない。

見えぬ相手の追跡を逃げまわりながら、平兵衛も、いまにも死ぬほどの恐怖にさいなまれつつ、なお、生きたいと願った。

十年から、二十年たった。

二十五年め、江戸へあらわれた平兵衛は、もはや身も心も松山宗之助ではなくなっていた。

下谷・広徳寺近くで、平兵衛は仏具商をはじめたのである。

一年して、料理屋の玉屋が何かの事情で売りに出た。

平兵衛は近所のことでもあるし、すぐに耳へはいったので、
「私が買いましょう」
と、奉公人ぐるみ玉屋を買い取ったのである。
近所の人々は、一仏具商にすぎぬ男の決断におどろいたし、それ以上に、意外に平兵衛が大金をもっていたことに瞠目した。
「なに……先年に故郷の山や田畑を売ったものですから――」
平兵衛はそんなことをいい、玉屋の主人におさまると、たちまち景気を盛り返した。
ふまじめな奉公人をやめさせ、腕のいい板前を入れ、平兵衛もやかましく指図して、
「玉屋の料理は見違えるようになった」
「座敷も直したし、女中たちも愛嬌のいいのをそろえたし、まったく気分が変わってしまいましたよ」
などと評判もたち、一年たつうちに、商人仲間の寄り合いもふえるし、平兵衛にとっては笑いがとまらぬほどの景気になってしまったのである。
(もう大丈夫だ)
平兵衛も、ようやく手足を心ゆくまで伸ばし安眠できるようになった。
なにしろ、三十年もみつからなかったのだ。
自分をかたきとねらう小野兵馬にしても四十歳になっているはずだし、もちろん、こちらの顔



を見おぼえているわけではない。
三十年前の平兵衛を知っている仙石家の侍たちの半数は、すでにこの世の人ではあるまい。
鏡を見て、平兵衛は、
(いまのわしには、若いころのおもかげはまったくないなあ)
満足げに、なんどもうなずく。
そこへ、若い女房を思いがけずにもらうことになったのである。
おきんとの生活が足かけ二年つづいたとき、
(この女に死水をとってもらおう)
と、平兵衛が、わが人生の最後に腰を落ちつけたとしても、無理はないといえよう。
江戸へ出てくるまでの二十五年間――平兵衛は、どんなところで何をして、大金をためこんだのであろう。
後でそのことについては、またのべることにして……。
平兵衛は、若い女房が恐ろしい奴にたのんで自分を殺そうとしている、などということは、むろん夢にも思ってはいなかった。
彼は、ただひたすらに若い女房におぼれつくし、酒も煙草もやらず、月にいちど、同好者たちが集まってひらかれる将棋の会に出るのを、なによりのたのしみにしている。
好きな将棋をさしはじめたのは、ここ一、二年のことであった。

将棋をさすことによって、むかしの苦い思い出がよみがえるので、平兵衛は、三十年近くも将棋の駒を手にしたことはない。

それが、また将棋をたのしむようになった。

いまの平兵衛は、それだけ別の人間になってしまっていたのであろう。

## 二

「ひと月のうちに、お前の亭主はあの世へいっているぜ」

と、約束してくれた殺し屋の鎌吉なのだが、夏がすぎ、秋がきても、玉屋平兵衛の身には何の変わりもなかった。

おきんは、暑い夏の間も、平兵衛が外出するたびに、今日か明日かと思い、気もそぞろで、めっきりやせてしまったほどだ。

「どうも、とんでもねえことになった」

久しぶりで両国橋の船宿へ音吉を呼び出したおきんへ、

「鎌さんは病みついてるぜ」

音吉は顔をしかめ、

「なんでも鎌さんが、愛宕下の円福寺という寺の前を通りかかり、道ばたで寝ころんでいやがった野良犬の尻尾を踏みつけたら、いきなり噛みついてきやがって、鎌さんの股のあたりを、がっぷりと……」



「まあ……」

「鎌さんともあろうものが、つまらねえ目にあったもんだ」

「そんなに、ひどいのかえ？」

「よくねえらしい。噛みついた犬は、その場でたたき殺したらしいが……どういうわけか、噛まれた傷口がひどく腫れあがり、このごろじゃ命も危ねえとかきいている」

「まあ……」

おどろきながらも、おきんはなぜか、ほっとする思いだった。

鎌吉は、いま赤大黒の家にやっかいになっているらしいが、見舞いにいった音吉へ、

「おれはもう駄目だが……」

どす黒く隈のういた目を白く光らせながら、

「犬に噛まれたのが、こんなになるとは思わなかったぜ、どうやら医者もみはなしているらしい」

すっかりあきらめきった口調で、

「おれも、ことしで三十五だが……いやもう、疲れてしまった。おれの商売は命がけだったからなあ……このへんが潮どきだろうよ」

と、いう。

「冗談いっちゃあ困る。玉屋の主人のことは、どうなるんだ。うまくいけば百両だぜ」
音吉が元気づけようとすると、
「いや、いけねえ……おきんちゃんによろしくな」
「そ、そんなお前……困るなあ……」
「いいってことよ。おれのかわりに、いい人を教えてやる。おれからきいたといってたのんでみねえ。きっとひきうけてくれるだろう」
「そ、そんなやつがいるのかい？」
「腕は、おれよりたしかなものだ」
「ほんとうかい？」
「うむ……それによ、その人にたのむなら百両はいらねえ。まあ五十両もやれば引きうけてくれるよ」
「たしかな人かい？」
「ふん。この鎌吉のいうことだ。心配にゃおよばねえよ」
鎌吉が死んでしまったら、その男に玉屋殺しをたのむのだと、音吉はおきんにいった。
生ぬるい川風が吹きこんでくる昼下がりの座敷で、おきんはまた躰中が冷たい汗にぬれた。
「どうしても殺さなきゃあ、いけないのかしら？」
「だってお前——そうしなきゃあ、お前とおれとは、いつまでも一緒にはなれねえぜ」



「そうだねえ……」
「亭主は、相変らず、しつこいことをしやがるのか？」
「知らないよ」
「畜生メ。いてもたってもいられねえ気持ちだよ」
「ねえ、音さん」
「何だ？」
「お前さん、私と一緒になったら、きっと堅気になっておくれだね？」
「なるよ」
「それなら、このまま逃げておくれな」
「バカいっちゃあいけねえ、せっかくお前、宝の山が目の前に……」
「いやな奴でも亭主は亭主だもの。それを殺すなんて……」
「怖くなったか？」
「女だもの」
「心配するな。わかりっこねえや。玉屋が死んだら店をたたみ、金を抱えて、しばらくは深川あたりでひっそりと暮らし、それからお前、何の店でもいいから、どこかへ張り出そうじゃねえか」
音吉は、あくまでも明るくことをなげにいってのけるのだ。

老人くさい平兵衛のたるんだ肌身とは違って、若い音吉の腕に抱きしめられると、おきんも、
（せっかくここまで持ってきたんだから……）
と、いう気持ちになった。
「でも、できることなら鎌吉さんにやってもらいたいねえ」
「まあ、いいから、おいらにまかせておきねえ」
十日ほどして、おきんはまた船宿で音吉に会った。
例のごとく、深川八幡の参詣のためといって店を出てきたのだ。
「死んだよ、とうとう……」
と、音吉がいった。
「だから、たのんできた」
「その人に……？」
「うん。鎌さんからきいたというと、一も二もなく引き受けてくれたよ」
「どんな人？」
「浪人さんさ」

四

その浪人は、本所・柳島の田圃（たんぼ）の中にある不動院という小さな寺の物置のようなところを借りて住んでいたという。
背の高い、骨張った躰つきの中年男で、額のあたりがすっかりはげあがっており、見るからにたよりなくて、
（こんなやつに斬れるのかな……？）
と、音吉も首をひねった。
すると、浪人は、
「ちょいと見ていろ」
外へ音吉を連れ出し、
「そこの棒切れを上へ投げてみろ」
と、命じた。
「へえ……」
いわれるままに、落ちていた四尺ほどの棒切れを、音吉が拾いあげて宙へほうると、
「むッ！」
うなり声のような気合いと共に、浪人の大刀が鞘（さや）を走った。
「ぴかっと光ったと思ったとたんに、もうお前、ぱちんと鞘へおさまっていやがるんだ。その早業にもびっくりしたが、何とお前、ほうり上げた棒が四つに切れて落ちてきやがった……」
音吉は息をつめて、おきんにささやいたものだ。

「こいつは、鎌さんより、たしかに上手だぜ」
「でも、大丈夫かしら？」
「大丈夫だともよ。約束の五十両をもらったら、その日のうちに旅へ出るといっていたっけ」
決行の日は、翌月の七日にきまった。
毎月七日、将棋の会がある。
月ごとに場所を替え、好きなもの同士が集まるのであった。
来月の七日は、三ノ輪の〔いさご〕という寿司屋の二階が会場にあてられていることを、おきんも知っていた。
その前日に半金の二十五両、平兵衛が首尾よく殺されてから残りの二十五両をわたす、という約束だそうな。
おきんは、またやせはじめた。
平兵衛がいった。
「お前、からだのぐあいでも悪いのじゃないか。医者にみせたらいい」
「いいえ、大丈夫なんです」
「物忘れはするし、何か落ちつかぬようだし……」
「女には、ちょくちょく、こんなことがあるものなんですよ」
「そうかねえ」



さすがに平兵衛も気になったとみえ、
「もう少したったら、お前を連れて熱海へでも湯治にいってもいいな」
などといい出し、夜になっても、
「ひとりで、ゆっくりとやすんだほうがよい」
おきんを一人で寝かせてくれるようになった。
おきんは、何ともいいようのない不安と期待でわくわくしながら、くるべきその日を待った。
寛政八年（西暦一七九六年）九月七日の昼前に、玉屋平兵衛は、いそいそと将棋の会へ出かけていった。
その前日――。
おきんは、広徳寺門内に待っていた音吉へ二十五両をわたした。
いま帳場をあずかっているおきんだけに、金を引き出すのはわけもないことだが、十日にいちどは、平兵衛がたんねんに帳面と店の金をしらべる。
もしも、その浪人が二十五両を持ち逃げしたりしたら、たいへんなことになるのだ。
昼すぎまでは店に出ていたおきんも、
「頭が痛くてかなわないから、夕方までやすませてもらうよ」
あとは古い女中のおかやにたのみ、奥へひきこもってしまった。
その日――。

玉屋平兵衛が、三ノ輪の〔いさご寿司〕を出たのは七ツ半（午後五時）ごろであった。
その日の将棋の会では、四番やって、四番勝っただけに、平兵衛は上機嫌で最後まで残り、外へ出て将棋仲間に、
「ちょいと寄り道をしてゆきますので」
と別れ、金杉下町と三ノ輪の境の道を左へ切れ込んでいった。
この道をまっすぐに突き当たったところが竜泉寺だが、その門前にある小さな花屋の主人で弥五郎というのが、平兵衛の昔なじみである。
腰も曲がり七十をこえた老人なのだが、一人きりで花屋をしているこの弥五郎は、玉屋の店へも、三月にいちどはたずねてきて、平兵衛と世間話をしていく。
いかにも好々爺といった風貌だし、平兵衛も、
「弥五郎とっつぁんには、むかし私が世話になっているのだから、粗末にしてもらっては困るよ」
かねがね、店の者へもいいつけてあるほどであった。
近くへきたついでに、この弥五郎をたずねるつもりで、平兵衛は竜泉寺へ向かったのだ。
夕闇が濃くなっている。
両側は田圃で、ところどころに寺や武家の下屋敷があった。
道の草むらに虫が鳴き出していて、人影はほとんどない。



平兵衛は、立ち止まって用意の提灯に灯をいれた。
このとき、うしろへ人影がさした。
いうまでもなく、おきんと音吉がたのんだ人殺しの浪人者である。
「む!!」
例の、うなるような気合いと共に、浪人の腰から、ピカッと光って平兵衛の背へ刃が走った。
まことに手なれたものである。
音も気配もなく、すぐうしろまで迫ってきたぐあいといい、間合いをはかりざま抜き打ちに斬り倒しておいて、そのまま、すたすたと前へ歩いてゆき、夕闇の中へとけこんでしまうというやり口が、こんども間違いなく成功するつもりの浪人者であったが、
「あっ……」
叫び声をあげ、玉屋平兵衛は、躍り上がるようにして右手の田圃の中に飛びこんだ。
「こいつ!!」
浪人も、おどろいたらしい。
浪人の抜き打ちも早業なら、平兵衛の身のかわし方も早い。
もとは武士であっても、すさまじい浪人の手練には、とてもたちうちはできぬ平兵衛であったはずだ。
舌打ちをならして、浪人が田圃へ飛びこみ、

「えい」
すくい上げるように切りつけてきた。これも空を切った。
「あっ……」
浪人は、呆然とした。
平兵衛は田圃の中をぴょんぴょんとウサギが跳ねるように飛び上がりながら、たちまち、手がとどかぬところまで逃げてしまっている。
「早いやつだ……」
刀を鞘におさめ、浪人が、
「この次は逃がさん」
と、つぶやいた。が、
「あいつ、ただ者じゃない……」
田圃の向こうの戸田采女正下屋敷のへいの蔭へ見えなくなってしまった平兵衛の黒い影をいつまでも見送っていた。
この夜、玉屋平兵衛は、ついに広徳寺門前のわが家へはもどらなかった。
夜ふけになって、竜泉寺の花屋の弥五郎の裏口の戸をたたくものがある。
「おれだよ、とっつぁん……」
はいってきたのは平兵衛である。



げっそりと頬がこけて、目がつり上がっていた。
尻を端折った素足に草履がけで、菅笠までかぶっているのを見て、
「いけねえようだな平兵衛どん」
弥五郎老人がうなずき、
「それにしても、そのまっ青な顔つきはどうしたのだ。むかしは、このおれと二人で手を組み、十人もの手下をつかって尾張、三河から美濃あたりまで手当たりしだいに荒しまわった大泥棒の平兵衛どんが、そんなにあわてては、おかしいではないかよ」
と、いった。
「ち、違う」
平兵衛は手をふり、つばをのみこみ、
「むかしのことがばれたのじゃねえよ、とっつぁん……」
「え？」
「ついにあらわれたよ」
「何が……」
「小野伝十郎のせがれだ」
「え――お前さんをかたきとねらう？」
「うむ」

「そうかあ」
「夕方、三ノ輪の田圃で、いきなり斬りつけてきやがった」
「たしかに、間違いはねえのだな？」
「むろん、小野のせがれはあのとき十歳の子供だったし、顔に見おぼえはねえのだが、しかし……それでなくって、浪人者がおれを待ちかまえて斬りつけるわけがねえ。夕闇の中でしかとはわからねえが、年格好も、ちょうど同じだ」
「ふうむ……」
平兵衛は、小きざみに両足をふるわせていた。
「こうなったら家へもどらず、逃げなくてはならねえ」
「だが、平兵衛どん……」
「とっつぁんは、かたき持ちのおそろしさを知らねえからな……それに、あの小野のせがれは、たいした腕前になったものだ。こんど出合ったら、とても逃げられたものじゃねえ」
「ふうん……」
「ついてはだ、たのみがある」
「いってみねえ」
「おれは、このまま熱海へ逃げる。熱海の角兵衛の湯にかくれているから、そっと、おきんにつたえてくれぬか、店の有り金を残らず持ち、後から熱海へくるようにとな。ついでのことに、とっつぁんがいっしょについてきてくれると、なお安心だ」
「あれだけ繁昌した店を捨てるつもりかえ？」
「しかたがねえわさ。もう大丈夫だと思っていたが、かたき討ちの執念というものはおそろしい。もっとも、こいつは、侍でなくてはわからねえことだが……」

## 五

花屋の弥五郎が、おきんを連れ出し、江戸をたったのは三日後の朝であった。
弥五郎のことだから、うまくいいくるめたつもりであったが、おきんはおきんで、ひそかに音吉へ、このことを告げたものだ。
先へ行く弥五郎とおきんの後から、音吉が人殺しの浪人と共に追って行った。
花屋の弥五郎が、その浪人に斬り殺されたのは、小田原から熱海に向かう山道においてである。
弥五郎の死体は崖の上から蹴落としてしまい、
「さて、残るのは玉屋の亭主だな」
と、浪人がいった。
「たしか、角兵衛の湯という宿にいるときいたが……」
「あい……」
人殺しをはじめて見て、がくがくとふるえているおきんに、浪人が、

「もうよい。ここから帰んなさい」
「え……」
「あとは引き受けた。おれがこんどは間違いなくやってのける」
音吉が、おきんの肩を抱き、
「たのんましたよ」
「うむ。あの玉屋平兵衛というやつ、ちょいとおもしろい。このおれの初太刀も二の太刀も逃げぬいたやつだ。やりがいがある」
「へえ……」
「よし。行け」
「じゃ、お願い申しましたぜ」
「残りの二十五両、おれもほしいからな」
「待っておりやす」
音吉とおきんは、そこから江戸へもどっていった。
彼を見送ってから、浪人は草の上へ腰をおろし、竹の水筒へ入れてきた冷や酒を、うまそうにのんだ。
一点の雲もない秋晴れの空をながめながら、この浪人——酒巻重八は、
(玉屋を殺してからも、おれはお前たちから離れぬことにしたぞ)



おきんと音吉に、胸の中で呼びかけている。
(お前たちの弱味をにぎってしまったおれだ。末永く面倒をみてもらおうよ)
酒巻重八は、むろん小野伝十郎のせがれ兵馬ではない。
すべては、玉屋平兵衛の恐怖が生んだ錯覚だったのだが、平兵衛にしてみれば無理もないところか——。
(それにしても……)
水筒の酒をのみほして立ちあがり、酒巻重八は、
「あの、平兵衛というやつ……まさにただ者ではないな」
つぶやいた。
「おもしろい」
さらにつぶやく。
「ふむ、おもしろい。歯ごたえのあるやつをたたき斬るのは、おもしろい」
夕暮れに、酒巻重八は熱海へはいった。
湯けむりが道々に立ちこめている熱海の町を歩きつつ、
(こんどこそ、逃がさぬぞ)
にやりと重八は笑った。
糸川あたりの坂を登ったところにある角兵衛の湯の看板を酒巻重八が見上げたとき、玉屋平兵

衛、いや町人姿の松山宗之助は、今日くるか明日くるか、と、おきんの豊満な白い躰を思いうかべつつ、夕飯の膳に向かっていた。



# 解　説

池波正太郎さんの小説をよむのはたのしみだ。その理由は四つある。ひとつには、まず、私はよくできた小説をよむのがなによりも好きだからだ。

もうひとつには、私は映画がとても好きだからである。池波正太郎さんの映画好きは『映画日記』や『映画を食べる』でお馴染だ。といっても、私はなにしろ最近では一か月にいちど映画をみられれば幸せ、という非人間的な境涯におちてしまった上に、目がよわくて、つづけて二本映画をみると充血して目があいていられなくなってしまう、難儀な特異体質だから、とても「映画好き」などと名乗る資格はないかもしれない。また、仮にそうでなかったとしても、大体、池波正太郎氏に映画への情熱ではりあおう、なんて気を起こしてさしつかえないのは、淀川長治さんだけであろう。

だが、しかし、学生時代にはせっせと映画館に通った（そのせいで目をいためたらしい）し、それと本数こそ見ていなくても、映画というものが好きで、映画ときくと心が踊って、ぽっとあたたかくなることにはちがいない。

そういう自称映画好きの私としては、池波さんの小説をひろげるなり、必ずぱあッと目の前に

ひろがってくる、たいへんに映画的な光景がなんともこたえられない。池波さんの小説は、真の意味でカメラ・アイを内包している、日本ではきわめて少ない種類の小説である。その、たたみかけるようなテンポ、場面転換のここちよさ、歯切れよさ、というものも、これまたもたつくのを美徳としているような日本の小説、しかも時代小説の中に、よくこれだけの小気味よいスピード感をもった作家がいるものだ、と陶然とする。

このことについてはあとでもうちょっと言ってみたいが、池波さんの小説をよむ楽しみの三つめは、それがいやらしくないからである。いやらしくない、といっても、エロかエロでないかとは関係がない。池波さんの小説はたいへんに色っぽい。エロチックである。

そのくせ、ちっともいやらしくない。別にカマトトではないから濡れ場は嫌いではない。しかしときどき、いやらしい小説に出っくわすと憤然とする。濡れ場であろうとなかろうと、いやらしいのは大嫌いだ。そしていやらしいと思うのはどういう時かと考えてみると、まず作家がいやしい心根で、つまりは「受けよう」だの「読者サービス」だのと思いながら、必要もないエロ描写をつめこんでいるとき。次に、作家があさましい性根で、ということは、本来あさましい考えで女とか、性とか、情事とかいうものをいいかげんにしか見られぬ人間で、それが「うまいことをしてやった」式の性根でもって書いているとき。(これは、腹にすえかねますなあ)

そしてさいごに作家がどういうつもりでか、したり顔で得々と書いているときで、この三つに属するやつは、どんな文豪であれ大嫌いだ。きれえだ、きれえだ、でえっ嫌えだ、てなもんだ。



もっとも私の基準は人のとは少しちがうのかもしれない。たとえば、エロ作家右総代ふうに見られている、宇能鴻一郎さんなんかは、私はこの三つのどれにも属していないから好きな作家で、宇能さんが例の人妻一人称を書いていらっしゃると、わははは、といって楽しい。ああいうエロはさわやかで、ちっともいやらしくない。

池波さんの小説もまた、そのような、私の忌わしく思うすべてのいやらしさを決してもっていない。最近好きなことばなのだが「節操がある」のである。節操のある小説はいいなあ。節操のある人が書いた節操のある小説ならいうことなしだ。本人はこれぞプロ、と思っているのかもしれないが、生活のためにテクニックだけでこねあげた小説、節操のない、けたたましい、懐しさなんか薬にしたくもないしろものはもういい加減に絶滅してしまって、志の高い、胸のすくようなプロの小説だけがもっと増えてはくれないものか。

そして四番目。池波さんの小説をよむ、最大の楽しみは、私がたいへんな食いたしんぼで、(「食いしんぼ」と「食いたしんぼ」のちがいは、「食いたしんぼ」はとにかく食べることが好きで、お腹が一杯でも、舌で味わうことそのものにいつまでも未練たらたらなのだが、そのくせ可哀想に大食漢でなくてすぐに食べられなくなってしまう。そのぶん、一食一食に真剣にならざるを得ないし、いつでも食べもののことをああでもない、こうでもない、と考えているのだ——と、むかし友だちの「食いしんぼ」が教えてくれた)食べること、食べもの全般について、それこそ物凄い執念を燃やしているからである。

こんどは、どんなものを、主人公は食べているかな——いつ、どこで何を食べるかな。それを何よりも楽しみに、ワクワクしながら、テンポの早い快適なストーリーを追ってゆく。湯豆腐か、ねぎまか、それとも——

余談になるけれども池波さんがお書きになった「食卓の情景」。あんな好きな本はなくて、全編これドキドキワクワクの連続である。何しろ私が文章を書くようになって、最初にもった連載は、「本のおいしい食べ方」と題して、古今東西の文学の名場面、すなわちあの本の中で主人公がこれをたべる、「大地」の王竜のたべる麺は何麺であったか、「魔の山」に出てくるグリーン・オムレツは実にうまそうなのだが作りかたはこれこれで、といった内容であったのだ。生憎この連載は、雑誌がつぶれて、途中でポシャってしまったが、本や映画をそういうところから見てしまう習性は消えず、だから「三人吉三」という芝居は見ていて悲しいのである。ワキ役の坊主が鶏鍋をしようといって、シャモと野菜、それに酒をぶらさげて帰ってくる。「じゃあ奥でシャモをさばいてこよう」といって奥に入り、「出来た出来た」といって戻ってくると捕手である。あのトリはどうなったかしらん、食いそこねた坊主も気の毒のきわみだが、せっかく用意したトリはもっと可哀想だ、とそっちばかりにいらぬ苦労をしている。

それはともかく、そういう読者であるから、目を皿のようにしてよむ。すると、はたして、あるのですね、これが——この『江戸の暗黒街』は、池波さんとしてはその種の楽しみが少なかったが、それでも「おみよは見た」では、小平次が、酒と天ぷらそばを頼む。



せっかく頼んで、酒ものまず、そばも食べずに出ていってしまうのを、おみよは（かわいそうに……）と思うのだが、これはまことにかわいそうである。

「白痴」で、白痴の夫婦がにこにこ並んで焼芋を食べている、なぞというところも、「まことに、よろしい」。

「女毒」の伊三次が、しる粉好きで、「二杯や三杯ではすまぬ」というのなどは、それだけで、伊三次の人間が、すっかりこちらの胸にしみとおり、結末で、何ともいえぬほど安心する。たいへんよい心持になるのである。いっぽう「殺」で、昔の盗賊なかまの駒吉と松蔵が出会って、

「六郷蜆の味噌吸物や鯉のあらい、鶉の木の芽焼きなどで盃をかさねるうち……」

これは、実にうまそうだ。同時に、こうした食べ物を注文するのは、やっぱり、もう若くはない男だろう、さぞかし懐具合もわるくてはなるまい、となるとやはり昔はいろいろと……なぞと、いかにもらしく感じられてくるからふしぎである。

これではまるで何のために小説をよんでいるのかわからないではないか、と、書いていて少し気がさしてきたが、たぶん池波さんなら、こういう不届きな、食いけばかりの読者をも、きっと許して下さるだろう。けしからん、文学を何とこころえる、などと怒りはされないだろう。そういう安心感を与えてくれる何かが、池波さんの小説の行間には、たしかにある。お会いしたこともないのにさっきから池波さん、などと馴れ馴れしく書いているのも、そう書くのが何かとても自然で、池波さんの世界の何ともいえぬ懐しさ、慕わしさ、といったものには、他の呼びかけが

ふさわしくないような気がするからである。

池波さんの世界――それは、だから、私にとっては、たいへんにここちよい。池波さんの小説、エッセイ、それらを通じて感じとれる、池波さんご自身のものの感じかた、見かた、考えかた、それを私はとても好きなのだ。それは、こんな言い方が許されるなら、たいへんなまめかしい感覚であると思う。池波さんの食べものに関する描写、女性に関する描写、それらは何か、世界そのものに対して池波さんがいつも持っている、濃密でこまやかな、生き生きとした触感のなまめかしさをつねに読むものに伝えてくる。池波さんにとって、きっと、映画の一シーン一シーン、食事の一回一回、生きている時間の一分一秒は、すべてが「こたえられない……」くらいありありとして、なまなましく、たしかな――そしてきっと、いつまでも驚異にみちたものであるのにちがいない。

そうした、世界とのなまめかしい関係をしっかりと保っているからこそ、池波さんの世界は、他を圧して生き生きとしているし、そして節操があるのだと思う。一分一秒が驚嘆にみちているからこそ、一分一秒なりとムダにやりすごせない――節操がある、とはそのことを知っている人間のことなのである。

池波さんの世界はゆたかである。そして小気味よい。食べものの話が出てくれば歓喜してしまうし、映画そのままなその演出のよさには唸らせられる。だが、それらすべてにもまして、私にとって池波正太郎の魅力とは、結局そのような「生きた目」大生活者のまなざしにほかならない



ようであるのだ。

中島梓

## 池波正太郎

大正十二年（一九二三）―。東京浅草に生まれる。終戦直後、読売新聞の懸賞戯曲に入選して長谷川伸の知遇を得、東京都庁に勤めるかたわら、伸の主宰する新鷹会などに属して、戯曲、小説の執筆に励んだ。昭和三十一年以後、「恩田木工」「信濃大名記」等が直木賞候補となり、三十五年、「錯乱」で第四十三回の同賞を得た。戦国物、幕末物、江戸市井物など、多くの作品を発表している。

〔著書〕「戦国幻想曲」*「英雄にっぽん」*「幕末新選組」「侠客」「鬼平犯科帳」「人斬り半次郎 幕末編」*「人斬り半次郎 賊将編」*「にっぽん怪盗伝」*「堀部安兵衛」「近藤勇白書」*「夜の戦士」*「仇討ち」「江戸の暗黒街」「男のリズム」など。

＊印　角川文庫所収
＊＊印　角川書店刊

江戸の暗黒街

池波正太郎（いけなみしょうたろう）

角川文庫 4241

昭和五十四年二月二十日　初版発行
昭和五十八年五月三十日　九版発行

発行者――角川春樹
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所――旭印刷　製本所――多摩文庫
装幀者――杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-132312-0046(0)

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及渗透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日



三人の登場人物　笹沢左保
死化粧　渡辺淳一
自殺のすすめ　渡辺淳一
白い宴　渡辺淳一
酔いどれ天使　渡辺淳一
廃礦にて　渡辺淳一
恐怖はゆるやかに　渡辺淳一
無影燈（全二冊）　渡辺淳一
花埋み　渡辺淳一
冬の花火　渡辺淳一
わたしの女神たち　渡辺淳一
公園通りの午後　渡辺淳一
日本アパッチ族　小松左京
ウイング　小松左京
明日泥棒　小松左京
見知らぬ明日　小松左京
ゴエモンのニッポン日記　小松左京
果しなき流れの果に　小松左京
牙の時代　小松左京
最後の隠密　小松左京
復活の日　小松左京

見えないものの影　小松左京
宇宙漂流　小松左京
青い宇宙の冒険　小松左京
継ぐのは誰か？　小松左京
エスパイ　小松左京
怨霊の国　小松左京
御先祖様万歳　小松左京
時の顔　小松左京
鏡の中の世界　小松左京
神への長い道　小松左京
旅する女　小松左京
模型の時代　小松左京
青ひげと鬼　小松左京
三本腕の男　小松左京
短小浦島　小松左京
結晶星団　小松左京
地には平和を　小松左京
蟻の園　小松左京
明日の明日の夢の果て　小松左京
こちらニッポン（全二冊）　小松左京
ゴルディアスの結び目　小松左京

空中都市008　小松左京
原作　小松左京
シナリオ　高田宏治
脚本　深作欣二
G・ナップ
雑学おもしろ百科（既刊二冊）　小松左京監修
小説日本銀行　城山三郎
重役養成計画　城山三郎
風雲に乗る　城山三郎
イチかバチか　城山三郎
一発屋大六　城山三郎
価格破壊　城山三郎
鮮やかな男　城山三郎
大義の末　城山三郎
望郷のとき　城山三郎
成算あり　城山三郎
危険な椅子　城山三郎
うまい話あり　城山三郎
辛酸　城山三郎
百戦百勝　城山三郎
盲人重役　城山三郎
男たちの経営　城山三郎
零（ゼロ）からの栄光　城山三郎

アポロンの島　小川国夫
漂泊視界　小川国夫
一本の鉛　佐野洋
完全試合　佐野洋
直線大外強襲　佐野洋
透明受胎　佐野洋
華麗なる醜聞　佐野洋
二人で殺人を　佐野洋
赤い熱い海　佐野洋
金属音病事件　佐野洋
壁が囁く　佐野洋
第六実験室　佐野洋
金色の喪章　佐野洋
無効試合　佐野洋
野球が殺した　佐野洋
不幸な週末　佐野洋
賭の季節　佐野洋
ひとり芝居　佐野洋
蜜の巣　佐野洋
10番打者　佐野洋
地下球場　佐野洋

しかし殺人は…　佐野洋
I・N・S探偵事務所　佐野洋
感傷旅行　田辺聖子
女の日時計　田辺聖子
私の大阪八景　田辺聖子
あかん男　田辺聖子
浮舟寺　田辺聖子
女の目くじら　田辺聖子
おせいさんの落語　田辺聖子
笔にりんご　テーブルにお茶…
ほとけの心は妻ごころ　田辺聖子
言うたらなんやけど　全二冊
鬼の女房　田辺聖子
家出のすすめ　寺山修司
幸福論　寺山修司
誰か故郷を想はざる　寺山修司
さかさま世界史怪物伝　寺山修司
さかさま世界史英雄伝　寺山修司
書を捨てよ、町へ出よう　寺山修司
ポケットに名言を　寺山修司
さかさま文学史黒髪篇　寺山修司

馬敗れて草原あり　寺山修司
競馬への望郷　寺山修司
花嫁化鳥　寺山修司
さかさま博物誌青蛾館　寺山修司
さかさま恋愛講座青女論　寺山修司
地球をしばらく止めてくれぼくはゆっくり映画を観たい　寺山修司
戦争を知らない子供たち　北山修
さすらいびとの子守唄　北山修
男友達　河野多恵子
天然記念物の動物たち　畑正憲
われら動物みな兄弟　畑正憲
どんべえ物語　畑正憲
ムツ・ゴーロの怪事件　畑正憲
深海艇F7号の冒険　畑正憲
無頼の船　畑正憲
ムツゴロウのゆうびん箱　畑正憲
さよならどんべえ　畑正憲
人斬り半次郎（幕末編）　池波正太郎
人斬り半次郎（戦将編）　池波正太郎
にっぽん怪盗伝　池波正太郎



堀部安兵衛　全二冊　池波正太郎
近藤勇白書　池波正太郎
戦国幻想曲　池波正太郎
英雄にっぽん　池波正太郎
夜の戦士　全二冊　池波正太郎
仇討ち　池波正太郎
江戸の暗黒街　池波正太郎
西郷隆盛　池波正太郎
炎の武士　池波正太郎
男のリズム　池波正太郎
ト伝最後の旅　池波正太郎
戦国と幕末　池波正太郎
夫の論理・妻の論理　会田雄次
日本人の忘れもの　会田雄次
表の論理・裏の論理　会田雄次
回想アーロン収容所　会田雄次
原点からの発想　会田雄次
戦国残酷物語　南條範夫
宝石泥棒G・オハラ　南條範夫
元禄太平記　全二冊　南條範夫
黒い九月の手　南條範夫

家畜人ヤプー　沼正三
木かげの家の小人たち　いぬいとみこ
北極のムーシカミーシカ　いぬいとみこ
人蟻（ひとあり）　高木彬光
成吉思汗の秘密　高木彬光
刺青殺人事件　高木彬光
誘拐　高木彬光
破戒裁判　高木彬光
検事霧島三郎　高木彬光
人形はなぜ殺される　高木彬光
死神の座　高木彬光
ゼロの蜜月　高木彬光
密告者　高木彬光
黒白の虹　高木彬光
ノストラダムス大予言の秘密
肌色の仮面　高木彬光
失踪　高木彬光
死を開く扉　高木彬光
都会の狼　高木彬光
追跡　高木彬光
わが一高時代の犯罪　高木彬光

捜査検事　高木彬光
炎の女　高木彬光
連合艦隊ついに勝つ　高木彬光
二幕半の殺人　高木彬光
灰の女　高木彬光
脅迫　高木彬光
白昼の死角　高木彬光
死美人劇場　高木彬光
黒白の囮　高木彬光
花の賭　高木彬光
霧の罠　高木彬光
追われる刑事　高木彬光
裂けた視覚　高木彬光
断層　高木彬光
ハスキル人　高木彬光
影なき女　高木彬光
帝国の死角　全二冊　高木彬光
黄金の鍵　高木彬光
法廷の魔女　高木彬光
邪教の神　高木彬光
羽衣の女　高木彬光

波止場の捜査検事　高木彬光
神曲地獄篇　高木彬光
偽装工作　高木彬光
最後の自白　高木彬光
悪魔の火祭　高木彬光
ミイラ志願　高木彬光
一、二、三―死　高木彬光
幻の悪魔　高木彬光
女か虎か　高木彬光
神秘の扉　高木彬光
能面殺人事件　高木彬光
蛇神様　改稿新版　邪馬台国の秘密　高木彬光
大東京四谷怪談　高木彬光
殺意　高木彬光
呪縛の家　高木彬光
狐の密室　高木彬光
大予言者の秘密　高木彬光
妖婦の宿　高木彬光
片目の哲学　なだいなだ
無知の涙　永山則夫

ノンちゃん雲に乗る　石井桃子
太平洋ひとりぼっち　堀江謙一
特攻基地知覧　高木俊朗
殺意という名の家畜　河野典生
風の置手紙　桐島洋子
さよならなんてこわくない　桐島洋子
蒼空に出逢いを求めて　桐島洋子
女がはばたくとき　桐島洋子
増補改訂　少年愛の美学　稲垣足穂
日本のいちばん長い日　大宅壮一編
昭和怪物伝　大宅壮一
実録・天皇記　大宅壮一
帝国陸軍の最後　全五冊　伊藤正徳
連合艦隊の栄光　伊藤正徳
連合艦隊の最後　伊藤正徳
古典落語　全十一冊　落語協会編
くノ一忍法帖　山田風太郎
甲賀忍法帖　山田風太郎
伊賀忍法帖　山田風太郎
柳生忍法帖　全二冊　山田風太郎
信玄忍法帖　山田風太郎

忍びの卍　山田風太郎
江戸忍法帖　山田風太郎
忍法忠臣蔵　山田風太郎
風来忍法帖　山田風太郎
銀河忍法帖　山田風太郎
魔界転生　全二冊　山田風太郎
忍法笑い陰陽師　山田風太郎
忍法封印いま破る　山田風太郎
忍者月影抄　山田風太郎
海鳴り忍法帖　山田風太郎
くノ一紅騎兵　山田風太郎
伊賀の聴恋器　山田風太郎
忍者六道銭　山田風太郎
忍法破倭兵状　山田風太郎
忍法双頭の鷲　山田風太郎
自来也忍法帖　山田風太郎
忍者黒白草紙　山田風太郎
忍法鞘飛脚　山田風太郎
忍法女郎屋戦争　山田風太郎
魔群の通過　山田風太郎
妖異金瓶梅　山田風太郎



C席の客　眉村卓
わがセクソイド　眉村卓
あの真珠色の朝を…　眉村卓
なぞの転校生　眉村卓
ワルのり旅行　眉村卓
まぼろしのペンフレンド　ねらわれた学園　眉村卓
地球への遠い道　眉村卓
異郷変化　眉村卓
思いあがりの夏　眉村卓
燃える傾斜　眉村卓
幻影の構成　眉村卓
閉ざされた時間割　眉村卓
EXPO'87　眉村卓
奇妙な妻　眉村卓
重力地獄　眉村卓
飢餓列島　福島正実　眉村卓
変な男　眉村卓
産業士官候補生　眉村卓
出たとこまかせONAIR　つくられた明日　眉村卓

ショート・ショート一分間だけ　眉村卓
天才はつくられる　眉村卓
地獄の才能　眉村卓
ぼくたちのポケット　眉村卓
通りすぎた奴　眉村卓
ねじれた町　眉村卓
白い不等式　眉村卓
泣いたら死がくる　眉村卓
おしゃべり迷路　眉村卓
とらえられたスクールバス　既刊二冊　眉村卓
モーレツ教師　眉村卓
ぎやまんと機械　眉村卓
愛子　佐藤愛子
一番淋しい空　佐藤愛子
忙しい奥さん　佐藤愛子
ぼた餅のあと　佐藤愛子
悲しき恋の物語　佐藤愛子
朝雨女のうでまくり　佐藤愛子
アメリカ座に雨が降る　佐藤愛子
黄昏夫人　佐藤愛子
九回裏　佐藤愛子

総統のセレナード　佐藤愛子
束の間の夏の光よ　佐藤愛子
忙しいダンディ　佐藤愛子
さて男性諸君　佐藤愛子
加納大尉夫人　佐藤愛子
或るつばくろの話　佐藤愛子
躁鬱旅行　佐藤愛子
一天にわかにかき曇り　佐藤愛子
憤激の恋　佐藤愛子
愛子の小さな冒険　佐藤愛子
こんな幸福もある　佐藤愛子
黒の試走車　梶山季之
赤いダイヤ　全二冊　梶山季之
夢の超特急　梶山季之
悪人志願　全二冊　梶山季之
青いサファイヤ　梶山季之
傷だらけの競走車　梶山季之
夜の配当　梶山季之
非常階段　梶山季之
と金紳士　全四冊　梶山季之
一匹狼の唄　全二冊　梶山季之

野望の青春 全二冊 梶山季之
お待ちなせえ 全二冊 梶山季之
逃げるが勝ち 全二冊 梶山季之
日本人ここにあり 全三冊 梶山季之
虎と狼と 全二冊 梶山季之
どんと来い 梶山季之
濡れた銭 全二冊 梶山季之
復讐の弾道 大藪春彦
蘇える金狼 全二冊 大藪春彦
謀略空路 大藪春彦
戦いの肖像 大藪春彦
骨肉の掟 大藪春彦
破壊指令No.1 大藪春彦
死はわが友 大藪春彦
非情の掟 大藪春彦
野獣都市 大藪春彦
名のない男 大藪春彦
唇に微笑心に拳銃 全二冊 大藪春彦
奴に手錠を……！ 大藪春彦
無法街の死 大藪春彦
非情の標的 大藪春彦

優雅なる野獣 大藪春彦
処刑の掟 大藪春彦
沈黙の刺客 大藪春彦
俺に墓はいらない 大藪春彦
不屈の野獣 大藪春彦
血の挑戦 大藪春彦
赤い手裏剣 大藪春彦
野獣死すべし 大藪春彦
偽装諜報員 大藪春彦
男の墓標 大藪春彦
荒野からの銃火 大藪春彦
男たちよ 闘いの荒野に死ね
汚れた英雄 全四冊 大藪春彦
裁くのは俺だ 大藪春彦
殺人許可証No.3 大藪春彦
暴力列島 大藪春彦
孤狼の掟 大藪春彦
青春は屍を越えて 大藪春彦
日銀ダイヤ作戦 大藪春彦
マンハッタン核作戦 大藪春彦
復讐の掟 大藪春彦

殺しは俺の稼業 大藪春彦
極限の狩人 大藪春彦
狙われた野獣 大藪春彦
男（プロ）の掟 大藪春彦
傭兵たちの挽歌 全二冊 大藪春彦
非情の女豹 大藪春彦
残酷な童話 藤本義一
ちりめんじゃこ 藤本義一
珍魂商才 藤本義一
ちんぴら・れもん 藤本義一
胎児冷笑 藤本義一
舌先四寸 藤本義一
女橋 藤本義一
地下水脈 藤本義一
殺られ 藤本義一
牡牝の伝説 藤本義一
釘師 藤本義一
○（マル）物語 藤本義一
映像ロマンの旗手たち 全二冊 藤本義一
ちんぴら・ぼるの 藤本義一
西鶴くずし 好色六人女 藤本義一



攻撃の街 藤本義一
屁学入門 藤本義一
悪い季節 藤本義一
お天気師野郎たち 全二冊 藤本義一
旗を振る男 藤本義一
街に殺意が一杯 藤本義一
風塵地帯三好徹
腐蝕の構造 森村誠一
銀の虚城（ホテル） 森村誠一
分水嶺 森村誠一
夢の虐殺 森村誠一
大都会 森村誠一
虚無の道標 森村誠一
科学的管理法殺人事件 森村誠一
歪んだ空白 森村誠一
通勤快速殺人事件 森村誠一
影の分岐 森村誠一
殺意の盲点 森村誠一
幻の墓 森村誠一
暗黒流砂 森村誠一
虚構の空路 森村誠一

密閉山脈 森村誠一
むごく静かに殺せ 森村誠一
偽造の太陽 森村誠一
新幹線殺人事件 森村誠一
人間の証明 森村誠一
殺意の重奏 森村誠一
夕映えの殺意 森村誠一
日本アルプス殺人事件 森村誠一
霧の神話 森村誠一
高層の死角 森村誠一
凶水系 森村誠一
挫折のエリート 森村誠一
精神分析殺人事件 森村誠一
星のふる里 森村誠一
真昼の誘拐 森村誠一
企業特訓殺人事件 森村誠一
野性の証明 森村誠一
超高層ホテル殺人事件 森村誠一
異常の太陽 森村誠一
青の魔性 森村誠一
青春の証明 森村誠一

魔少年 森村誠一
蟲の楼閣 森村誠一
鉄筋の畜舎 森村誠一
黒い墜落機 森村誠一
異型の白昼 森村誠一
砂の碑銘 森村誠一
カリスマの宴 森村誠一
誘鬼燈 森村誠一
不良社員群 森村誠一
悪夢の設計者 森村誠一
黒魔術の女 森村誠一
虹への旅券 森村誠一
鍵のかかる棺 全二冊 森村誠一
恐怖の骨格 森村誠一
白の十字架 森村誠一
サラリーマン悪徳セミナー 森村誠一
ビジネス葉隠 森村誠一
こんな社員は失格する 森村誠一
反骨の思想 森村誠一
指名手配 森村誠一
東京空港殺人事件 森村誠一

雪の螢　森村誠一
火の十字架　森村誠一
花の骸　森村誠一
黒の事件簿　森村誠一
ドグラ・マグラ全二冊　夢野久作
少女地獄　夢野久作
空を飛ぶパラソル　夢野久作
わたしのいるわたし　池田弥三郎
ぼくはブレスリーが大好き　スターダスト・ハイウェイ　片岡義男
ロンサム・カウボーイ　片岡義男
スローなブギにしてくれ　片岡義男
マーマレードの朝　片岡義男
アップルサイダーと彼女　片岡義男
ラジオが泣いた夜　片岡義男
人生は野菜スープ　片岡義男
彼のオートバイ、彼女の島　片岡義男
味噌汁は朝のブルース　片岡義男
ボビーに首ったけ　片岡義男
コーヒーもう一杯　片岡義男
ときには星の下で眠る　片岡義男

波乗りの島　片岡義男
いい旅を、と誰もが言った　片岡義男
町からはじめて、旅へ　片岡義男
友よ、また逢おう　片岡義男
最終夜行寝台　片岡義男
限りなき夏Ⅰ　片岡義男
吹いていく風のバラッド　片岡義男
夕陽に赤い帆　片岡義男
俺のハートがNOと言う　片岡義男
and I Love Her　片岡義男
ターザンが教えてくれた　原作片岡義男　脚本内田栄一
シナ　スローなブギにしてくれ　リオ
北条政子　永井路子
万葉恋歌　永井路子
愛に生きる　永井路子
黒いトランク　鮎川哲也
憎悪の化石　鮎川哲也
黒い白鳥　鮎川哲也
死者を笞打て　鮎川哲也
風の証言　鮎川哲也
リラ荘殺人事件　鮎川哲也

積木の塔　鮎川哲也
死のある風景　鮎川哲也
人それを情死と呼ぶ　鮎川哲也
偽りの墳墓　鮎川哲也
砂の城　鮎川哲也
準急〝ながら〟　鮎川哲也
ペトロフ事件　鮎川哲也
裸で転がる　鮎川哲也
死が二人を別つまで　鮎川哲也
金貨の首飾りをした女　鮎川哲也
呼びとめる女　鮎川哲也
囁く唇　鮎川哲也
蝶を盗んだ女　鮎川哲也
自負のアリバイ　鮎川哲也
軍靴の響き　半村良
平家伝説　半村良
石の血脈　半村良
およね平吉時穴道行　半村良
わがふるさとは黄泉の国　半村良
亜空間要塞　半村良
亜空間要塞の逆襲　半村良

## 角川文庫　最新刊

続々・日本の首領（にっぽんのドン）　飯干晃一
グアム、サイパンのカジノ計画の巨大な利権をめぐり血を流す関西と関東のヤクザの雄。誰が日本の首領になるか！　490円

泥の文学碑　土屋隆夫
謎解きの興味に加え、文学的香気をも満喫できる表題作や名作「盲目物語」など秀作八編をおさめた珠玉の作品集！　300円

刺青物語（しせいものがたり）　高木彬光
火消の頭・新門辰五郎の娘およしの背中に舞う観音像が、江戸を戦火から救った！推理界の第一人者が描く歴史推理　260円

幻の島　笹沢左保
東京の南方海上に浮かぶ密島同然の孤島で、射殺死体が発見された。しかも捜査中の刑事の前で連続殺人が始まった　340円

諜報者たちの夜　門田泰明
日本の核基地化をもくろむ在日米軍。それに乗じて、日本列島占領計画が進行していた。緊迫した筆致で描く問題作　380円

レモン色の戦慄　J・D・マクドナルド　篠原慎訳
アメリカ・ミステリーのスーパー・ヒーロー、〈事件屋〉マッギー。巨匠ジョン・Dの超ベストセラー・シリーズ最新作　460円

東キャナル文書　光瀬龍
解き明かされた〈東キャナル文書〉に秘められた謎とは！祖先の足跡を求め、人類終焉の地、火星から旅立つ宇宙船　340円

生殖センターの殺人　加納一朗
生殖能力がある者は、精神コントロール剤を投与され、人口をふやすことだけに従事していた！　SF傑作長編小説　340円

裏がえしのインド　西丸震哉
悠久の歴史を刻んだインド一万余キロを駆けめぐり、とらえどころのない大国の諸相に触れた抱腹絶倒の探査記録！　340円

恋人よ　五輪真弓
少女期の話、歌との出会い、敬愛するミュージシャン、季節、人生について、自身のすべてを綴った第一エッセイ集　380円

## 角川文庫　最新刊

| | | |
|---|---|---|
| 能見正比古 | 血液型女性白書 | 女性の本質を明らかにし、各血液型ごとの女性の特徴を、具体的な例をまじえながら解説した幸せをよぶ血液型の本　380円 |
| 堀内孝雄 | ひと握りの友へ | 子供の頃の話、歌を始めた時の話、そして愛、人生、出会い、旅。堀内孝雄が心の中のすべてを語る素敵なエッセー　340円 |
| 赤川次郎 | 死者の学園祭 | 学園に忍びよる恐怖の影。一人一人女生徒が消される！十七歳の名探偵・真知子の活躍を描くサスペンス・ミステリー　340円 |
| 樋口清之 | 日本人の知恵の構造 | 私たちは本当に物まね民族で、エコノミックアニマルなのか？日本人特有の「知恵」を総点検した、定評の日本人論　300円 |
| 梶山季之 | 風変りな代償 | 作家志望の女子大生が謎の失踪！人生体験のためバーのホステスばかりが住んでいるアパートに引越した直後だった　340円 |
| 清水一行 | 悪の公式 | 懸命にすがりつく弱小業者を、法すれすれの卑劣な手段で平然と喰い物にしながら巨大化する悪徳商社の実態とは？　460円 |
| 広瀬仁紀 | 大銀行の内幕 | 美人秘書由美との情事に耽るエリート銀行員の背後に黒い罠が…。政財界の〝黒い霧〟をえぐる衝撃の長編経済小説　420円 |
| シューヴァル&ヴァールー 高見浩訳 | テロリスト | テロリストの凶行阻止のために編みだされた大トリックとは？圧倒的サスペンスでシリーズ十巻の最後を飾る傑作！　580円 |
| 小堺昭三 | 赤い風雪 | 大正昭和史を骨格にして、日本と中国大陸を舞台に、ロシアへの復讐鬼と化した孤狼右翼の凄絶な生き様を描く傑作　460円 |
| 水上勉 | 冬の光景 | 第二次大戦中の暗い時代を背景に、不本意にも父親となった「私」の苦悩と葛藤を赤裸々にえがいた自伝的長編小説　490円 |